その壁は薄かった

充椎十四

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東京都と東都が接触＆融合した建物（アパート）の住人♀と降谷の、かなり一方的な交流から始まる話。

ｐｉｘｉｖ様にて、０の執行人Ｙｅａｒに萌えと勢いのまま書きなぐった代物。

目次

その壁は薄かった

1／23 …… 1
2／23 …… 8
3／23 …… 15
4／23 …… 21
5／23 …… 27
6／23 …… 33
7／23 …… 39
8／23 …… 44
9／23 …… 49
10／23 …… 54
11／23 …… 58
12／23 …… 63
13／23 …… 69
14／23 …… 73
15／23 …… 78
16／23 …… 83
17／23 …… 86
番外編・某演説パロ …… 91
18／23 …… 94
19／23 …… 98
20／23 …… 102
21／23 …… 107
22／23 …… 113

２３／２３ ―――――――――――――――― 120
その壁を引き裂いた ―――――――――――――――― 126
コナン強襲 ―――――――――――――――― 134
その壁は高かった
その壁は高かった ―――――――――――――――― 148

その壁は薄かった
１／２３

日本人のほとんどは、よほどの風呂嫌いでなければ、風呂に入ると解放される。機嫌良く歌う者、寝る者、カップラーメンを啜る者、本を読む者……私はその中でもポピュラーな、風呂場で歌う者の一人だ。

「コーンに生まれたこの命」

シャキッと○ーンの懐かしいＣＭ歌を楽しく歌い上げたあとはやはり懐かしい強麺で謝りまくり、からすの子を途中から英語で歌う。最後にうめーっしゅで締めて浴槽を出た。

――風呂の薄い壁一枚隔てた向こう、作りが左右逆な部屋に暮らす男が笑い声を殺して腹筋を鍛えていると知らずに。

※※※

「お？　今週末も晴れか。うむうむ、執行日和ですなぁ！」

今週末に三度目の礼拝を予定している映画のタイトルは零の執行人。最後辺り「顔が良い」「風で乱れる髪が良い」「溢れでる雄み有難うございます」しか考えられなくなる降谷零全力プッシュ映画だ。私は腐女子だが赤安も安赤も安コも読まない派で、かつ夢女子だが降谷零に恋なんてそんな煩悩に満ちた想いは抱いていない。分かるか、降谷零はアイドルであり、エンジェルであり、神の依り代なのだ。人間ではない。よって貴く尊い。

つまり私が降谷零に抱く感情は恋ではなく信仰心、あむぴっぴとか恐れ多くて言えるわけがない。申し訳なさ過ぎてまじで震える。

最近は天気予報を確認するだけのでかい板と化しているテレビのスイッチを切り、いそいそ風呂に入る。

あー、本部へ郵便物あるんだったわ今思い出した。明日出勤したら即切手貼って郵政課にパスだな。でもその程度の事で私のわくわくは止まらない！　やめられない止まらない！

「やめられないやめられない」

ギャンブルはしてないけど、迎え酒は数えきれないほどしてきた。ちなみに男漁りに片思いと横恋慕はしたことがない。ぴっかぴかの処女でーすひゃっほー！

「はー……この年で処女守ってんのか……」

気持ち良く歌い上げた後、どっと押し寄せてきたのは無力感とか疎外感とかそう言った感情の波。

ため息は思いの外低く大きく響いた。

結婚したくない訳じゃない。女が多い職場だから男はすぐに指輪持ちになっていくし、私もお見合いパーティーに行ったりマッチングサイトに登録して男性と会ってみたりしているんだけど、交際には至らない。

早く両親を安心させたいという義務感だけで相手を探しているから、ってだけが原因じゃないことは分かってる——他人と一緒に暮らすのが無理だからだ。いくら好きになった相手だとしても、誰かと一緒に暮らすのは気が重い。

大学は私立。滑り止めだったから家から微妙に遠く、寮費が安かったのと寮生活に憧れて入寮した——そこが酷かった。二段ベッドで区切られた二人一部屋は頻繁にプライバシーが犯され、夜遅くまで終わらない大声の電話や音楽に物音。何度注意しても寮母さんに怒ってもらっても効果はなく、最終的に私は寮を出た。

他人の呼吸が聞こえると寝られない、なんていうトラウマだけ身につけて。

あと、結婚するなら公務員が良い……警察とかね。制服萌えなんだよ言わせるな。給料が安定してるのも魅力的だし、警察がダメなら海上自衛官あたり希望。ずっと船に乗ってて欲しい。亭主元気で外に出ててほしい。男は船、女は港でいたい……時々なら帰って来てくれても構わないけど、毎日一緒にいるとかは生理的に無理。

「別居婚許してくれる結婚歴なしで認知すべき子供もいない、低くても良いから年収が確実な警察官、どこかに転がってないかなぁ」

ぼそりと呟いたけど、そんな公務員がいたら飛び付く自信がある。でもいるわけないよね、そんな最高な要素を詰め込んだ同世代の男っ

て。前うちの受付にやって来た警察の幹部（３５歳）だって、顔はよかったけどバツイチこぶ付きなのに新人女性警官（２２歳）と付き合ってるって噂だ。若い子が好きってことじゃんこのスケベ！　変態!!　女も女で見る目がない！　あ、いや、もしかして顔だけで選んだ……？　それなら仕方ないか。

顔は大事だよね。顔が良ければだいたいの欠点はカバーできるし。

私だってアラン・リックマンの顔した男に迫られたら心が揺れる自信がある。性格がスネイプ先生でマッチョだけど腰が細くて山奥の学校で先生なんてやってて結婚しても同居期間は一年に一ヶ月もないようなセブルス・スネイプがいたら迷わず結婚する。

高望みしすぎ？　知ってた！

――止めよう。せっかくのお風呂タイムなのに、気が滅入るようなこと考えてたらダメだ。もっとワクワクするようなこと考えないともったいない。元気になれる曲にしよう。

「ババンババンバンバン」

いい湯だなを熱唱して湯から上がった。

――薄い壁の向こう。浴槽に肩まで浸かった男が、笑えば良いのか嘆けば良いのか分からないと言わんばかりの微妙な表情を浮かべているなんて知らずに。

※※※

執行されてお値段の高いご飯食べて帰って来たアパートのロビー、だいぶ表面が白く曇った金属製のポストが並ぶそこで会ったのは、なんとお隣さんだった。

数時間前にスクリーンで拝謁したばかりの神の御子フルヤ＝キリスト――彼にそっくりな容姿のこの人は本郷昇さんという。甘く優しげな造作はそこらの芸能人なんて目ではないレベルで整っていて、高身長なんだけど見下ろされてる威圧感を感じさせない柔らかな雰囲気が親しみやすさを感じさせる。安室さんがリアルにいたらこんな感じなんだろう。最高かよ。

本郷さんは実は声もフルヤ＝キリストそっくりで、こうして会って挨拶する度に神が降臨してときめきが止まらない。録音させて貰え

ないかな……常識的に考えて無理か。
「あっ、こんばんは！」
「こんばんは」
ぺこりと頭を下げた私に本郷さんも軽く頭を下げてくれ、車の鍵を手の中で遊ばせながらポストを確認した。届いていたのは葉書と封筒が一通ずつだ。
私もその隣のポストを確認し、婚活パーティー企画会社からのＡ４封筒を見つけて目が死んだ。
既に一度目と二度目の執行でグッズを買いきってしまった今日の私は何ら買い足す物はなく、おしゃれ優先の小さな鞄一つしか持っていない。つまり、婚活会社の封筒を鞄に突っ込むこともできず手に持ったまま本郷さんとエレベーターに乗り、部屋の前まで歩かねばならないということだ。
封筒には流麗な筆記体でクリタ・マッチング・サポートと書かれているうえ、会社の標語なんだろう『～生涯を共にする二人を結びつける～』とかさ、本当にさ、今は止めてほしかった。
こんな女性なんて選り取りみどりなイケメンの横で、一目で婚活パーティーの案内と分かる封筒を手に持って歩くとかさ、まじ無理……。地獄かな。すごく足が重いや。
扉を開けて待っていてくれた本郷さんに頭を下げてエレベーターに乗り込み、十数秒で一番上の階に着いた。開閉ボタンを押してくれている本郷さんにまた頭を下げながらお礼を言って我が家、３０２号室にそそくさ入った。封筒は靴箱の上に投げ捨て、よそ行きの服も財布とスマホしか入ってない鞄もベッドに放り投げて下着姿になり――風呂に直行した。
「あーこの世界はー！　ぁあ゛ーっ！　あーなったの色になるーっ！　ぅんがーっ！」
怒鳴るように歌いながら風呂の自動ボタンを押して浴室の椅子に腰掛け、化粧を落とす。すっぴんになったところでお湯張りの案内が「残りおよそ五分でお風呂が沸きます」ってアナウンスしてくれたから、今日の服をベッドでから回収し下着もネットに入れて洗濯機に

突っ込む。
　ふっと見た洗面所の鏡に映るのは全裸の女で、みっともない体型ではないとはいえツルーンストーンで涙が出そうだ。食べても太らないことを羨ましがられたのは昔の話、脂肪が付く部位は腹だけじゃない。
　長く重いため息を吐いてがっくりと項垂れてからノタノタ浴室に入る。ちょうど音声案内が「お湯張りが、完了しました」って言ったから「はいはい了解しました、ありがとう」といつも通りお礼を口にして、風呂桶で湯を掬い頭から被った。
　湯船に浸かれば始まる私のオンステージ、歌詞がうろ覚えだから歌うのを控えていた零を熱唱する。今日の私はひと味違う、風呂場にクリアファイルに挟んだ歌詞（ネットからのコピー）を置いていたのだ！
「真実はいつも一つでも」
　ふぇぇ、ましゃ格好いいよぉ。
＊＊＊
　降谷零には密かな楽しみがある。
『酒がのめるのめるぞー』
　施工の段階で不備があったのか、それとも経年劣化によるものか。隣の浴室の音がこちらの浴室に響くのだ。
「女性が歌う曲じゃない……！」
　たっぷりお湯を張った湯船に浸かりながら、背中を丸めて笑いをこらえる。四季折々、毎月酒をのむ理由を挙げていくこの歌の前は天国に行って帰って来た酔っ払いの歌で、それもまた降谷の腹筋を試してくれた。
　ここは降谷零でも安室透でもない、また別の偽名『本郷昇』名義で借りたセーフハウスは、飛び降りて逃げるにも隣接する建物まで跳んで逃げるにも便利なアパートだ。他人を巻き込みにくいという点からロビーのポストに部屋番号と住人の名字が明記されていることも気に入っている。
　――だから、単に『逃げやすい』安心感のあるセーフハウスでしか

なかったのだ。始めは。
四日から五日に一度利用するだけだったこの部屋の違和感に気付いたのは、ここを借りてから三週間目。なにやら風呂場から声が聞こえてくるような……まさか訳有り物件だったのだろうか、と頭痛を覚えながら風呂場を覗いた降谷の耳に届いたのは、やけにテンションの高い歌声だった。
『オッケー！　俺についてこい』
降谷でも知っている、世界的に有名な黄色いネズミモンスターの曲だ。そしてオッケーと歌い続けたと思えば一瞬で反省会が終わる悪役の歌、そして何故かンパカンパカと番組が変わり、んばばんばばファイヤーで終わった。
ザバリと湯船を出る音と『あーらよっ出○一丁！』という訳が分からない掛け声がし、浴室の扉を開けて閉める鋭い音が聞こえたあと静かになった。降谷は顔を押さえながら浴室の扉にもたれかかっていたが、しばらく後、頭を振りリビングに戻った。
「ポケ○ンで統一しろ……」
何を言えば良いのだろう。何か言うべきだと思い口にした言葉は、全くどうでも良いことだった。あと歌や物真似が上手いのに腹が立つ。
「いや、うちの風呂から変な物音はしたことないけど……」
「ここ古いアパートだけど、防音設備はしっかりしてるよ。横から音聞こえたことなんて一度もないし」
――降谷は階下の二部屋２０１号室と２０２号室の二人に話を聞きに行ったが、どうやら３０２号室の元気な歌声が聞こえるのは３０１号室だけらしい。
３０１号室だけこれほど大きく聞こえるのはおかしいのではないか、もしや前の住人が隣室の住人のストーカーだったのでは。降谷がそう考えるのも当然のことだったが、調べてみればきちんと原因があった。
３０２号室との間に貼られた防音ボードの糊が剥がれ、落ちていた。

「……うん。このままで良いな」
剥がした壁紙その他は元通りに直し、降谷は一人頷く。防音ボードを直すつもりはない。悪趣味であるとは分かっているが、その時既に隣人の歌声は降谷の楽しみと化していた。
あの無駄に上手くて選曲が古くて突っ込みどころ満載な歌声を聞く度、幸福感を覚えるのだ。平和な世界に生きている人がいる、その平和を守っている自分に満足感を覚えるのだ。

２／２３

隣室の歌声を聞くようになって半年以上が過ぎ――降谷が湯張り機を無言でお湯を張ってくれるものに変え水音を立てず入浴する技術を完璧に我が物にした頃だ。

『子供のハラワタ食べちゃった！』

浴室に響くデスボイスはとある絵描き歌……の替え歌だ。子供のトラウマになったのではとネットで大評判になった、「おかあさんと○っしょ」の放送事故だ。いや、絵を描いた本人に放送事故のつもりはなかったのだろうが、彼女が描いたのは――どう贔屓目に見ても可愛いマスコットキャラクターの面影がない地獄のモンスターだった。

それを懐かしいと感じるのと同時に、思う。

なぜそのチョイスなのか、と。

『シャナナナナナナ！　シャナナナナナナ！』

日本二大ホラー映画のコラボレーション、ホラーコメディ（）の主題歌を選ぶのも何故なのか。俊雄の呻き声の真似はいらなかった。心霊現象かと肝が冷えた。

『あいつが来るよ！　え、誰レスカ？　じゃなくて！』

デスボイス替え歌、ホラーの主題歌と来て少年向けアニメのＯＰ。それもわざわざ台詞部分まで再現して真似するこだわりぶりに、降谷の腹筋は小刻みに痙攣している。

『よっし風呂を上がるぜ！　俺は上がるぜ！　俺はやるぜ！』

気合いのこもった掛け声と共に湯船を上がる水音がし、同時に降谷のバスタイムも終わった。俺もやるか、と小さく呟いて。

その次もまた替え歌から始まった。

『お魚咥えたどら猫おっかけて』

包丁を投げてタラちゃんが死に、自転車がないから三輪車で突撃し、財布を忘れてスーパーで万引きする。替え歌を作る子供は残酷だ。

『ぼうやー良い子だ金出せや金がないなら靴脱げや～』

そして、熊の子は核戦争を目の当たりにする。腐ったご飯に冷たい

スープ、明日の希望は潰え立ち尽くす人々の姿、帰る家もなく路頭に迷う『ボク』。なんとも酷い替え歌だ。
『むかーしむかし、あるところに桃がどんぶらこっこ、どんぶらこっこー……川は流れてどこどこ行くの』
そんな導入があってたまるか。こんなに感動できない花の導入があるか。これで泣けると思っているのか。
彼女は人に聴かせるつもりなどないのだから、降谷が　　感動するか否かなど関係ない。だが、分かっていても突っ込まないではいられないのだ。風呂を出るときの掛け声が『よし、デュエルだ！』やら『ぷいきゅあ！』やら『退かぬ！　媚びぬ！　省みぬ！』やら、おおよそ女らしさや大人っぽさとかけ離れたものであることも。歌の合間の独り言が『養われてぇ』その他、聞く者の涙を誘う身体的コンプレックスに関する言葉であったりすることも。突っ込みを入れたいし、優しく肩を叩いてやりたくなるのだ。
そんなことをしたら降谷にはストーカーとして訴えられる未来が待っているわけだが。
――そして昨晩また、風呂場での独奏会ならぬ独唱会が開催された。
『コーチの、コーチの、コーチの想いが籠ってるんだからぁーッ!!』
いつも思うのだが、無駄に上手い。降谷の涙腺も少しホロリと来てしまった。
『山崎いちばーん』
なのに何故コロコロの下ネタアニメに飛ぶのか。ポリゴ○が可哀想だと思わないのか？　あんなにポ○モンを熱唱していたのに。ポケ○ンへの愛はその程度のものだったのか。
ミュ○ツーが再び逆襲を計画してもおかしくない裏切りだ。
何度も山崎を一番だと歌い上げ一息吐いた彼女の次の曲に予想はついている。一番繋がりで、懐かしいアニメソング。ならばあれしかない。
『今日から一番たくましいのだ』
降谷は湯船で拳を振り上げた。こんなに正解して嬉しいなんてし

ばらくぶりのことだ。そうだろうそうだろう、君の思考パターンなどお見通しなんだよ。全く世話のやける子だ。
『僕の子犬がいなくなった』
拍手を送りたい良選曲だ。だが今拍手をすれば間違いなく壁の秘密が白日の下に晒され、本郷昇はともかく降谷零の明るい人生は終わる。
今を我慢すればこの楽しみは続くのだ、耐えねばならない。
『Ｒｏｃｋ　ｙｏｕ!!』
完璧な発音で風呂を上がった彼女の物音が消えたあと、降谷は浴室の天井を見上げ、ぼんやりとした声で呟く。
「ああ、君の言う通りだ」
ハートを揺さぶられている。
※※※
今日もまた歌声のみコンサートが始まろうとしている。降谷は用意していたスポーツドリンクを一口飲んで腰湯に浸かり、今日のコンサートを楽しむ準備を終えた。さあ、いつでも来い。
『やりたいことより好きなのはやめられないこと』
今日彼女が歌うこれがなんという曲なのかは知らないけれど、その歌詞はまるで今の自分の背中を叩いてくれたように感じられた。職業病と言われればそうなのだろう、降谷の行動はどのような場面においても『それで日本を守れるか』が基準だ。全ては日本に暮らす人々の安寧のため、己や己の仲間でさえ踏み台にし、犠牲にし、殺しさえする。
止められないのは――辞められないのは好きだから。
『はー……この年で処女守ってんのか……』
とっさに口許にタオルを当て音を殺す。このバカ娘は何を言い出すんだ、と声のした方を見るが、当然ながら壁しかない。
『別居婚許してくれる結婚歴なしで認知すべき子供もいない、低くても良いから年収が確実な警察官、どこかに転がってないかなぁ』
まさか結婚相手に求める要素――それも異性の赤裸々なそれを聞かされるとは思わず、降谷は顔に困惑を滲ませる。入浴中の歌しか聴

いていない降谷ですら、彼女と一緒にいられれば楽しいだろうと思える。親しくなればきっと気の置けない素晴らしい仲になれるに違いない。

だというのに彼女が求めるのは別居婚。何故なのか。同居ができない理由でもあるのだろうか？

彼女の求める要素を満たす同僚や部下などなかなかおるまい、結婚したならば妻と同居したいと思うものだ。別居せねばならない理由がある者なら別にして。

『あー辛気臭いこと考えるのはやめ、やめ！　辛気臭さが一度体に染み付いたらタワシでも取れないんですよそこのところ分かってるんですか課長！　セクハラで上に訴えるぞ被害者に代わってお仕置きよ！』

お湯の表面を叩く様な音と独り言。

『はー。……ババンババンバンバン！』

半ば叫ぶような声で始まったいい湯だなを聴きながら、降谷は口許に人差し指を当てた。彼女の抱えるものを知りたいが、これは個人的な興味に過ぎない。故に仕事ではない。

これ以上彼女のプライバシーを侵害する行為を重ねて良いのか――常識的に考えて、現状ですら土下座だけでは済まないというのに。降谷はストーカーと言われても仕方のないことをしている。

悩んでいても日は昇り、また沈む。

『リスナーの皆様こんばんは、先輩へのセクハラがヤバい課長への殺意の波動が収まらない一日を過ごしてきました鼎彩子です。今晩まずお送りするのは皆様も大好きな、パラパラが猛烈な印象を残してくれたあの曲……恋はスリルショックサスペ◯ス。ではお聴きください――』

ラジオ司会風の始まり方はこれまでにも三、四度ほどあった。今晩はそういう気分のようだ。しかし『猛烈な印象を残してくれたパラパラ』とは一体何のことを言っているのか分からず、降谷は首を傾げる。手近に置いていたスマホで調べてみれば……ミュートのため曲がどのようなものなのかは分からないが、公式ＭＶが真顔の少年のパラパ

ラだったようだ。なかなか、いやかなりのインパクトがある。
『素晴らしい歌声でしたね～』
自分で言うな。
『では続いて次も迷宮なしの名探偵から……謎』
そしてＭｙｓｔｅｒｙ　ｏｆ　ｍｙ　ｈｅ○ｒｔで締める。今日は三曲で終えるようだ。
『へっへっへっ……明後日の土曜日は皆様もお楽しみにされているであろう、ましゃの歌声に惚れずにいられない零をお送り致します。わくわくしますね！　では皆様も残り一日、張り切って仕事を抹消しましょう！』
『カッコ良くてつよーい！』と言いながら風呂を上がって行った彼女と顔を会わせたのは、その土曜日。ポアロでの仕事を終えてアパートに顔を出した降谷に追い付く形で帰って来た。
「あっ、こんばんは！」
厚いガラス扉を押し開いて現れた彼女、鼎彩子は表情が良く動く女性だ。声は風呂場でなくても良く通るメゾに近いアルト――そして人に騙されやすそうな顔。そこらへんにいる善人を十人並べて平均を取ったような『まとも』さ。印象に残りづらく埋没しやすいのは確かにスパイ向きと言えるが、顔以外に適正はない。
安心して表面上の付き合いが出来る相手だ。
「こんばんは」
挨拶を交わしてからポストを確認する。入っていたのは住人らしさを演出するためのダイレクトメールとコーヒーショップからの葉書。その二つを取って場所を譲れば、鼎は軽く頭を下げて隣のポストを開いた。
入っていたのは「クリタ・マッチング・サポート」からの大判の封筒で、会社名の下には一目で婚活会社からの郵便物と分かるあからさまな一文が踊っている。
鼎の目が死んだ。心の柔らかいところに関する話題だ、流石の降谷にも彼女に掛けるべき言葉がない。脳内で涙目の鼎が「私の目が死んだ！　この人でなし！」と叫ぶ姿が想像でき、降谷の心も少し傷つく。

見えなかったふりをするのがお互いのためだろう。
沈黙の痛い数十秒を共にし、降谷は鼎が部屋に飛び込んでいく背中を見送る。
隣の湯沸かしの案内音声が聞こえ、降谷も自動湯張りボタンを押し浴槽に腰かけた。罵るような歌声が止まったと思えば足音がバタバタと去り、また戻ってくる。
『残り、およそ五分でお風呂が沸きます』
『はいはい了解しました、ありがとう』
自動の音声にわざわざ礼を言う、そんな彼女の育てられ方が素敵だと思う。
今日はゼロを歌うと言っていたが、降谷はそれがどのような曲なのか知らない。冷蔵庫からスポーツドリンクを持ってきて再び浴槽に腰掛け、浴槽に溜まっていく熱気を背中に感じる。
『完全なる正しさなどゼロなんだよ』
手の中のスマホで歌詞から歌を検索する。ゼロというのは今週三話目が放送される刑事ドラマの主題歌だそうだ。
――今日ばかりは、歌声を純粋に楽しめそうにない。降谷は立ち上がり浴室をでて、引き戸をゆっくり閉める。
そして脱衣所の壁に背中を押し付けずるずると座り込んだ。腕の中に顔を伏せ呻くように呟く。
「正義は明かりの当て方次第で変わる不確かなもの、知っていたさ。……知っているとも」
誰かの正義が別の誰かの悪で、誰かの悪が別の誰かの正義で。稀にある珍しいことというわけではない。良くある一般的なことだ。双方ともが被害者である、なんてこともありふれた話。
刑事ドラマらしい主題歌だ。誰もが知っているのだ、正義の逆は別の正義であることを。正義は悪にもなり、悪は正義にもなり……理想や正義は時に自らを傷付ける刃にもなることを。
顔をあげ、右手を開き――握る。
「だから俺は、俺の信じる正義を貫く」
けしてぶれることのない自らの正義を掲げて、走りきってみせる。

降谷の肩には日本の未来が、日本の平和が、日本の人々の命がかかっているのだから。

3／23

婚活案内事件から本郷さんと顔を会わせることはなく、気付けば一月半が過ぎていた。コナンのジャンルも映画による盛り上がりがだんだん落ち着きを見せ始めている。

特に盛り上がったのは夢界隈だろう、今回の映画では安室の女が大量生産されたから。でも腐だってもちろん負けず劣らずで、多くの作者方が雄み溢れる安室を右にしたり左にしたりしていたようだ。――でもフルヤ＝キリスト信者な私には安赤だろうが赤安だろうが降新だろうが安コだろうが縁がなかったし、もちろん夢小説ともなかった。

何故ならばフルヤ＝キリストこそ神の子。恋なんて俗っぽい想いを抱くことが出来るわけもない、いと貴き存在。だからフルヤ＝キリストが舐めるべきは怪我で血が伝う自分の腕であって野郎の一物などではない。そんな展開はお呼びではないのだ。去れ悪魔！　私はパンだけ食べて生きていくから問題ないんだ！

例えばだけれど、想像してみてほしい。口の端に血の跡を付けたフルヤ＝キリストを。色気が大爆発やばい神すごいやばい涙が溢れて止まらないレベルもはや怖い。語彙力に足が生えて逃げた。

素晴らしい音楽や美術で泣いてしまう人がいるように、私はフルヤ＝キリストが動いて喋るだけで泣ける。存在自体がもう神々しくて平伏したくなる。スクリーンに映るビーストモードはもうそのまま初号機に乗って新世界のアダムになれる間違いない文法も逃げた。にほんごわからない。

まあ、つまりだ。敬虔な信者たる私がすべきなのはフルヤ＝キリストを崇め奉り賽銭を投げて逃げることなんだと思う。彼に毎朝起こされたくて寿司ざんまいしたら肌が荒れた。原因は野菜不足。

「まろやか野菜ジュース」

風呂場にトマトジュースを持ち込み飲みながら、「ぽぴー！」と野菜ジュース洗脳ソングを歌う。ここ二週間ほど、ク○白ぶどうを泣く泣く止めて野菜ジュースを飲んでいるけれど、肌の調子はまだ戻らな

い。
「野菜ジュースだけじゃなくてＤＨＡの野菜酵素とかも飲んだ方が良いのかな？」
荒れた頬を揉みながらそう呟いて、はっと気付いた。
「ＤＨＡじゃなくてＤ○Ｃ……」
似ているから仕方ない。仕方ないったら仕方ない。
「ラヴィ！」
面倒が起きた時はラブ○ヴィッツかはっ○隊に頼ることにしている。今回はラブラ○ィッツ。言い間違いなんて無かった。無かったのだ。
きみ死ねはゲームとしては面白かったけど、実際に男が「君に振り向いてほしいから金魚のんだり吐いたりします！」なんて言い出したら迷わず縁を切る。たとえ少し気になる相手だったとしても即切る。金魚を取り出した瞬間にほのかに暖かな愛は失せる。
最後に懐かしいゲームの歌繋がりでピク○ンを静かに歌い、また明日の仕事と戦う気合いを込める。
「ガンダ○、いきまーす！」
嵐の日の波打ち際を思わせる勢いの良い水音を立てて風呂を出た。ガン○ムは宇宙だからこんな音はしないけど、まあ雰囲気で。
※※※
セクハラ課長による先輩へのセクハラが腹立たしい。先輩は課長のサポートも担当しているから逃げるに逃げられず、昼食まで一緒させられているのだ。昼時の先輩はいつ見ても表情が死んでいる。
セクハラする暇があるなら働けば良いのに。仕事に心砕いて愛を囁いていれば良いのに。
「働け働け働け働け」
終わらない就活中でへとへとになっていた時、高校の部活でお世話になった先輩から届いたライン。ＵＲＬで飛ばされたのはＹ○ｕＴｕｂｅ、「就職しや○れ」だった。キレた私が送り返したのは「パノプテ○コン労働歌」と「労働○Ｍ」。返事は「うるせぇ！」。それ以降、彼との交流は途絶えた。

今なら先輩の気持ちも分かる……二つとも耳に痛い。でも私は悪くない。謝らない。
「一万円札は、ただの紙！」
でもそのただの紙、紙ならぬ神の絵姿と交換できるんだ。諭吉の顔より降谷零の顔の方が好きだから後悔なんてないこともない。
「風呂入って速攻寝る計画ゥ！」
――課長を責めるつもりの選曲は自分の心を傷付けた。なにげないマンボがサンバ師匠の心を傷つけた。
最後は自分に優しい歌を歌って終えた。
「うん、大空を雄々しく駆ける鷲も、時には羽を休めることが必要なんだよ。問題ない」
今日は気合いを入れてお風呂を出るのは止めよう。出たらすぐ寝て、朝になったら体調不良ということにして仕事を休み二度寝するんだ。

壁を一枚挟んだ場所で疲れたように目を覆う男の存在なんて、私が知るよしもない。
※※※
今日はネタ曲を歌おうと決めていた。
「大きな林檎の木の下で」
ヒソカは高橋広○が当たり役、ミュージカルを見れば誰の目にも明らかだ。この曲自体は変態チックではないのだけれど、ねっとりとしたヒソカの歌声や笑い声のせいで「どこで歌っても恥ずかしい変態の歌」と化している。
――私は基本的に変態キャラが好きだ。私に変態キャラへの愛が芽生えたきっかけは、キャラ崩壊キャラソンとして伝説を持つあの曲『クフフのフ～○と契約～』。あれで目覚めた。
中学の時だ。友達が「これ無理……彩子にあげる……」と押し付けてきたキャラソンCDは格好付けたキャラクターが描かれたジャケットで、アニオタの彼女がはっきり「無理」と言いきるような物には見えなかった。そんな評価を受ける代物にがぜん興味を引かれた

私は鞄に忍ばせていたウォークマンで再生し――教室内の全員が振り返るほどの大音声で爆笑した。
酷かった。本当に酷かった。でも、この酷い曲で、暇潰しでしかなかったアニメが、正直に言ってどうでも良かった敵キャラが、鮮やかに色づいたのだ。
これをきっかけに、私は変態キャラと変態キャラのキャラソンに嵌まった。今ではキャラソンに限らずネタ曲が大好物だ。
「社交期の終わり間際夢も終わる」
背骨の後ろの裏と中というのはどこのことを指すのだろう。
「よっしゃ、いくぜ！　ワンツーサンシ」
まさに大事件でした。え、元歌は低音の方だろう何を言い出すんだ。かっこ錯乱かっことじる。
でも、何故だろう。私の勘が「最強○×計画」や「乳をもげ」は歌うべきではないと訴えているのだ。今までこういう勘に逆らって良い結果を得られたことは一度もないし、今回は止めておくべきだ。

壁一枚隔てた隣の浴室に、腹筋をブルブル震わせながらタオルに顔を埋めて声を抑えている男がいることなど、私が知るはずもなかった。
※※※
天気予報にも予測ができない霧雨が降った金曜日。全身しっとりとしてアパートに戻った私は、だいたい二ヶ月ぶりに隣人と顔を会わせた。神に愛されし御子・降谷零が受肉したような見た目の本郷さんだ。フルヤ＝キリストに似ているから顔が良くて声も良い。素晴らしい。
「こんばんは」
「こんばんはー」
悲しい事故からももう二ヶ月。元々お見合いパーティーには重い腰を引きずって参加していたこともあり、あれで私の心は折れた。
結婚はご縁ですよ、ガツガツ求めても縁がなければどうにもならんのです。偉い人はそれが分からんのですよ！　解約ボタンぽちー。

今回もまたエレベーターの開ボタンを押して待ってくれていた本郷さんにお礼を言いつつ乗り、微かに聴こえる彼の鼻歌に気付いた。
横目で見れば物凄く機嫌の良い彼。つい鼻歌しちゃうとか可愛いじゃないか。我が神の子もそういう可愛いげがあるんだけど、それは気心を許した仲間の前でだけ見られるレアシーンなのだ。こんな気軽にホイホイ私が聴けるようなものではない。ふぇぇぇ見たいよぉ同期組と一緒にいて鼻歌してるフルヤ＝キリストが見たいよぉ！
私の渇望は横に置いておくことにして、本郷さんだ。彼のことだから鼻歌しているのはメジャーなヒット曲に違いない。耳をダンボにして曲調を聴く。
ふんふふんふん、ふんふふんふん、ふんふふんふん。……ふたりはプリ○ュア？　私が昨晩熱唱したばかりの曲だ。何という偶然があったものか、昨晩のプ○キュアはフラグだったのだ。
それにしてもだ。こんないかにもリア充ですと言わんばかりな容姿の本郷さんにもオタクの気があったとは……なんともオタクに住みやすい世の中になったものだ。昔は幼馴染みのお姉さんがひっそり西遊記で便箋作ってたり、その影響を受けた幼馴染みが小学生ながら西遊記のラミカ作ってお姉さんとオンリーに参加していたり、その横で私はストー○オーシャンの連載を追って「ジョリーン頑張って！」なんて平和に過ごしていたり……私のことは横に置いておいて、とりあえずオタクというものは影の存在だった。
アニメ○トもかつては魔界の雰囲気を醸し出していて、連れていってくれたお姉さんを見上げたら戦士の顔をしていた。魔界に連れ込まれる私は売られていく子牛の気持ちを味わい、お姉さんの戦利品であるいち＊○キは普通の本屋では置いていないと聞いてまた恐怖を感じた。異世界の本を買いに来てるんだ、と。今考えるとピュアな子供だった。
それが今ではアニ○イトは普通の本屋さんのような明るさがあり、出入りのしやすさも段違い。こそこそ隠れるようにして入った当時の面影はない。世の中も変わったものだ。
「お休みなさい」

「お休みなさい」
本郷さんがオタクと分かって一気に身近に感じられ、部屋の前で手を振って別れた。何故か彼の顔色は青かったのは風邪だろうか？
「腹切れ貴様！」
ノリノリで歌う壁の向こうで頭を抱えしゃがみこむ男がいるなんて知っていたら、もっと酷い曲を選んでいただろうに。

４／２３

霧雨が明けた土曜日。安コ派であるという点以外は話の合う友人との約束のため、休日にも関わらず早く起きて出掛ける準備に追われた。

――安室目覚ましなんてものは存在しなかった。だから私の手元に安室目覚ましがないのは元々存在しないためであって、当然のことなのだ。目から出てるけどこれは涎だから泣いていない。

顔面を普段の三倍念入りに製作してから顎までである髪を丁寧にとかし、友人と並んでいて恥ずかしくない格好――私にしては気を使ったよそ行きを着る。

元々友人とはついったで交流があり、イベントで対面を果たしリアルでも会う仲になった。親しくなるうちに知ったのは友人の家庭環境で、彼女はなんと今をときめくＩＴ企業のご令嬢。服がどれもハイブランドでセンスも洗練されている、そう感じたのは勘違いではなかったのだ。

背伸びしてでも彼女と釣り合いたいなどと思っているわけではないし、彼女もそういうことを求めてきてはいない。だけど、こんな私みたいな女の横に、一目見れば誰でも分かるまばゆい輝きに包まれた女がいてみろ。元々みすぼらしいのが更にみすぼらしく見えるだろう。

生まれや育ちが全く違うのだ、彼女と釣り合いたいとは思わない。ただ、他人に「みっともない」とは思われたくない。

――鏡に写る私は合板の盾と紙の鎧を身につけて、戦場に向かう戦士の顔をしている。誰が見ても張りぼてだがないよりましだ。

「いざ参らん！」

気合いを入れてドアを開けたら本郷さんがエレベーターのある方からこっちを振り返っていた。

ドアを閉めて深呼吸をしもう一度ドアを開ければ、本郷さんがエレベーターを待っている背中が見えた。もう駄目だ……今日はもう駄目だ……。ふぇぇママのお腹に帰りたい。

のろのろと本郷さんの後ろに並んでエレベーターに乗り込む。この世は地獄です……カッコ良くて強いんじゃなくてタイミング悪くて辛い。本郷さんには恥ずかしい姿ばかり見られている気がする。絶対に残念な女だと思われているに違いない。ただの隣人ならどう思われようと構わないけれど、本郷さんはフルヤ＝キリストに似ている。フルヤ＝キリストに似ているから凹む。おお、神よ、お見捨てにならないでください……！

そして一緒にアパートのガラス扉を潜り、本郷さんは駐車場へ消え私は歩きで駅に向かう。原付を持っているため乗って行った方がもちろん速いが、ヘルメットを被ると髪型が乱れる。化粧も擦れる。直すのが面倒くさいから歩きで良い。

財布とスマホしか入ってない鞄を振り回しながら歩く――その私の横に白い車がゆっくりと並び、停まる。

車種はマツダのＲＸ―７の白、するすると開いた窓に肘をのせてこっちを見上げるのは本郷さんだ。後光が射している。

「狙ってんのか貴様……」

膝から崩れそうになった私なんて知らず、本郷さんはにこりと安室スマイルを浮かべ口を開いた。

「駅まで行かれるのでしたら同乗して頂けませんか？」

「後学のために是非、じゃなくて本郷さんがよろしければ是非」

頭の中は「なんとアールエックスセブン！　ウルトラセ○ンではなく！」「狙いやがって貴様良くやった誉めて使わす」「お前自分がフルヤ＝キリストにそっくりだって知ってて買っただろ私には分かる」と大騒ぎだけれど、空気の読める私は控えめに微笑んで本郷さんの親切を両手に握りしめた。

だが、できるなら助手席などではなく運転席の乗り心地こそを知りたい。ええい本郷め邪魔だそこをのけ、私をその運転席に座らせるが良い。神の子はこういうシートに座ってるのかと座席を撫で回してエンジン回す感触楽しんでハンドルに頬擦りしてエロティックにレバー握りしめてアクセルの踏み心地を確かめるから今すぐそこをのいて明け渡せ。

世の中間違ってる……なんでこんなそっくりさんがいるんだコナンカフェで働いてろ毎日通うわ。
「では、お邪魔します」
「はは、どうぞ」
高いだけあって背中を優しく包まれるようなシート、滑らかで揺れを感じさせない運転は車のスペックの高さもあるだろうが、本郷さんの運転スキルも大きいに違いない。
――悔しいほどリアル降谷零。何故こんなにも降谷零。こんなにも降谷零スキルを身につけたお前はもうすでに降谷零。フルヤ！崇めずにはいられない！
車で五分は歩いたら三十分、飛んでも八分なら歩いたら十五分。予定より二十分も早く駅についた。
何度もお礼を言って、駅前のロータリーから見送ったマツダＲＸ―７のナンバープレートは新宿３３０と７３―１０。
「わざわざプレートナンバーまで買った……だと!?　どんだけ拘るつもりだ凄いぞ本郷さん。良い仕事してますね！」
この爆上げなテンションを叩きつけるべく電車に乗り、職場とは真逆の待ち合わせ駅に着くのを待って――耳を疑った。
『次はー、杯戸ー。杯戸ー』
そんな駅名は今まで聞いた覚えがない。おいおいクールになろうじゃないか。東京にそんな駅名があったらコナンファンがこぞって聖地巡礼しだす、間違いない。鬼畜○鏡を思い出そう、御堂さん萌えの皆様が大喜びで御堂筋線の写真撮ってはブログにアップしていたじゃないか。
聞き間違いか言い間違いに違いない。この乗務員はコナンオタクなのだろう。
「杯戸……だと……？」
つい電車を下りてしまった。駅名は確かに「杯戸」、下に矢印で電車の進行方向と次の駅名「米花」の文字が踊る。目薬を差してしばらく目を閉じ、ハンカチで拭ってまた目を開けても、文字化けは変わらない。まさか東京都に実在する地名で、存在が当たり前すぎて誰も何も

言わないだけだった……？　いや、まさかそんな記念写真ぱしゃっとな。

かなえ　は　はいどのしゃしん　を　てにいれた！

こうなると駅全体の写真も欲しくなってくるもので、迷わず改札を出て杯戸駅を撮る。下から見上げるように撮ったり斜めに撮ったりと私は無心でボタンを押し続け、肩に手を置かれるまで時間を忘れて熱中していた。

「かなちゃんってば」

「ひょ!?」

手の主を振り返れば、緩く波打った薄い色の髪をポニーテールにした女性の姿。今日会う予定だった河崎すずかちゃん二十四歳だ……と思うのだが、どことなく雰囲気が違う。こんな糸目ではなかったし、肌はもう少し日に焼けて黒かったはずだ。そしてもう少し胸が寂しかった。

「すず……？　ブラのパット増やした？」

「やだ、かなちゃんったら！　久しぶりに会ったと思えば一言目がそれなんて、もー。増やしたりなんてしてないわよ。でも幸せ太りならぬ幸せ増量はあるかもしれないわね……。婚約したのよ。今日はそれについて話したくて」

「まじで？　え、その顔ってことは好き合ってだよね。おめでとう詳しい話は喫茶店で問い詰めるから精々首筋を良く洗っておくことだ覚悟しておけ」

キャッ★　とか頬に手を当てて恥じらうすずに肘鉄をお見舞いして、喫茶店を探そうと声を掛ける。

始めの違和感はきっと、彼に似合う自分になりたくて美白と豊胸に気を付けだした……というところだろう。健気だ。私にそんな健気さはない。

「喫茶店なら一ヶ所、行ってみたいところがあるの。妹がそこの常連でね……店員さんが格好良いんですって」

「じゃあそこにしよう」

この辺りに来るのは初めてだし、変にリクエストして困らせるより

詳しい人に任せてしまう方が良い。店員の顔面なんて塵ほども興味はないし、コーヒーがあってメニューがあってソファーがあるならどこでも良い。
　すずの車に乗り十分弱、着いた先は喫茶ポアロ。
「え？」
「ここよ。美人の店員さんとイケメンの店員さんがいるんだって何度も聞かされたんだけど、一人で行くのもなんじゃない？」
「え？」
「入りましょ」
　視線の角度を変えれば二階に毛利探偵事務所の文字。
　……なんだ夢か、夢だったのなら仕方ない。すずの肌が白くなっているのも胸の増量が成功しているのも婚約したというのも夢だったのだ。謎は全て解けた！　真実はいつも一つ！
「いらっしゃいませ」
「なんでほんg」
「二名様ですね、お席にご案内いたします」
　何故本郷さんがここにいるのか。あまりにも本郷さんがリアル降谷過ぎて夢のフルヤ＝キリストが本郷さんで現れてしまったことに憤まんやる方なし。私は神の子を見たいのであり、本郷さんのイケてるツラを眺めたいわけではない。
　せっかくの夢だというのに全く期待外れだ。夢の中でくらい降谷零を見せてくれ今宵の私は零に餓えている。
「本当にイケメンね……安室さんって仰るそうよ」
「ワーソウナンダー」
「ハムサンドが絶品なんですってよ」
　にこにこと微笑むすず、何かを訴える瞳の本郷さん、カウンターに座る興味津々のサスペンダーボーイ。私は本郷さんを安心させるように微笑んだ。大丈夫だ、夢の中だからと言って人道に反したことはしないとも。
　もしこの夢に本郷さんじゃなくて降谷零が登場していたのなら足元に平伏して見下してくださいと叫んでいただろうけれど。

「おう、あんちゃん、ハムサンド一丁」
「かなちゃんここは喫茶店よ」
何かを堪えようとして酷い顔になっている本郷さんに、親指を立ててウィンクしておいた。夢の中でも自制の利く私、なんと凄いんだろうか。

5／23

何故かサスペンダーボーイ・コナンくんが「あやこお姉さん久しぶりー！」とこっちに駆けてきたことに恐怖を覚えた。知り合い設定とかなにそれ聞いてない。ゲーマスは事前知識をよこすべき。
「久しぶりね、コナンくん」
しかし名探偵が話しかけたのは私ではなくすずの方で、しかしすずの名前は河崎すずかであってアヤコではない。夢の中だからと言って友人と自分の名前が同じになるなんて……あるのかもしれない。何故ならはこれは夢だから。夢の中ならば現実ではあり得ないことも普通にあり得るのだ。
「あやこお姉さん、このお姉さんはお友達？」
「そうよ。――かなちゃん、この子は江戸川コナンくん。妹の友達の弟みたいなものよ。コナンくん、このお姉さんは鼎彩子。私たち、同じ名前だからお互いに名字を短くして呼んでるのよ」
「鼎お姉さんです。よろしくね」
すずの呼び名の由来はいつの間にか名字ということになったらしい。
「あやこお姉さんの名字は鈴木だからー……じゃあ、すずって呼ばれてるんだね！」
「そうそう。かなちゃんからだけの呼び方なのよ。良いでしょう？」
すずちゃんの名前は鈴木あやこ。漢字は分からないが覚えた。
「お二人は素敵な仲なんですね」
お盆でコーヒーを持ってきた本郷さんが会話に加わる。これだからイケメンは。そのスキルレベルマックスのコミュ力が羨ましい。すずが初対面かつ似た年頃の異性からの発言に照れた様子で笑う姿も金持ちのコミュ力を感じさせる。
コミュ力はどうすれば鍛えられるのだろう？　気合いと根性でどうにかなるなら病院はいらない。
「あ、安室さん！　安室さんは鼎お姉さんとお友達だったりするの？」
「おや、どうしてそう思ったんだい？」

「目と目で通じあってるように見えたからね」
　コナンくんは子供らしくない顔で本郷さんに私たちの仲を訊ねた。少しはそういう表情を隠す努力をした方が良いのではないかと思えるが、すずが何も気付いていない様子を見るに、夢の中的演出の一つなのだろう。
「君が気にするほどのことじゃないさ」
「えー？　ボク聞きたいなぁ。気になるぅ」
　本郷さんに絡むコナンくんの声が素晴らしいほどに高山み○みで耳が幸せだ。こんな幸福があって良いんでしょうか!?　良いんです楽○ポイントを８０００ポイントも貰えるのはそういうキャンペーンだから。
「えーっと、コナンくん？」
「あっ！　鼎お姉さんが教えてくれるの？」
「うん。彼と私は前にも別の喫茶店で店員と常連客だったことがあってね……。さっきのは『ご注文は、いつもので？』『こうして顔を合わせるのは久しぶりだな、過去の客だとしても顔を忘れないとは良い心がけじゃないか。いつものを頼むぜ』っていう意味だったのよ。声に出して注文してないのにコーヒーが来たのはそういうことなの」
「へ、へー……」
　本郷さんがお盆で顔を覆って震えているのは何故だろう。私としてはこれ以上なく上手いフォローだったと自負しているのだが。
「あら、じゃあかなちゃんは前から安室さんと知り合いだったの？」
「ほとんど喋ったことはないけどね。こう言うのもなんだけど、単に店員と客でしかなかったからさ」
　我ながら上手い！「安室と顔見知り以上の親しい関係ではないけれど、ある種の絆が存在する一般人女性」という立場をこれ以上なく素晴らしく演じられている！　今年の助演女優賞はぶっちぎりで私のものだ！
　金田一で殺人事件を起こしてもこれならバレない。間違いない。
「これからは親しくして頂けると僕としては嬉しいですね。前の店は少し堅苦しくて……こうして会話ができるような雰囲気ではありま

せんでしたから」
　どうして本郷さんはフルヤ＝キリストにこんなにも似ているんだ。
「仲良くしてほしい」なんて良いながらはにかむ顔はまさに微笑みの爆弾、ダァンと胸を撃たれた私が頷かないはずがなかった。
　本郷さんさ、ほんとさ、分かっててやっているんだろう？　私知ってるから。その顔でそんな少し寂しげでこっちを窺うような笑顔を見せられて断れる人間はフルヤ＝キリスト信者ではない。
　つまらなそうにカウンターに戻ったコナンくんを見送り、お礼のつもりなのか無料のコーヒーおかわりと共にやってきたハムサンドを写真に収める。見た目からして既に美味が確定している完璧なアムサンドを写真に収めないでどうするというのか。ただ食べるだけなどという勿体ないことはできない。目に見える形でその名残を残しておくべきだ。
　安室さんではなく本郷さんが作ったのだとしても、この夢において安室さんの配役は本郷さんだ。よって本郷さんの手作りならばそれは安室さんの手作りなのだ。
　――ハムサンドの作り手が安室さんに変わった時、ハムサンドはアムサンドに変身する。まさにサナ○マンがイナズ○ンに変身するように劇的に変身する。
　いざ……全ての食材に感謝して……！
「シェフを呼んで」
「僕がシェフです」
「こんなに美味しいアムサンドは初めて食べました」
「ハムサンドです。そう言って頂けるととても嬉しいですね」
「はー、アムサンド毎日食べたいすごい」
「ハムサンドです」
「かなちゃんったら、そんなにここのハムサンドが気に入ったのね」
　すずの声を聞いて、喫茶店に来た理由を思い出した。
「そうだ、そうだった。すずちゃんのブーケトスの投てき目標を私にするっていう話をするために喫茶店に来たんだったよね」
「ごめんね、ブーケトスは妹にってもう決まってて」

な、なんだってー!?
「そ、そんな……すずちゃん私のトラがウマを食べた話知ってるでしょ……？　今を逃したら後はおひとりさまの老後って本を買うしかないんだよ？」
「妹が凄くごねたの……」
トラ×ウマはＣＰとしてノーマルすぎてつまらない。私はリス×トラこそ押したい。リスがトラを押し倒すなんて最高だろう私は大好きだ。
「くっ、親族の繋がりには勝てなかったか」
とはいえこれは夢。すずに結婚話など持ち上がった日にはすずの首を切り落としてやる私は本気だ。冗談っぽく話を締めてすずに恋ばなを促した。
「うちってホラ、鈴木財閥じゃない？」
知らなかった。すずはリアルでもイケイケなＩＴ企業のご令嬢なのに、夢の中では更にレベルアップして財閥令嬢なのか。すずの金持ち力はもはや５３０００００、資金力５でゴミカスの私とは大違いのようだ。
金持ちの世界は悪鬼羅刹が羊の仮面を被ってウフフオホホと笑いさざめいているものだというイメージがあるから私はサマージャンボが当たればそれで良い。継続的にウン十億円の収入なんて要らない、一時金で５００万兆円ほしい。
うんうんと頷きながら聞いていれば、すずはとつとつと話を続ける。お相手はなんと鈴木財閥と仲の良いやはり財閥のご子息。歳は近く眉が凛々しいが少し気弱なのが可愛いそうだ。星〇王子さまカレーより甘いノロケを聞かされて砂を吐きそう。
「……結婚式。式の出し物で私が一曲歌う枠をとっておいてくれる？」
「かなちゃん！」
祝ってやる。末永く爆発すれば良い。
「結婚式は来年……ってことは、婚約期間一年も置くの？」
「うん、彼の身内に不幸があったから」

「身内の不幸なら仕方ないね。でも私は早くすずちゃんのジューンブライドが見たいな」
「えへへ、ありがとう、かなちゃん」
　そうしておめでたい話もネタが尽き、まだまだ時間を持て余した我々は一つの結論に達した。
　カラオケに行こう。
「我々を真の意味で解放してくれる場所はカラオケボックス、あそこを置いて他にない」
「今すぐ行きましょう、近くに良い店があるの」
「黄金のお饅頭の備蓄は大丈夫か？」
「大丈夫だ、問題ない。よ」
　普通に外で使っても問題ないクレジットカードも持ってるから、と頷いたすずに恐怖を覚える。普通に外で使ったら問題のあるクレジットカードとは何なのか。ブラックか？　ライオン〇クラブか？
　それとも私の想像の範囲を飛び越えた凄いカードがあるのか。
　金持ちへの恐怖におののいていた私の視界の端に本郷さんの姿が映る。物言いたげで物欲しげで、寂しそうなあの顔は――カラオケに行きたがっている。間違いない。
　ああ、その顔を原作かアニメで見たかった。どうしてフルヤ＝キリストの配役が本郷さんだなんていうどうでも良い夢でその表情を見なければならないのか。青山大先生かアニメ絵ならロック画面に登録するのに何故本郷なのか。
　いくら「降谷零をリアルにしたらこういう顔をしているであろう」と誰もが思う顔だとしても、本郷さんは降谷零ではない。私が求めているのは代替物ではなく本物、どれだけ似ていようとも別物なのだ。
　分かりやすく言うなら、このショックは初回限定特装盤を買ったはずがまさかの欠品で通常盤が届いた時に似ている。
「会計お願いしまーす」
　それぞれ自分の分を支払い店を出る。コナンくんは付いてくる様子がないし、この様子ならカラオケボックスで殺人事件が起きることはないだろう。

まだまだ今日は終わらないぜ。

6／23

ポアロでのアルバイトしか予定を組んでいない土曜日――昨晩の独唱会のお陰もあって楽しく部屋を出た俺の背後で、ガチャリと鍵の回る音がした。

世間に胸を張って言えない理由で彼女を気に入っている俺は振り返ろうと体を捻りかけ、しかし寸でのところで堪えた。

「いざ参らん！」

向かう先は戦場と言わんばかりの掛け声はいぶし銀な老将軍を思わせる。そして外廊下に踏み出す足音、「えっ」という小さな声と後ずさりして室内に戻る音、ドアが閉まる音。

ここが外でなければ天を仰いでいただろう。もしくは両手で顔を覆っていただろう。彼女は俺の腹筋を狙っているのか？　そんな訳はないと分かっているが、こうして頻繁に腹筋をつつかれてはそうも言いたくなるものだ。

再びドアの開く音が聞こえ、エレベーターを待つ俺の後ろに彼女――鼎さんが並ぶ。三階に着いたエレベーターに乗り込みパネルの前に立てば横目に見える彼女の姿。

まるでデートに向かうような格好だ。髪は丁寧にすかれて艶々輝き、血色が良くナチュラルな化粧は柔和な雰囲気を漂わせる。花柄のワンピースに薄い藤色のカーディガンが素朴さを親しみやすさに昇華させ、多少自分に自信のない男でも「手が届きそう」と思えるような印象を与える。

間違いない、彼女が向かおうとしているのは婚活パーティーか見合いだ。あの封筒の送り主、クリタ・マッチング・サポートなるあっせん会社の企画に違いない。

特に華やかさがあるわけでなく十人並べば埋没しそうな顔に柔らかさの足りない骨張った体つき、女子の平均を五センチは上回ろう長身。本人はそれを欠点と思っているようだが、それは欠点でもなんでもない。単に相手の好みと合致するか否かという問題だ。

それに、彼女と時間を共にするのは絶対に楽しい。こんなに愉快な

性格なのだ、笑いの絶えない毎日を過ごせることは間違いない。少しでも彼女を深く知れば必ず分かる――彼女はとても魅力的で素敵だと。

共にガラス戸を潜りアパートを出たが、彼女は歩きらしくすぐに別れた。オーナーのこだわりでガレージになっている駐車場は防犯という面でもセーフハウスという面でも利点があり、また直射日光や風雨から車を守れるという面でもこのアパートは最良の選択だった。

ガレージのシャッターを開け、余暇と金を注ぎ込む愛車と対面する。瞳を閉じ起動を待つＲＸ―７のボディーは純白、何にも染まらない輝きを放っている。

ゆっくりとアクセルを踏み公道へ出れば、機嫌良く鞄を振り回しながら歩く鼎さんの姿があった。ポアロのシフトへはまだ時間の余裕がある……最寄り駅まで彼女を連れて行ったとしても、だ。これを期に親しくなれば「作りすぎたのでお裾分けでも」で「一緒にカラオケいかがですか」からのタンバリン激打ができるはずだ。

徐行で横に並び声を掛ければ迷わずどころか「是非」という返事で、鼎さんの危険意識の低さに少しばかり頭痛を覚える。俺が悪い男だったらどうするつもりなのだろう。

助手席に座った彼女の目はメーターやハンドル、サイドレバー等をくるくると動く。――これでも顔が良い自覚はある。組織の任務で女性を横に乗せたことは何度もあるが、たいていは車よりも俺を見てきたものだ。だが、鼎さんの関心はＲＸ―７に対してのみ。運転してみたそうに足元やシートをチラ見されるなんて初めての経験だ。

「美男過ぎる……ＲＸ―７たん……」

車をそんな愛称で呼ばれるとは思いもしなかった。人外萌えなのだろうか？　人の趣味をとやかく言うつもりはないが、先ずは隣にいる人類の美男を褒めてくれても良いはずだ。乗せているのは車だが乗せた車を運転しているのは俺だろう。

駅前では純和式お辞儀合戦がしばらく続き、手を振って見送る鼎さんに少しほっこりと心暖かくなりながら別れ、今日の交流はそれで終わった。

そう思っていたのだが。
「いらっしゃいませ」
何故ここにいる。客として来たことは分かっているが何故ここにいる。君のことだから見合い会場で「アラン・リックマンをください」とか言っているものだとばかり思っていたのに！
セーフハウスでの名前を呼びそうになった彼女を遮り席に促せば、ドヤ顔で頷かれた。分かっているぜと言わんばかりの表情は頼り甲斐に溢れている。本当に頼れるのか疑問でしかないが頼る他ない。
「おう、あんちゃん、ハムサンド一丁」
「かなちゃんここは喫茶店よ」
こいつは俺をどうしたいんだ!?　恨みでもあるのか、いや、知られれば嫌悪だけで済まない行為はこっそりやっているがまだバレていないはずだ。こんなことをされて笑わずにいられるはずがないだろう。冗談ではない、ふざけるのは風呂場だけにしておけ。
こっちは安室透の顔を保とうと必死だというのに。止めろ、親指を立ててウィンクするんじゃない。
カウンターの中に逃げ込みコーヒーをドリップする。
「くそ、こんな笑撃なんて求めてないぞ……」
湯を注ぐ度にふくらむコーヒーの粉を見下ろしながら暴れる心臓と震えたがる横隔膜を宥める。深呼吸を繰り返して「安室透」の仮面を被り直し、二人分のコーヒーを盆に並べて鼎さん達の会話に混ざる。
恐ろしいことにコナンくんが彼女達に話しかけている――彼の手にかかれば、セーフハウスの場所や別の偽名についても根掘り葉掘り穴だらけにされてしまう。
「あ、安室さん！　安室さんは鼎お姉さんとお友達だったりするの？」
俺が話しかけたことでコナンくんの標的は俺に変わった。流石に初対面の女性を質問攻めにするほどには常識を忘れていなかったらしい。
「おや、どうしてそう思ったんだい？」
「目と目で通じあってるように見えたからね」

そうだな。あからさまにウインクしていたからな。
「君が気にするほどのことじゃないさ」
「えー？　ボク聞きたいなぁ。気になるぅ」
子供っぽく駄々を捏ねるコナンくんにどう誤魔化すか苦笑を浮かべた、その時だ。彼女が動いた。
「えーっと、コナンくん？」
止めろ、俺のためを思うなら口を開かないでくれ。頼む。ＲＸ―７を運転しても良いから黙っていてくれ。
「あっ！　鼎お姉さんが教えてくれるの？」
コナンくんが顔を輝かせ鼎さんを見上げる。終わった……思えば、長い間彼女の歌声には助けられてきたものだ。だが今日であの生活にも幕引きか。味気なくなるな。
「うん。彼と私は前にも別の喫茶店で店員と常連客だったことがあってね……。さっきのは『ご注文は、いつもので？』『こうして顔を合わせるのは久しぶりだな、過去の客だとしても顔を忘れないとは良い心がけじゃないか。いつものを頼むぜ』っていう意味だったのよ。声に出して注文してないのにコーヒーが来たのはそういうことなの」
「へ、へー……」
なんという神対応。完璧だ。頼り甲斐に溢れた顔に嘘はなかった。だがそのハードボイルドな台詞は必要あったのか。
連れの女性が彼女と俺が親しい仲なのか訊ね、彼女はいいやと首を横に振る。
「ほとんど喋ったことはないけどね。こう言うのもなんだけど、単に店員と客でしかなかったからさ」
素晴らしい。しかしあまりにも完璧すぎるフォローだ……もしや彼女は俺の働きぶりを憐れに思った神様が日々の癒しにするが良いと遣わせてくれた、笑いの神か精霊なのではないか？　風呂場の壁に神棚を作らなければならないな。
「これからは親しくして頂けると僕としては嬉しいですね。前の店は少し堅苦しくて……こうして会話ができるような雰囲気ではありませんでしたから」

快諾を得て、俺はカウンター内に戻ってからガッツポーズした。
彼女にならハムサンドだろうがブーケトスだろうが元気で留守な亭主だろうが何でも用意しよう。元気で留守な旦那なら、風見あたりはどうだろうか。あいつは毎日残業で宿直室や仮眠室を自室にしているはずだし、「収入が安定した公務員で家に帰ってこない」という要素を満たすはずだ。
――待て。結婚したら彼女はあの単身用アパートを引っ越すことになるのではないだろうか。だからと言って風見に頼むのは駄目だ。嫁の入浴の様子を録音させろと命ずるなんて……それではパワハラではないか。
現時点で既にセクハラ沼に腰まで浸かっているというのに、パワハラまで重ねてしまってはもはや言い逃れができない。
「我々を真の意味で解放してくれる場所はカラオケボックス、あそこを置いて他にない」
はっきり言ってついていきたい。さっき目と目で通じ合えた奇跡を再び起こさんと目で訴え――無視された。
「今すぐ行きましょう、近くに良い店があるの」
「黄金のお饅頭の備蓄は大丈夫か？」
「大丈夫だ、問題ない。よ」
「そかそか。会計お願いしまーす」
去っていく彼女の背中を寂しく見送る俺に、まだ店内にいたコナンくんが話しかけてきた。
「本当にただの常連と店員の仲だったの？」
見下ろせば興味津々と目で訴えるコナンくんの姿がある。
「……そうだな。ただ普段は、僕の方が客なんだけどね」
既に見えない彼女の姿を探し外を見る。外は街行く人々が通りすぎるばかりだ。
いつも独唱会を聞かせてもらっておいて、カラオケまでもというのは虫の良すぎる話だったのだ。好感度を上げてタンバリンスキルをアピールし奉納を重ねたうえで、こちらから誘うべきだった。
――次は、間違えない。先ずはそう……ハムサンドの差し入れから

始めよう。

7／23

カラオケからの帰り、送ってもらった先は米花駅。もろちん、間違えたもちろん写真を撮りまくった。夢の中であろうが関係ない。唸れ私のマイクロSDカード！　ガイアが俺にもっと輝けと囁いている！

とりあえず電車に乗っていれば最寄り駅に行けるだろうということで電車に乗った。思った通り着いた最寄り駅からスキップでアパートに帰り、ポストを確認して何も届いていないのを見て我が家に倒れ込む。

「あー……そうだわ」

歌おうと思っていたのに歌い忘れた曲が何曲かある。

「死してなおこの世に未練遺せしは」

野村○斎は良い醤油顔。

「アラーアラーアラーアラーアラーアラーアーラー」

ドナルドは鬼畜だ。なにせ他の仲間を潰して自分だけ生き残ったのだから……。ハン○ーグラー、フライ○ーキッズや市長たち、彼らはその存在を忘れられて久しい。バー○ィーも可愛かったのに今では誰それ扱いだ。

ドナルドだけが残ったのは彼が「つい殺っちゃった」結果だろうが、それなら先ずドナルドを抹殺すべきだったのだ。――気が付いたら、突発的に、ついうっかり仲間を殺すドナルドと比べれば、体が勝手に風呂場に行く大神隊長はまだ可愛い方だろう。

でもセクハラは犯罪ですよ隊長。

「キープだ牛、呑ま呑まイェイ！」

今日は呑んでない。嘘じゃないもんほんとだもん。トト○はいるもん！

カラオケで掠れた喉も浴室の湿気で完全回復、浴室にはリ○ュネが掛けられているに違いない。いつも通り楽しく歌い上げて風呂を出た。

――その壁の向こう側、天井に近い位置。そこに米と塩と御神酒が

並ぶ棚があるなんて、私が知っているわけがなかった。
※※※
土曜日は一日寝て消えたらしい。目を覚ましたら日曜日の早朝で、すずからのメールと電話がすごい数になっていた。
布団の上で正座して電話を掛ければ、3コール目ですずが出た。
『心配したんだよ』
「ごめん……本当にごめん」
『三十分たっても待ち合わせ場所に来ないし、電話してもラインしても全然繋がらないし既読もつかないんだもの』
「すみません寝てました……」
『もうっ！……でも、かなちゃんが元気で良かった！　うっかり生活費を安室さんに注ぎ込み過ぎて死んだのかもなんて思ったよ』
「神の子フルヤへのお布施は毎月定額五万って決めてるから大丈夫。心配してくれてありがとう、すずちゃん」
そうしてペコペコ謝り倒し礼も繰り返し、通話を切った。私としてはそれほど疲れている自覚はなかったが、どうやら体は限界だっようだ。まさか一日寝て消えるとは思いもしなかった。
疲れを癒すにはフルヤ＝キリストしかない。真摯に祈れば癒しと赦しを携えたフルヤ＝キリストが私の脳内に現れ、『今日もお疲れさま。仕事を通じて日本を支える君を誇りに思いますよ』とか『今日は大変でしたね。ですが今の山場を乗り越えればあとは平地、もう一踏ん張りです』と言ってくださるのだ。
――ちなみにこれは安室モードであり、他にバーボンモードとゴッド・フルヤ・エディションもある。バーボンモードでは冷たく皮肉げに対応され、『完璧には程遠い仕事ぶりですね。やらないよりはマシ……といったところでしょうか。それで給料を貰っているとは驚きですよ』等と発破をかけられる。ゴッド・フルヤ・エディションでは『は？』『それで良くビジネスパーソンを名乗れるな』『……分かっているじゃないか』等と飴と鞭を使い分けられて私は忠実な豚になる。ぶひー！
一日寝たにしては疲れが少し残っている気がする肩をぐるりと回

し、昨日見た微妙に素敵な夢を思い返す。フルヤ＝キリストの配役がしばらくはまだ顔を合わせずにいたい隣人であったことを除けば、かなり良い夢だったと思う。ＲＸ―７に乗れただけでなくアムサンドも食べられたし、物欲しげな顔や愛想の良い笑顔も見られた。

撮りまくった写真が惜しいが、良い夢を見れたことだけで満足するべきだろう。本当に惜しいが俺たちの満足はこれからだ！　先生の次作にご期待ください！

だが、存在するはずがないと知っていつつアルバムのショートカットをタッチし――目を疑った。

写真がある。昨晩、夢の中で撮った写真がある。米花駅、カラオケ屋で食べた料理、デン○クの予約履歴、リアルのすずであれば興奮のあまり鼻血を出すであろうと思い撮った安コっぽい写真、アムサンド、杯戸駅。

なんだこれは。

「夢だけど……夢じゃなかった……!?」

まさに隣の所沢のモンスター状態。ホームに戻ってラインを開き、すずとのトークで画像を送信。「ところでこの画像を見てくれ……こいつをどう思う？」と入力して送ったところでついた既読。

ライン通話が来た。

『コラボカフェ？』

「それなら毎日通ってるよ」

『やばいすごい安室さん顔が良い完璧かコナンくん足細いやばい』

「それな」

『こんなのお尻におひねり捩じ込んじゃう……』

「ゲイストリップじゃないから止めよう」

何故か私の頭は冷静で、荒ぶるすずに「Ｋｏｏｌになれすず」とクールに繰り返す。

「昨日私は一日寝て過ごしたと言ったな……その時にポアロに行く夢を見たのよ」

『私は毎晩安室さんがコナンくんをぐちゃぐちゃにする夢見てるよ？』

「すげーなそれは流石に真似できないわ。すずちゃんの脳内がエロまっしぐら過ぎてもっとやれ歩道が空いている、行け。まあそれでね、夢の中で撮った写真が何故かスマホに残ってるの。もしかすると念能力に目覚めたのかもしれない。夢で撮った写真をスマホに送れるっていう」

『二十禁安コどちゃシコ同人誌送るから枕の下に敷いて寝て。夢見て念写して』

「試すわ。送って」

その場の勢いしかなかった電話を終え、アルバムをスクロールする。ああ、ツイッターに載せたいとても載せたいすごく載せたい。世の中に数多いる安室の女に「信仰心が足りないんだよ、残念だったな！」と書いて炎上したい。恋や愛以上に盲目な感情を教えてやろう、信仰心だ、と高笑いして叩かれたい。否定的なコメントへ「でも羨ましいんでしょう？」って返したい。捨て垢を作らなくては今すぐにだ。

――でも、それをしてしまうと本郷さんに迷惑がかかる可能性が高い。リアル降谷零とか言われて自宅が特定され安室の女がアパートに鈴なりになり、やしろあ◯きみたいに路上から大声で名前を呼ばれる騒ぎが起きてしまう。そして届くのは三角コーンではなく髪の毛入りのチョコレート……。凄く怖い。

私も成りきりネットマナーを学んだ歴戦の女、他人の迷惑を省みないようなことはできない。そんなことをしては雲雀さんに怒られてしまう。

仕方ないから『念能力に目覚めました。こちら私が念写しました杯戸駅、米花駅、アムサンド、コナンくんです』と写真を四枚選んでツイットした。投稿した直後すずによるリツイがあり、数十秒で三十ほどのリツイや引用が続く。これは間違いなくバズると確信し通知を切った。

昨日は一日寝て過ごしてしまったから今日は日曜日。掃除して買い物して、祈りを捧げ癒しを頂いて寝よう。

よっこらセッ（笑）！　と立ち上がり先ずは朝ごはんにトーストで

も焼くかなと考えたその時、家のチャイムが鳴った。
　我が家に来る人なんてそういない。親なら事前に連絡をくれるし、友人は「ネットで繋がってれば対面なんてしなくて良いよね」というコミュ障ばかり。職場は……休日わざわざアポなしでアパートに来るようなストーカーはいないと思いたい。
　つまり訪問者は宗教か新聞かＮ○Ｋ、これらのどれかで間違いない。ヘアスプレーと着火マンを手におそるおそるドアの覗き穴を確認し、目を丸くした。
「なぜなに本郷さん」
　先ずはこの訪問の理由を教えて！

8／23

夢だけど夢じゃなかったのだろうか。ハムサンドと半熟ケーキを持った本郷さんが「今度店で出そうと思っているケーキなんです。隣人のよしみで感想を頂けませんか」なんて言うからゼロシコ公開直前話かよ拘りが凄いな、と生唾を飲み込んだ。

ハムサンドとケーキはもちろん受け取った。

「貴方は聞かれないんですね」

「何のことですか？」

なにせ今の私は夢と現実の境界線がどこにあるのか分からなくなっている。夢の中で会いましたよねとか言ってドン引きされるのは御免被りたいし、貴方と私が夢の国で会うのは森の小さな公園で結婚式をあげる時だけだ。自ら率先して墓穴を掘るつもりはない。

「ふふ、敵わないな……」

何故か瞳を静かに輝かせる本郷さんが気持ち悪い。会話が噛み合っていない気がするが、深く突っ込んでは危険が危ない雰囲気がぷんぷんするので指摘するのは止めた。

ニコニコ笑顔でラインを交換させられ「では感想待ってますね♡」なんてハートが舞い散る声で念押しまでされ、本郷さんは部屋に戻っていった。ラインのプロフィール画像は今頂いたばかりの半熟ケーキ――本郷さんは乙男だったようだ。部屋の中はレースふりふりでぬいぐるみに溢れているのだろう。似合わないとしか思えないが、人の趣味をとやかく言うものではない。

ドアを閉め、トレーの上で輝くケーキを見下ろす。

食べよう。でもその前に記念撮影だ。やだ～超イン○タ映え～！

イ○スタしてないけど～！　お店のケーキみたいにすご～い！

「凄いなぁ本郷さん、このケーキ滅茶苦茶美味しいじゃない」

舌の上で溶ける半熟のスポンジ、植物性ではなく生乳のそれを贅沢に使っているホイップクリームは濃厚で、たっぷり添えられたブルーベリーやラズベリーは甘酸っぱく弾け味覚を飽きさせない。

ちなみに私の得意なケーキはホットケーキだ。時々焦がすが。

――本郷さんが引っ越してきたのは一年近く前。それからずっと交流があるのならともかく、突然こうして関わってきた理由は何だろう。突然隣人と交流したくなったのには何か訳があるはずだ。

恋とか愛とかそんなのではないだろう。なにせ私は魅力的な見た目をしているわけではないし、数少ない接触でもただ婚活パーティー会社の案内状を見られただけだ。それで恋が始まるというのは常識的に考えて無理がある。

何があったのだろうか？

顎に手を添え考える。以前プライベートなものを見てしまった謝意？　二ヶ月も前の出来事で今更なうえ、元々が不可抗力だ。そして謝罪ならあんなシャイニングな顔はしない。では、私と交流を持つ必要ができたとか？　ストーカー等の不審な人影を見かけたら教えてほしいとか、護身のために人の目を増やしたいとか……。これなら納得だ。本郷さんは私がついっとをしなくとも既にネットに拡散されていそうな顔をしているし、ストーカーの十人や二十人はいるに違いない。

ストーカーが増えて生活がいよいよ危険だとか、そういう切羽詰まった状況なのだとしたら協力するのは吝かではない。助けを求める者を見捨てる外道ではないのだ、私は。

顔面が良いとこういう不便もあるのか。縁がないから知らなかった。

ケーキをひょいと口に放り込む。

「……うま」

ただ、まあ、なんだ。つまり私は安全牌扱いなわけだ。

ショックじゃないと言えば嘘になる。別に本郷さんと付き合いたいとかそんなことを考えているわけではないし、逆に恐れ多くて見つめ合うと素直におしゃべりできない。だけど、だからと言って安全牌扱いに傷つかないわけではないのだ。

さっきまで甘酸っぱく美味しかったケーキが、どうしてか今は苦く味気ない。

現実の男は残酷だ。――つまり、現実の男ではないうちの御子様は

最&高。顔が良くて声が良くて三つの仮面を使い分ける万能天才マジヤバい。どのくらいヤバいかと言えば超ヤバい。サトシがタイプ・ワイルドならフルヤ＝キリストはタイプ・ゴッド、スーパーマサラ人など目ではないのだ。存在もカリスマも腕力も全て格上、いや比べることすら烏滸がましい。だって神の子だもん。

フルヤ＝キリストの存在はファンタジー、出逢いはまさにディスティニー。彼への信仰はつまり生まれた時から決定付けられた逃れ得ぬ定めだった。我々は青山先生という預言者を通じてこの世に零れ落ちた救い主の足を洗い香油を塗ってキスすべき。救い主フルヤは海より遥かに深く山など越えて宇宙より高く貴いのだ。尊くて貴くて震える。この世は地獄ですがフルヤは和睦です。何故なら江雪の和睦パンチ（）が太刀トップクラスの殺人剣であるように、フルヤ＝キリストの和睦シングパンチも赤井への殺意に溢れた殺人拳だからだ。

つまり和睦だ。フルヤ＝キリストのことを考えるだけて心が洗われ、この世のあらゆる穢れから解放される。ふぇぇ尊い、眩しいすごい。

しかし現実の男――本郷は見た目がまんまフルヤ＝キリスト。何故だ許せんこのスト○イツォ容赦せん！　それだけに飽きたらず、擦りガラス越しなら中の人の麗しい御声と勘違いしそうなほどそのままフルヤ＝キリスト。こんなのおかしいよ、絶対絶対おかしいよ！

憎い、奴が憎い羨ましいその声を寄越せ！　その声で『おはようございます！　今日も一日頑張りましょう！』とか言ってもらえたら毎朝爽やかで素晴らしい目覚めを得られるだろうことは間違いない！

ふぇぇ聴きたいまじで聴きたい録音させてください土下座しても良い！　お願いします！　働かせてくださいじゃない間違えた録音させてください！　名前を一部取られて鼎が県になってもいい！

そういうわけでラインを開きメッセージを送る。

『こんにちは！　さっき頂いた半熟ケーキの感想です！

ふわふわのケーキは優しく口の中でとろけて、たっぷりの甘酸っぱいベリーと濃厚な生クリームが合わさり、フォークが止まらない美味

しさです。こんな素敵なケーキをありがとうございます！』
何度か会っただけの人に声を録音させてほしいなどと言えるなら、コミュ障を名乗っているわけがない。
「どうして私はコミュ障なんだ……」
言い訳スキルならカンストしているのに、人と仲良くしようとすると上手くいかない。
人に踏み込みすぎてたたらを踏んだり、踏み出さずにいてさよならしたり。本音をぶつけ合うドッジボールなＳＮＳの世界で出会ったからすずと仲良くなれたが、大学やサークルで出会っていればこれほど仲良くはなれなかっただろう。コミュニケーションとはなんと難しいものなのだろう。
――コミュ障でなくとも「声を録音させてください」などと頼むのはハードルが高いだとかそんなことを言ってはいけない。
メッセージの既読が着くまでに二秒とかからず、そして十五秒後に届く返信。
『丁寧な感想ありがとうございます^^とても助かります！
鼎さんさえよろしければ、これからも試食などお願いして良いでしょうか？』
返信が早い。待ち構えていたのかもしれないと思うと少し怖い。それだけ切羽詰まっているのだろうか？　そうだとすれば……本郷さんは溺れる者は藁をも掴む心地で私に接触したのかもしれない。身近にストーカーになりそうにない干物がいたら飛び付きたくなるのも仕方ないことだ。
――もし本郷さんがそこらのどうでも良いただ面が良いだけの有象無象であれば、手助けしてやる気は小指の先程も起きなかっただろう。
本郷よ、そのフルヤ＝キリストに生き写しな自らの顔面に感謝するが良い。我が信仰は偶像崇拝を否定していないのだ。フルヤ＝キリストへの愛があればイラストだろうがコスプレだろうが成り茶だろうが何だろうが等しく尊重される。愛ゆえの行動に貴賤はない！
おお、ジークハイル！　フルヤ！　でも欠損は痛々しいから止めてあ

げて、日本のために働けなくなってしまう！　でも義手や義足もそれはそれで燃えるふぇぇフルヤはとりあえず貴い。

ぽちぽち返信を書いて送る。

『あまりお役に立てる気はしませんが、もしよろしいようでしたら是非。

本郷さんのお手伝いになれると良いのですが……。』

ケーキの後に食べたハムサンドは何故か、昨日見た夢の中と同じ味がした。正夢だったのかもしれない。

9／23

半熟ケーキが美味しかった日曜日から既に五日が過ぎたが、本郷さんのストーカーらしき影は今のところ見当たらない。

とはいえそういうものは気を抜いた頃にやってくる……ということで、ある程度の緊張感を持って周囲に目を配っている。だがまあ家の中でくらい、お風呂の中でくらいゆっくり気楽に過ごしたい。

「急に泣き出した空に声をあげ」

先日新入社員との飲み会で歌ったら男の同期達から「うわー、なつい！」「今日からお前についていく！」と好評を得たアニソンだ。その中に同期の星と名高い雰囲気イケメン梅田が混ざっていたせいで梅田の彼女・松前さん（後輩、美人、メンヘラっぽい）に睨まれたが、私は何も悪くない。文句があるなら梅田に言いたまえ梅田に。私はＫｉｓ○に連載されているような大人のドロドロ愛憎劇場とは無縁に生きていきたいから放っておいてくれ。

「目覚ましに起こされ」

烈火で一番好きなのは土門だ。欲望に忠実で風子が真剣に好きで――そして何より顔が濃い。初めて読んだ漫画がＳＬＡ○　ＤＵＮＫだった私の初恋は牧さんで、彼の顔は濃い。と言うよりもＳＬＡＭＤＵ○Ｋの男キャラクターはだいたい顔が濃い。悲しいことにＳＬＡＭ　○ＵＮＫ慣れしていた私には烈火や紅麗が女顔に感じられ、落ち着いた先が土門だった。コメディー担当だったのもＳＬ○ＭＤＵＮＫに慣れていた私には受け入れやすかったのだと思う。今はどうなのか、なんて聞くものじゃないさ私は一神教徒なの。

閑話休題、烈火は一度記憶を消去して始めから読み直したい作品の一つだ。

浴槽の縁に腕をかけて天井を見上げる。

「明日はやっと休み……あー、くそ、世の中のボーイズ＆ガールズは夏休みなのにレディース＆ジェントルメンは相変わらずお仕事か……。わーん一ヶ月くらいお休みがほしいよう！　職場が爆発したらお休みになるならボクちんテロリストになってやる！　葛西善二郎に

なっちゃうぜ火火火!!」
一人用の大きくない浴槽内でバチャバチャ暴れる。お湯が跳ね顔にかかって止めた。
「そうとも、うちの職場にはネズミに囓られていそうなガス線もあれば発火物になりそうなＩｏＴのポットもあるんだ他人の私物だけど。ハックだ、ハックするしかない間違いない。Ｆｕｃｋな職場に・ｈａｃｋして私Ｂｏｍｍｅｒになる！」
そう、私は「長期休みが欲しい」という本能に忠実な犬なのだ。だがそこらの単なる働きマンでしかない私にはハックの方法など分かるわけがない。ヒステリアになるには無理がある。さようならヒステリア、こんにちはヒストリア。毎週水曜日の放送を楽しみにしています。
「休みを勝ち取るために必要なのは力。脅迫には腕力、はっきりわかんだね。力あってこそ目的を遂げられる。Ｉ　ｎｅｅｄ　ｍｏｒｅ　ｐｏｗｅｒ・・・　俺の魂はこう言っている。もっと力を」
――世界を革命する力を！
「潔く格好良く生きていこう」
ＣＯＬＯＲＳでも良かったかもしれない。

風呂の壁の向こう、難しそうな顔をする男がいただなんて知っていたら……迷わず通報していた。
※※※
すずから送られてきた、フルヤ＝キリスト教徒である私ですら安コに滑り落ちそうなシコい同人誌。それを枕の下に敷いて寝たが、残念ながら安室とコナンがくんずほぐれつな夢を見ることもスマホに念写が保存されることもなかった。申し訳ないと電話したら「一度でどうにかなるとは元々思っていなかったから気にしないで！」という返事、今日と明日も試せという言外の圧力に私は膝を屈した。
ふぇぇスズ＝サン怖いよぅ！　でも気持ちは分かる私も同じことをする自信がある！　ああ同類、類友、朱に交わる前に元から共に赤かった。

電話を終えたところに届いたラインの相手は本郷さんで、朝の挨拶とこれから訪問して良いかという質問。中には入らず玄関先で会いたいということだった。私も先週のトレーを返したかったところなので快諾。

「こんな朝早くに申し訳ありません」

「いえいえ！　とっくに起きてましたからお気になさらず。それに、先日ケーキとサンドイッチを頂いた時からお皿とトレーをお借りしたままですし……」

私の手には皿が二枚とフォークが乗ったトレー。しかし本郷さんの手にもトレーがあり、上にはアムサンドにしか見えないハムサンドが盛り付けられた皿が乗っている。

「あの、そちらは……？」

「ああ！　先日感想を頂いたケーキを店で出したら早速人気のメニューになりましてね。試食してくださった鼎さんにお礼をと思いまして」

「いやいや、そんなお礼をされるようなことはしてませんよ!?　むしろこちらこそ試食のお礼をすべきですから！」

本郷どうした、ついに頭がおかしくなったのか？　こんな干物を餌付けしてどうするつもりだ。私がやつれて見えるのは体質であり、けして食生活の水準が低いせいではない。確かに毎月五万フルヤ＝キリストに捧げているが、映画やグッズが出ない時などにはきちんとネットバンクのフルヤ＝キリスト用口座に貯金し、生活が少し苦しい時にお恵み頂いたりしている。今も等身大フィギュア等が出た時のためにコツコツ貯めた金が三十数万入っている。

信仰に死ぬなどと言うのは時代遅れなのだよ、分かるかね。

「後でトレーとお皿、回収に来ますね！」

「ハイ……アリガトウゴザイマス……」

にこやかに去る本郷さんの背中を見送る。見送ると言っても数メートルの距離だ、すぐにドアを閉め部屋に戻り、視線を落として手元……渡されたハムサンドを見る。見るからに美味しそうだ。

――餌付けの末に何を要求されるか分からないため頑張って断っ

ていたのだが、結局は力及ばず、フルヤ＝キリストにしか見えない顔とフルヤ＝キリストの中の人と勘違いしそうな声に押しきられた。「よりハムサンドを美味しくするためにご協力お願いします♡」だなんてフルヤ＝キリストそっくりなフェイスとボイスで可愛くおねだりされてみろ、迷わず「うん、わかったー！」と答えてしまうのも仕方ないだろう。つまりはそういうことだ。キヤツは自分の魅力を分かっておる、忌々しいことに。私は……私は、無力だ……！

女らしさがあの乙男に完敗している気がする。きっと気のせいではないだろうが私は泣いてないこれは鼻水だから。

「ふぇぇアムサンドだよぉ美味しいよぉ」

こんな屈辱は初めてだ。くっ……殺せからのダブルピース、今なら即堕ち２コマも目じゃないぜ本郷サンドイッチ美味しい。でも本郷のより我が神の子の手作りアムサンドが食べたいです安西先生！諦めたらそこで試合終了なら諦めなければいつか食べられるんですか!?　次元の壁は越えられるんですかあかりって主人公なんですかー!?

まあ、そんな簡単に次元の壁を越えられるならデク君はワンチャンダイブなどしないし、リアルな異世界に行けるならＶＲなど必要ない。私もこうしてリアルアムサンドを恋しがって枕を濡らすこともないのだ。本郷のハムサンドが美味しいだけに悔しい。

どうしてこいつは降谷さんじゃないんだ。チェンジだ。チェンジを要求する。おお本郷よ、貴方はどうして本郷なの？　降谷に代われ！　降谷に代わったなら３０１号室に接した壁に祭壇作るから！

考えてみろ、十字架に磔になったフルヤ＝キリストなんて尊すぎるだろう。神聖ｏｆ神聖で胸が震えて呼吸困難になり倒れる未来が待っている。血を流すフルヤ＝キリストが青ざめた顔で項垂れている姿など見せられた日には美しすぎて失神間違いなしだ。貴い！尊い！　両目から激情が溢れて池になり私はそこに入水して殉死する。愛ゆえに死すワンダホー！　フルヤ＝キリストはまさに気高く咲く薔薇、散る様も美しいから薔薇なのだ。でも薔薇を口に咥えて耽美な白いシャツを着たフルヤ＝キリストはギャグでしかないのでお

断りいたします。
フルヤ＝キリストは存在そのものが薔薇なのだ！　薔薇で周囲を飾れとは一言も言ってない！　彼こそ気高く咲く一輪の薔薇、具体的に例えるならデズニーな美女と野獣のタイムリミットなあの薔薇だ。儚くも美しくそして力強い。
なれるものなら私はトキメキで変身したい。トキメキッシュ！　変身する度にそのトキメキを忘れるなんて最高じゃないか、何度でも初めての気持ちでフルヤ＝キリストにときめけるのだから。いつでもフレッシュ、蜜柑の甘酸っぱさが胸に弾ける！　あー変身したい。トキメキ変身したい。
何故私の知り合いにデカパン博士がいないのだろう。
――中途半端にリアル降谷な本郷めが近くにいるせいで余計に想いが溢れてしまい、ここ最近は以前に増して現実を直視するのが辛い。身近にこいつがいなければ諦めもつくのに。神よ、これは神の与えたもうた試練なのですか？　かなり辛いのでそろそろ終わらせてください本郷を刺したくなるから！
私を殺人犯にする前に早く！
――その日の昼、来年の三月末でこのアパートを引き払って欲しいという回覧板と手紙が来た。だいぶ老朽化が進んだため壊してしまうらしい。次に建つのはファミリー向けの五階建てマンションで、私には縁がなさそうな建物だ。
今は七月末だから、来年の三月末に立ち退き完了ということは八ヶ月後にはこことサヨナラだ。残念だったな本郷くん、こうして君が頑張ってストーカーからの盾にしようとしていた隣人とはあと半年と少しでお別れだよ。可哀想だけど仕方ないね。
強く生きろよ！

１０／２３

爆発物になりうるＩｏＴ家電。端末に表示された見取り図と昨晩浴室で聞いた言葉が割り符かパズルのように組合わさり、はっと気づいて電話をかけた――その時だ。

地下から突き上げられる酷い衝撃で体が宙に浮く。眼前の巨大な建物は一瞬膨らんで破裂、身を守るため四つん這いに体を沈めるが爆風やコンクリ片などが体の随所を殴っては飛び去っていく。ガスバーナーのように勢い良く燃え上がる火が一瞬で周囲を熱帯に変え、喉を焼くような熱を撒き散らす。

「くそっ！」

コンクリ片に叩かれた右肩を庇いつつよろよろとその場を離れる。もっと早く気づいていれば、何かを変えられた。そのはずなのに……中にいた人間の生存は先ず望めない。唇を噛み締め後ろを振り返り、燃え盛る国際会議場を見上げた。

浴室の壁越しに教えられたヒントが頭の中でリピートしている。

『――ガス線もあれば発火物になりそうなＩｏＴのポットもあるんだ他人の私物だけど。ハックだ、ハックするしかない間違いない』

国際会議場は最新型の制御システムが組み込まれている。そして数日後にオープンの新しい建物ならば、新しい物で固めるものだ。新しいテーブル、新しい建築材、最新型のＩｏＴ家電。――そうとも、これは事故などではない。事故ではなく事件であり、故意による犯罪だ。

片手で髪を掻きむしり獣のように唸る。しかし口許は自然と笑みの形を作った。

「ああ、うちの幸運の女神様は」

俺にだだ甘い！

これだけのヒントがあって「何も出来ませんでした」などという間抜けを晒せるはずもない。間抜けを晒すわけがない。すぐに犯人を見つけ出し日本国民を守れ、そう言われている。

早急に、即座に、だから手段など選ばない。

「――今回の爆発はＩｏＴテロの可能性がある。これは事故なんかじゃない、事件として捜査を進めろ」
　カーテンを締め切った車内、爆発から運良く逃れた風見から怪我の手当てを受けながら、これからの捜査について指示する。
「ＩｏＴテロ、ですか」
「ああ。先に言ったようにガスの栓はネット回線から解放できる。そしてガスで満たした室内でＩｏＴ家電……スマホなどの端末でも良いな。それをショートさせれば、火種は簡単に作れる。爆破など簡単なことだ」
　肩に湿布を貼られ、包帯を巻かれる。
「過激派テロ組織だけでなく、物品の納入に関わった業者、キッチン用品を事前に知ることができたスタッフ、点検に参加した警察官含め全ての関係者を洗え。こちらはシステムへのアクセスログ等を洗う」
「了解しました」
　右手を握り、開く。痛みはあるが我慢できないほどではない。日常生活に支障はなさそうだ。
「事件性の確保と犯人の油断を誘うため、仮の容疑者を置く」
「はい」
「容疑者とするのは――」
　謎と見れば飛び込んでいく少年の顔が浮かぶ。だが、ただの「謎への関心」程度では足りない。もっと切羽詰まって、オーバーヒートするほど頭を回転させてもらわなければならない。だから……彼を追い詰める。
「眠りの小五郎こと毛利小五郎。彼は警官ＯＢ、指紋の入手は容易いはず。何かの破片にでも転写しておくように」
「分かりました」
　罪のない少女の涙より、無関係な男とその妻の心労より、少女を愛する少年の焦りより――俺には守らなければならないものがある。たとえ憎まれようが罵られようが、そんなものは個人対個人の小さな問題だ。俺が相手にすべきは組織や国家レベルの問題であり、少年から向けられるであろう悪感情など些事でしかない。

「凄いです」
「うん？」
　その言葉に振り返れば、悔しそうに顔を歪める風見がいた。
「まだ爆発から一時間もしていないというのに、もうそこまで辿り着いている……。降谷さんは、凄い」
「そんな、自分が犯人ならどこを突くかが分かるだけだ。褒められるようなことじゃないさ」
「それでもです。私はまだ頭が熱くて……冷静になれていません」
　目の前で爆発が起き、仲間が何人も死んだのは確実で、そしてまだ時間がさほど経っていない。風見が熱くなるのも当然のことだ。悔しいと言葉を吐き出す風見の肩を叩き、慰めになる訳もないことを口にした。
「……俺には幸運の女神がいるのさ、今回も彼女のお陰で謎がするする解けているだけでな」
　風見が笑おうとして失敗したような表情を浮かべ、力ない声で「ふふ」と笑った。
「降谷さんの恋人ですか。どんな人か気になりますね」
「は？」
「え……？　何かおかしなことを言いましたか？」
　――彼女は金ローで魔法学校の一年から六年までをやった日には「スネイプ先生カッコいいよー！」と叫び、先生が死んだ七年生を放送した日には「私は信じぬ！　信じないからな、先生は不死鳥のように復活するのだ間違いない！　こんなことがあってたまるかよぅ！」と嘆く。
　濃い顔が好きで、初めてカラオケで歌った歌はおは○ック、ネタ曲と替え歌のバラエティーは多岐に及ぶがメジャーな曲はほぼ知らない。ジーザスではなくイエス・ノーのイエスにしか聞こえない「イエス！　キリスト！」と頻繁に叫び、そして人類よりも車の方が好きらしい。
　先日は「おぅ……イエース」と言いながら湯に浸かり、突然「斬首斬首ゥ！　イエース家康！」と訳の分からないことを言い出した。そ

してしばらく無言になったと思えば歌い出したのはパソコ○しぐれ。後から検索してみればＢＡＳ○ＲＡの手書きＭＡＤに使われた曲だった。

「……恋人なわけがないだろう」

容疑者を作る以外にもいくつか風見に指示を出してから別れ、別のビルが壁になったお陰で無傷だったＲＸ―７を走らせた。彼女のいるアパートとは違うセーフハウスで二時間弱の休憩をとってからポアロに向かい、酔っ払いの喧嘩に巻き込まれたんですと頭を掻いて梓さんを誤魔化し「安室」を始める。

半時間ほどして風見とその他刑事らが現れて毛利探偵事務所への階段を上り――大量の段ボールと共に下りてくる。

風見がポアロの前で立ち止まる。眼鏡を外して目を揉む動作。コナンくんのスマホに監視アプリを無事入れられたという合図だ。

――これから俺は、守るべき国民の一人に対し、人質をもって恐喝する。「救いたければ謎を解け」と狂ったことを言い、でなくば大切な人を傷つけてやると、想い合う家族を引っ掻き回してやると嘲笑する。

目的のためなら何でもする腐った野郎だ。善だなど、正義だなどとは言えるわけもない屑だ。

幸せとは壁一枚隔てた向こうにあるべきものであり、「降谷零」には必要ない。

正義の執行を阻む柵は、必要ない。

１１／２３

安室繋がりで思い浮かぶ歌手は安室奈〇恵。だが私はアムラーではなくフルヤ＝クリスチャン、彼女の持ち歌で知っている曲は少ない。テレビで延々と流れてでもいなければ興味も湧かず、自分から調べて覚えた曲は一曲のみ。

「色んな色で染まる世界で一人で」

だが、彼の側におり笑顔で支えてくれていたスコッチは死んだ！

何故だ!?　坊やだからか!?

髭で誤魔化していたが、彼もフルヤ＝キリストに負けず劣らず童顔だった。

童顔――ショタといえばあれも懐かしい。

「この街は常に白い煙に覆われていた……」

この作品こそスチームパンクへの扉だったというアラサーは多いはずだ。何故ならば私がそうだったから。父が録画していたビデオテープを何度巻き戻したことだろう……。このＯＰはナレーションから入ってこそ、よりいっそう魅力を増すのだと思う。

ところでだ。これでおねショタに目覚めた人は多いだろうが、私はおねショタよりも「年上の老齢のおじさまと彼より三十歳は年下の女性」という組み合わせが一番好きなのであまり萌えなかった。お兄ちゃん、アラン・リックマン、なんで死んでしまったん？　彼こそ理想のおじさまだった。しかし、しかしだ。考えてみてくれ……ショタなアラン・リックマンもそれはそれで美味い。そう思うだろう？　私はそう思う。つまりアラン・リックマンはイケメンだ。

顔の濃いイケメンが好みの癖に信仰対象は日系ベビーフェイスなのはどうして、とすずに聞かれたことがある。

イケメンはイケメンでありそれ以上でもそれ以下でもないが、フルヤ＝キリストは救い主であり神の子つまり完璧。直視など許されぬ貴き存在なのだ。黄金色の髪は富と栄誉を暗示し、後光に透けて神秘的に輝く。小麦色の肌は豊穣を、青く深みのある瞳は時により恵みの雨も晴れ渡る青空も感じさせる。少ししわの寄った眉間はこの世の

悲しみを憂う証であり、弓の弦の如く引き絞られた口許は威厳に溢れて雄々しい。
それだけではない。降谷零であるだけで既に尊いのに、彼にはあと二つも顔がある。つまり彼は阿修羅なのだ！　ダブルフェイスでは前後か左右の二つの方向しか見えないが、トリプルフェイスなら三方向が見える。つまり隙がない。白と黒の視点しかないダブルフェイスとは違い、白と黒ともう一つという三次元的な視点を持ち物事に対応できるのだ。
この第三者の視点――安室透という存在は素晴らしい。白と黒の中間にありながら、それでいて、その二つの対極に位置する。白と黒、降谷零とバーボンが当事者ならば安室透は第三者。客観的かつ他人が故の冷徹さで、刃を振り下ろすように判断を下す。分かるか、一番怖いのは降谷零でもバーボンでもなく――安室透。「誰にでも平等に優しく親切で心を砕いているように見える人間」を何と言うかなど誰でも知っているだろう、サイコパスと呼ぶのだ。
イエスが父と子と聖霊で三位一体ならフルヤは降谷とバーボンと安室で三位一体。イエスも父と子は縁があるのに聖霊は部外者！　フルヤも降谷とバーボンは対立構造に在るのに安室は部外者！　つまり安室だけが一人浮いている！
なんて隙がない男なんだフルヤ＝キリスト、完璧か!?　そうとも完璧なのだよフルヤ＝キリストという存在は。完璧に作られた神の子だから！　迷える子羊らを救わんがため産み出された、存在の根本からして特別な男なのだ！　知らなかったなら知れば良い。分からないなら理解しろ。フルヤ＝キリストは完璧なんだ（集中線）！　エィメン！
ところでここで「三位一体」ってなーに？　なんて思う人も中にはいることだろうから説明しよう（ｃｖ富山敬）！　今回ばかりはメタ発言許してね。
三位一体の三位とは、日本号とは一つも関係ない。三つの位相……三つの顔と思えば良いだろう。それを意味するので正三位の槍とは掠りもしない。

話を戻し、その三つの顔にそれぞれ名前を振り分ければ「父なる神」「子なる神」「聖霊（聖神）」となる。これらを端的に説明すると「父なる神」は地震雷火事親父、「子なる神」はイエス、「聖霊」は異端から異説までたくさん説があって大混乱だから気にしなくて良い。

そしてざっくり話をまとめれば、三位一体とは、これらの「父なる神」「子なる神」「聖霊」は一つの体に宿った異なる一面である、ということだ。ゴッドはトリプルフェイスでフルヤもトリプルフェイス。つまりフルヤ＝ゴッド。はい説明終わり解散。

ところで「父なる神」と言えばだ。人は「父親」をどういう姿や性格だと想像するだろうか？　威厳がある、怒った時には殴られる、背中で語る、「失敗したら分かるさ」のような発言……家庭により千差万別だとは思うが、一般的なイメージはこういうものではないだろうか。これらのイメージからから導き出されるのは「背中から学べ」「悔しければ這い上がれ」「自己責任！」という、父の愛といえば聞こえは良いが我が子を千尋の谷に突き落とす獅子のような酷さがある。

見守っているが冷たく、時には拳で教育してくる存在――まさに降谷零。つまり降谷零は父親だったのだ間違いない。

父親味に溢れた降谷零、やばい凄くやばい。考えてもみろ、お父様なんだ。書斎が似合う降谷零でお父様なのだ。そんなお父様やばい今すぐ幼女になり養女になりたい。某北斗のタイピングソフトも目ではない激打がハートを襲う。打×１０！　打×１０！　打×２０！　花になって蝶になって夜になって踊れ！

ちなみに私がタイピングの練習に使ったソフトが激打で、「お前はもう死んでいる」等と打ち込み続けた私はブラインド神拳ではなくブラインドタッチを身につけた。

「サンドバッグに浮かんで消える」

（キーボードを）叩け！　（キーボードを）叩け！　（キーボードを）叩けェ！

キーボードと言えばなんと、今年の新入職員はキーボードが使えなかった。大学のレポートはどうしたのか聞けば、レポートもエントリーシートもスマホやタブレットで入力したらしい。

パソコンって予測変換がどうして出ないんですか、どうすれば漢字に変換できるんですか。そう聞かれた時の私の気持ちを十文字以内で答えよ。

嘘やろ工藤。

……まあそんなことはどうでも良いのだ。教えれば良いだけのことに目くじらを立てるような狭量な性格をしているつもりはないし、新しいことを覚えるのに時間がかかるのは当然であって急かすつもりも全くない。

ただ、時代の流れる速さに心が追い付かないだけだ。これがジェネレーションギャップなのか。片手の数しか離れていないのに。

乗るしかないのに乗れていないこのビッグウェーブ。あいぽん派ではなくアンドロイド派なのが悪かったのかモヒカンにしていないのが悪いのか？　流行って廃るまでが速すぎ、もはや西尾〇新の発刊ペースだ。もう追い付けない。

流行り廃りが早いと言えばコミケもそうだ。最近はブースができては消え、出来ては消えていく。……だというのに★矢やジョ〇ョ、昔からある漫画やアニメのブースが消えない理由は何か？――それはゆっくり育てられたため基礎ができているからだ。

ジ〇ジョに二部時点でよいしょ本があったのは〇ト様が証明している。あーんス〇様が死んだ！

最近の漫画やアニメのジャンルは、基礎を作る暇もなく建てられたバベルの塔のように思える。一見壮大で巨大で勢い良く見えるが、一年や二年もすれば作業員が九割去ってしまうわけだ。しかし、その搭を支え補強し続ける愛に溢れた一部の皆様がいるお陰で五年後十年後に原作がリメイクされたり外伝が出たりする。感謝っ……！　圧倒的感謝っ……！

勢いの良さが悪いとは言わないが、私には合わない。もっとゆっくり走ろうぜ。

――あ。なるほど、これが歳か。

「ふふ、歳はとりたくないもんだぜ……」

涙の滲んだ目元を覆い顔を伏せる。

壁の向こうで、同年代の男も顔を覆っていた。

１２／２３

日曜日、適当に買い物にでも行くかと思い立って家を出たところに本郷さんが現れた。
「おはようございます、本郷さん」
「おはようございます」
「今日は洗濯日和の良い天気ですね。本郷さんはお買い物ですか？」
「僕は大家に突……いえ、まあそんなところですね」
もし駅に行かれるのでしたら送りましょうかと聞かれて「やったーアッシー君ゲットだぜラッキー！」と思ったことはおくびにも出さず一度いえいえと断る。
「そんな悪いですよ」
「お気になさらず。ちょうど駅の方向に用があるのです」
では有り難く……と一緒にガレージに行き、先週のポアロが「夢だけど夢じゃなかった」のか「夢だと思っていた現実だった」のか分からなくなった。シャッターの奥に隠れていたのはＲＸ―７たん、ナンバープレートすら完璧な降谷閣下の愛車だ。
ふざけるなもっとやれ。本郷お前は最高にクールだ、その容姿を活用してコナンカフェで働くが良い。今年の映画で萌えの余り白のＲＸ―７を買ってしまったお姉さまもいらっしゃることだし、三日も働けばそれだけで収入三百万は堅いだろう。私もフルヤ＝キリスト貯金の半分を支出する確信がある。
想像してみろ、リアルにフルヤ＝キリストな本郷さんと白ＲＸ―７の組み合わせはまさに、このコンクリートの地面に両膝を突いて祈るべき幸福であろう。幸福すぎてもはや罪……幸福安心委員会に「幸せは義務ですので」と保証を頂けない限り安心できないレベルで罪深い。幸福安心委員会にはどうやって届け出をすれば良いのだろうか？　東京都公安委員会には運転免許でお世話になっているが幸福安心委員会との接触は今までに一度もない。
教えてくださいオンディーヌ、こんなに恵まれて良いんですか？
禍福は糾える縄のごとしと言う。こんな幸福の後には不幸が待って

いるに違いない。例えば事件に巻き込まれるとか事件に巻き込まれるとか事件に巻き込まれるとかだ。
――だがまあ、今の私は幸福に包まれている。未来のことを憂いていてもやる気と元気が無くなるだけだ。後の不幸なんてそんなの関係ねぇ！　おっぱっぴー！　太平洋に平和を！
私の次週予告にはいつも「来週も面白かっこいいぜ！」という主人公ボイスのナレーションが入っている。笑う門には福来るのだ。風呂を出る時も力強く掛け声を発し、ヤルキ間違えたやる気を呼び込むようにしている。
病は気から、気合いでなんとかなる病気もある！
ところで話は戻ってＲＸ―７だ。ＲＸ―７はただでさえ見た目が良い。イケメンだ。カラーは白はもちろんとして黒やダークシルバー、赤、青、少し珍しい新緑色などもあるというのに、フルヤ＝キリストのＲＸ―７は白。この白いボディーもトリプルフェイスが故に違いない。三つ一組なのは三位一体だけではない、光も三原色なのだ。赤青緑の三色の光が揃った時――世界は白に染まる。
ヤバい。そうとも、ヤバい。原色を三色混ぜれば黒になるのに対し、光の三原色なら白になるのだ。つまりフルヤ＝キリストの三つの顔は全て光に属するということになる。
崩れ落ちそうなほど素晴らしい。もう心臓が辛い。世界の中心でフルヤ＝キリストへの信仰を叫ぶので骨は海に撒いてほしい。ケータイ小説はだいたい男か女のどちらかが死ぬが、フルヤ＝キリストが死ぬわけがないので私が死ぬ。おお、フルヤ＝キリストよ永遠に！
「運転してみますか？」
「いえいえそんなそんなＲＸ―７たんに傷付けたら私は私が許せんのですよ――お気持ちだけ頂きます」
本郷さんの提案は嬉しい。だがあまりに畏れ多すぎるため早口で畳み掛けるように断ってしまった。前回見た時は興奮の余り乗りたいと考えたが、二度目となれば前よりは理性が利く。
ＲＸ―７なのだ、それもボディーが白なのだ。フルヤ＝キリストの愛車そのものにしか見えないのだ。手が震えてうっかりハンドル操

作をミスしたり、緊張でアクセルとブレーキを間違えたりするかもしれない。もしＲＸ―７たんの頬に引っ掻き傷などつけてみろ、申し訳なさでボディーにすがりついて泣き叫ぶ。私の中では擬人化ＲＸ―７たんはショタ降谷、ふぇぇ可愛い尊いペロペロしたい。

口の中に溢れる涎を何度も飲み込みながらＲＸ―７を見つめていれば、本郷さんは格好良く運転席に乗り込むと滑らかにガレージを出た。理由はないがムカつく――いや、理由はある。似ているからムカつくのだ。海苔食って寝てろ！

そして私の前に助手席の扉が来るように止まると本郷さんは爽やかに車を降り、助手席へ私をエスコートしガレージのシャッターを閉めた。

背中と尻を包むシートが夢と同じ感触で、夢が夢じゃなかった可能性が高まっていて怖い。まさか本郷さんは降谷さんだった？　いやまさか、そんなことがあるわけがない。コナンアニメは普通に毎週土曜日夜６時放送で昨日も楽しく視聴したし、部屋からコナングッズが消えていたということもない。そしてすずから安コぐちゃエロ夢の念写を頼まれるわけがない。つまり異世界トリップなどありえない。

先週の夢、アムサンドを食べたあの「ポアロ」は普通の喫茶店だった。コラボ喫茶ではない。

確かめよう――確かめねば。

そして着きましたは喫茶店ポアロ。笑えないことに杯戸駅も米花駅もあった。米花駅に貼ってある地図で見つけた毛利探偵事務所へ歩いていく途中で目にしたのは私の知るそれと似ているが別の名前のコンビニチェーン。

こんな壮大なドッキリなどあるわけがない。駅の構内のみならまだしも、毛利探偵事務所への最短距離から少し外れた店までもが徹底して「微妙に」違うのだ。

店に着いた私は顔からまるで血の気が失せていたのだろう。梓さんにしか見えない美人店員にソファー席を勧められ、メニューにあるわけもない白湯を貰った。

「大丈夫ですか？」
「大丈夫です……少し、ショッキングなことがあっただけで、すぐ治りますから」
静かな店内は前に来た時のまま居心地が良く、冷えきった指先を湯飲みが温めていく。ほうと一息吐いてソファーに背中を預けた。
――客の持ち物らしいタブレットがニュースを流している。昨日エッジ・オブ・オーシャンにあります国際会議場が爆破された事件で……。
顎が外れるかと思った。胃液が上ってきているような苦酸っぱさが口の奥から広がる。ゼロシコの設定は五月だったはずだ。四月の二十八日から五月の一日に渡る五日間を描いていたはずだ。
スマホを開けば日付はやはり七月二十九日、アンテナが三本立っているから時刻データを受信できていないということはないはず。つまり今は間違いなく七月である。
何か情報がほしくてニュースアプリを開き、そこに「八月一日はくちょう帰還」やら「七月二十八日の国際会議場爆破事件」やらというタイトルが並んでいるのを見て……右手を握り締めた。サザエさん時空だからなのか、映画と日付が三ヶ月もずれている。
つまりＲＸ―７たん大破確定フライアウェイ！――ではなく、日本中が混乱し本郷さん……いいや、降谷さんが傷付くということだ。
そんなの、駄目に決まっている。だが私に何ができるのか。ＩｏＴテロですなどと伝えても疑われるのが落ち、捜査を混乱させるだけだ。
すっかりぬるくなった白湯を飲み干し、頭を働かせるために珈琲と店長おすすめのケーキを頼む。しばらくして出てきたのは――珈琲はもちろんながら、本郷さんから頂いたのとそっくりな半熟ケーキ。濃厚でもったりした生クリームも、掛かっている果実たっぷりなベリーソースも全く同じ。
顔を覆った。本郷さんがフルヤ＝キリストでもうマジ無理。リスカしよ……。でもメロスとセリヌンはズッ友だよ……！
なんなの？　救い主が生きて目の前に現れる（隣人）とか十六日の

月曜日なの？　土日挟んで復活したの？　でも今日は二十九日なんだよなこれが。
　おかしいと思うべきだったのだ。あんなに降谷、下から見ても、横から見ても――どの方向から見ても降谷なのに、安室の女達が鈴生りになっていないのだ。
　コナンカフェの目が潰されるイケメン達もあれはあれで素晴らしいのだ。たとえば魅惑の腰つき、どこの黒子ランサーかと言いたくなるような輝く貌、そして距離が近い。
　オンギャア！　オンギャア！　手持ち資金は弾けてバブル、私のハートはときめいてバブる。あの胸筋にすがりついてオギャりたいと何度思ったことか。お金出せば良いの？　おっけーバブリー！
　あの安室役お兄さんズですら我々をときめきの沼に突き落としたというのに、あれだけ「安室透」そのものな男が話題にならないはずがない。だが、そんな話一つ、噂一つとして聞こえてこない。気軽に写真を撮ってＳＮＳに流せる時代だというのに。
　――おかしいと思うべきだった。思えばヒントはそこらじゅうに転がっていた。ここはコナンの世界で、本郷さんはフルヤ＝キリストで、美人な店員さんは梓さん、前に声を掛けてきた少年は江戸川コナン探偵さ。
　夢ではなかったから写真が撮れていた。米花駅があった。土曜日は寝過ごしたのではなくこの世界にいた。
　どんどん現実味が増していき、反論を許さない「真実」と「証拠」が固まっていく。
「どうしろって言うのよ」
　私にできることなんて一つもないのだ。ハッキングに詳しいわけでも、毛利小五郎を助けられる伝があるわけでも、捜査を混乱させないように犯人のヒントを教える方法もない。既に爆破は起きていて、死傷者もいる。ここからは怪我人こそ出るが死者はいない。
　私ができることなどないのではないか？　無駄に手を突っ込んで真実の解明が遅れるなどあってはいけない。私にできるのは、外野で静かに眺めていることなのではないだろうか。

「あら、かなちゃんじゃない。どうしたの、そんな青い顔をして……」
そんな時ポアロのドアを潜ったのはすず――いや、鈴木綾子。そうだ、思い出したとも。鈴木綾子は鈴木園子の姉、原作キャラだ。鈴木財閥のご令嬢だ。
「すずちゃん、お願いがあるの」
飛び付いて、すずかのそれとは違う、繊細で白い手を握って目と目を合わせる。
「日本を助けて」
あっけに取られた表情が、困惑に変わり、真剣に引き締められた。
「話を聞かせてくれる？」
賭けに勝つか負けるか、それはこれからの私に掛かっている。

１３／２３

私の顔が冗談を否定していたからだろう、すずに連れられて行ったのは彼女の自宅――鈴木邸だった。敷地内に入った瞬間法定速度の軛から解き放たれたすずは百キロ超で玄関前にドリフトで着くと、鍵を執事かフットマンか知らないがきっちり着込んだ格好の男に車の鍵を押し付け、「片付けておいて！」と叫びながら私を引いてとある部屋に飛び込んだ。

「す、すずさん格好いい」

「ありがとう。――それで、日本を助けるってどういうこと？　ここなら目も耳もないし、電波も阻害されているわ」

確認しても良いわよ、と言われてスマホを見れば、アンテナはただの三角形の枠になっている。

「信じてもらえるか分からないけど……すずちゃんにしか頼れない。一から十まで聞いてもらえる？」

「私達、同じお腐れ神じゃない。戦争を何度も一緒に乗り越えて来たわ。良いから話して。全部聞くから」

すず様に惚れそうでやばい。

「先ず、結論から言うよ。今、現在進行形で東都が危険に晒されているの。――昨日、エッジ・オブ・オーシャンで爆発があったよね」

「……ええ」

「あれは事故ではなく人為的に起こされた事件。犯人は匿名性が頑丈に守られたソフト・Ｎｏｒを使い、地下にある厨房のガスの元栓を解放。そして同様の手口で厨房にあるＩｏＴ家電をショートさせて会議場を爆破した」

「なんですって？」

「ごめん質問は後にして。警察は事件性の確保のため、元刑事であり現在は眠りの小五郎として有名な毛利小五郎を容疑者ということにして逮捕。もちろんそのことは本人にも本人の家族にも伝えられていない――どこから情報が漏れるか分からないからね。

しかし毛利小五郎逮捕後にも続いたＩｏＴテロにより、警察は国際

会議場の爆破を含む事件を同一犯による犯行と確定。これにより毛利小五郎を容疑者とし続ける必要がなくなり、彼は容疑を解かれ釈放。
　毛利小五郎の釈放とほぼ同時に発覚する真犯人、それはなんとエリート検事。彼は個人的な怨恨から警視庁の破壊を目論んでおり、その手段として……惑星探査機はくちょうのカプセルを東都に落下させようとしていた」
　端的に話そうとして堅苦しい言い回しになってしまったが、言いたいことは伝わっているはずだ。
「犯人は確保したものの……Ｎｏｒによるハッキングで変更した、はくちょうへのアクセスコードを吐かなかったため、警察が所有する処分予定の爆薬でカプセルの落ちる軌道を海上に逸らすことになった。結果は成功――しかし」
　目を閉じて深呼吸し、またすずの顔を見つめながら口を開く。
「カプセルが原因不明の爆発を起こし、軌道はまた変わってしまう。カプセルの落下地点は……都民が逃げ込んでいた、エッジ・オブ・オーシャンのカジノタワー。私の知る限りでは少し建物にかするだけで済むけれど、必ずそうなるとは限らない」
　すずの顔は強張っている。私の顔もきっと同じだろう。
「荒唐無稽な話だとは分かってる。まるで信じられない創作にしか聞こえないことも分かってる。だけどこれは確定した未来なんだ。――お願い、力を貸してください」
　這いつくばるように頭を下げた。ここは私の世界じゃない、迷い混んでしまっただけの異世界だ。始めの爆破による死者以外は誰も死なないと知っている。だけど――東都にはすずがいる。すずとすずの妹や家族がいる。すず達に怪我一つなく無事に終わるだろうだなんて安心はできない。
「……それ、本当なのね」
　しみじみと、まるで昔を懐かしむような声だった。見上げればすずは全くいつもと同じ表情をしていて、テロ事件について話を聞かされたばかりの人には見えない。

「すずちゃん」
「私はかなちゃんがそんな嘘を吐くような屑だなんて思わない。どうして知ったのか、なんて答えづらい質問もしないわ」
だって小説でもアニメでも、そう詰問されたキャラは答えられなくて口ごもるものだもの。そんな無駄なこと私はしないのよ。
微笑みながらそう言ったすずに私は飛び上がって抱きついた。流石すぎてもう大好き！　私の友達がやばい！　なんだこれ凄い！
私と違って柔らかい！
「おお、心の友よ！」
「あらあら、私がのび太なの？　かなちゃんはジャイアンと呼ぶには痩せてるけど……。それでジャイアン、どうやって日本を救うつもり？」
「分からない！　だから一緒に考えて！」
すずは片手を頬に当て、微笑んだ。
「そうね。私達はのび太とジャイアンなわけだし、ここはドラえもん――次郎吉おじさまに秘密道具を借りましょう」
この瞬間、我々の勝利が確定した。これは勝つる！
※※※
大きな事件が起きる前には何らかの前兆がある。俗な言い方をすれば「フラグが立ち、しばらく後に回収される」。――そんな馬鹿馬鹿しいことなどあるわけがないと思われるかもしれないが、昔から俺の身の回りでは「コレはもしかして前兆ではないか？」と思えばその通り大きな事件が起きるし、「アレは前兆だったのだろう」と後から気付くような小さな出来事とも何度となく遭遇してきた。
まるで神に定められた運命か何かだ。「前兆」を感じる度、決められたレールを走るしかないのだと言われているような気がした。嫌で仕方なかった。
だが、今回は……今回の「前兆」はとても気楽に、するりと俺の心へ染み込んだ。
『――ガス線もあれば発火物になりそうなＩｏＴのポットもあるんだ他人の私物だけど。ハックだ、ハックするしかない間違いない』

ヒントのつもりなのかもしれないが、どう考えてもほぼ答えのようなものだ。「ハッキングすれば火事なんて簡単さ」等という丁寧な説明がついていれば誰でも答えに辿り着けるだろう――何かの建物が爆発されるのだと。

『力あってこそ目的を遂げられる。Ｉ　ｎｅｅｄ　ｍｏｒｅ　ｐｏｗｅｒ…　俺の魂はこう言っている。もっと力を』

目的のある犯行、もっと酷い事態が起きるということか？　犯人を捕まえられなければ多くの人が死ぬということならば、他の全てに優先して解決を急がなければならない。

「やはり幸運のお守りと言うより……幸運の女神と言う方が近いな」

風見に恋人と勘違いされた表現を改めるべきか考え、いいやと首を横に振る。あんなに元気で騒がしいのだ、お守りのように存在を忘れがちなものと一緒にはできない。

風呂場のソロライブはいつも爆笑必至、外で会えばこちらを笑わせに来る言動。だというのに抜群のフォロー力で俺の身辺の平穏を保ってくれた。

もはやこれは信仰するしかない。彼女は笑いによって救世をもたらす笑いの神に違いない。一人で大笑いしながら神棚を作り――こいつは何をしているんだと自分に対して突っ込みを入れながらそれを風呂場に設置した。風呂場の壁に取り付けられた神棚は違和感とおかしさしかない。腹が捩れその場に崩れた。

彼女が関わるだけで、こんなにも世界が明るい。

――だから、そんな彼女からもたらされた「前兆」も受け入れやすく、不快感など一つもなかった。国際会議場には外部からガス栓を解放できる厨房があり、最近ではそこかしこにあるＩｏＴ家電もある。要件を完璧に満たしていた。

爆発が起きた時はすぐにピースがはまった。あれこそ前兆であり、そして事件はまだ続くのだと。

疲れを癒されにその晩もアパートへ戻った俺は、まさか加齢による衰えを指摘され思わず顔を覆った。

うちの女神様は全く落差が激し過ぎる。

１４／２３

どうやってかすずが鈴木次郎吉相談役を巻き込んでくれたが、違法行為を素顔を晒して行うのはどうかという至極当然の問題が持ち上がった。

「変装するしかないわ」

「へんそー」

「特におじさまは新聞やテレビに顔出ししていて有名だし、本人と分からないレベルの変装が必要よね」

「む？　着ぐるみでも着るのか？」

「いいえ、それだと動きづらいでしょう。だからメイクで別方向のインパクトを与えるわ」

映研でメイク担当をしていたスキルは伊達じゃないの、そう微笑むすずはとても格好良く……しかし何故か寒気がした。

相談役はしきりに腕を擦り、私も膝を握りしめすずを見上げる。逆光によりすずの表情はまるで見えない。

「大丈夫よ、心配しないで。きちんと別人に仕上げるわ」

――相談役の連れてきたルパンが尻尾を股に挟み、悲痛にくぅんと鳴いた。

※※※

少ないヒントで一連の事件がＩｏＴテロであるということまでたどり着いたコナンくんと共に犯人を確保し、カプセルの軌道を海上に逸らした――コナンくんのスマホが光っているのを指摘するのと同時に俺も自らのスマホを確認する。

知らないナンバーからの電話だ。緩んだ気を引き締め通話にすれば、聞き覚えがない女の声が鼓膜を震わす。

『貴方達が今軌道を逸らしたカプセル、残念だけれどまた爆発するわよ』

は、と息を飲んだ俺に相手は言葉を続ける。

『あ、爆発したわね。この軌道だとカジノタワーに直撃するでしょう……』

どこぞからの電話を取った刑事が顔を真っ青にして叫ぶ。
「カプセルが爆発、原因不明！　軌道が変わりました！」
未来でも見えているのか？　いや、まさかそんなことがあるわけがない。
『でも安心してちょうだい。私達は都民を……日本を救うため、既に動いているわ。だから貴方達は安心して待っていて』
「……その言葉を信用できるとでも？」
『信用して貰えるとは思ってないけど、何の用意もない貴方達よりずっと安全で確実な手段を準備してあることは分かってほしいわね』
舌打ちが漏れそうになる。ここに来て第三勢力の登場とは……！
面倒事とは何故こうも重なるのか、全く苦々しい。
『我々は悪役。でも、悪役だからと言って世界の破滅を望んでいるわけではないのよ。ちょっと手段が違法なだけで……目的は世界平和なの』
「それを信じろと？」
『あら、別に信じてくれなくても良いのよ』
私達で勝手に日本を守るもの、という言葉だけ残して切られた通話に拳を握りしめる。
「行こう、安室さん！」
「くそっ……ああ！」
警視庁のヘリポートから滑るように階段を下りる。さっきの電話はなんだったのか――コナンくんを助手席に乗せ車を走らせながら唇を噛む。
これから向かう先で何が待ち受けているのか……苛立ち紛れにアクセルを強く踏み込んだ。
※※※
鈴木財閥は流石のお金持ち、高く解像度もばっちりなドローンでエッジ・オブ・オーシャンへの橋を監視していたところ、白いＲＸ―７が数多の法律違反をしながらこちらへ向かってきているのが画面に映った。
「ＲＸ―７廃車寸前、マツダは泣いていい」

「そんな思考回路はショート寸前の音程で歌われても」
鈴木次郎吉個人がパトロンをしている、ドローンを使った撮影を得意とするカメラマンの松坂さん（♀）に替え歌を突っ込まれた。
「おおっと、耳が飛びました！　彼らを待ち受けるのはスプラッタなのかスクラップなのか、わくわくが止まりませんね！」
「だれうま。あとあれ耳じゃなくてサイドミラーね」
マツダは泣いていい。
「心配じゃないの？　安室さんとは前からお付き合いがあるんでしょう？」
黒いマントを羽織ったすずが、心配そうに私を見やる。ちなみに私もすずと同じように黒いマントで全身を隠している。
「そりゃあ心配だよ。怪我なんてしてほしくないし、危険なこともしてほしくないよ！」
そして、できるなら車内を……フルヤ＝キリストのベイビーフェイスならぬビーストフェイスを撮影させてほしかった。
「でも安室さんは自分を犠牲にしてでも国民の命を優先するって覚悟を決めてるからさ。……ここで私が騒いだところでさ、彼の意思は変えられないのよ」
死ぬ覚悟を決めて死ぬ人と、ただ何も訳の分からないまま殺される人と、どちらが可哀想かと言えば後者だろう。
覚悟を決めるのにどれだけの時間と苦痛と嘆きがあったかは私には分からない。だが、死を迎えるとき、本人の心情のみに限って言えば、前者の方がいくらかは幸せだろう。
「でもまあ、車で空を飛ぶなんて、まだ十年は先じゃないとできないような自殺行為はさせないけどね」
ＴＡＸｉのような改造を施しているならまだしも、内部を好みのものに変える程度の改装で空を飛べるわけがない。そしてＴＡＸｉも空は飛べない……ただ少しばかり長距離を跳べるだけだ。
フリーフォールはきちんと下にマットを敷いてからすべきであって、落下傘もハングライダーも命綱もないフリーフォールはただの投身自殺。にこにこ笑顔で五十メートルの崖から飛び降りられるのは

命の保証があるからだ。
「このスピードならあと五分でこちらに着きますね」
「あら、もうそんな時間なのね。――かなちゃん、準備はいい？」
「おうともさ」
マントを翻し、彼らを出迎えるべき場所に爪先を向ける。
同じく怪しげな黒マント姿の相談役と三人連れ立ちこの場を離れる。私達が談笑していたそこでは――幾人もの男女がパソコンと向き合っていたり、巨大な筒状のものを弄ったりと、カプセルの軌道を変える準備を進めている。
「まさか綾子がこんな愉快なことをしでかすとはな……おぬしはさほど自己主張せんし、もっと大人しい娘だとばかり思っておったわい。いや愉快愉快！」
「まあ、おじさまったら……私だってこれでも鈴木家の娘なのよ？」
「うむ、そうじゃったな！」
恐ろしいことに相談役もすずも「鈴木家ならこういうことをして当然」とでも言わんばかりだ。どんな家なのか、それは。金持ちゆえなのか鈴木家がおかしいのか私には分からない。――分かってしまえば鈴木家から逃れられなくなりそうだから、分からないままでいたい。
車両用エレベーターで昇れる一番上の階、エレベーターを降りて順路通りに曲がってすぐに、この三日で舞台を設営してもらった。舞台の高さは五十センチ、スイッチを入れれば天井から吊り下げたミラーボールが輝き、業務用の巨大なライトが舞台上を照らす。我々はこの舞台をこう呼ぶ――スーパーお立ち台、と。
エレベーターが動きだす。まだ防音の整っていないガラガラのビルに滑車の音が響く。
普通車二台は悠々入る箱が到着。暗いここにエレベーターから光の筋が走り、筋は帯になり扉になった。
ハイビームで行先を照らしながら現れたのは既にボロボロのＲＸ―７。鼻が無惨に潰れ片耳を無くしたその姿は……先日の輝かんばかりの姿を思うとなんとも憐れだ。

ＲＸ―７がゆっくりと順路を曲がり――私達の立つ舞台の足元を照らす。じわじわと胸へ顎へ近づく眩しい光、三つの黒マントをハイビームが浮き上がらせたその瞬間、すずの腕がマントを抜け出しパチリと指を鳴らした。

点灯と同時にマントを高く放り捨てる。実はこの三日というもの、漫画チックで格好がつく投げ方を何度も研究し練習した。

「お、お前らは……!?」

フロントガラス喪失により良く聞こえる高山○なみボイスが鼓膜を震わせる。

お答えしよう、我々は――。

１５／２３

怪しげな黒マント三人組――彼等がマントを脱ぎ捨てた瞬間、吹き出しかけて口を叩くように押さえた。

どこからどう見てもムサシとコジロー、そしてニャースだ。ただしニャースのみは「いかにも無理のあるコスプレ」といった風体で、その上がっしりした体つきのせいで衣装がパツパツに伸びている。

「お、お前らは!?　と聞かれたら」

ウィッグだろう赤い髪をかっちりと固めた、ヘソだし衣装の女が口を開いた。その手にはピンクのジュリアナ扇子が握られている。

「答えてやるのが世の情け」

どうしてか見覚えがあるような、面影が見えなくもない細身の男――いや、声質は女だから男装だろう――女が言葉を続けた。やはり彼女の手にも青色の扇子がある。

聞き慣れた声のような気がするが、きっと気のせいだろう。

「世界の破滅を防ぐため」

「世界の平和を守るため」

「愛と真実の悪を貫く」

「ラブリーチャーミーな敵役」

「ムサシ（仮）」

「コジロー（仮）！」

カッコカリと口に出すな。

「最近のガキどもはこの口上を知らないというけれど～」

「うるせー私達にはこれこそが決め台詞なんだよ一期見ろ！」

「にゃーんてにゃ」

ドスの効いたニャース（）の声は、何度となくテレビやラジオで聞いたことのある――鈴木財閥の相談役のそれではなかろうか。ちなみにニャース（）は白い扇子でパタパタと自分を扇いでいる。

いや、まさかな……ただ声が似ているというだけだろう。鈴木財閥と言えば世界でも屈指の大財閥、その相談役とあろう老人がまさかこんな酷いコスプレをするはずがない。

「さて、警視庁からこんな遠いところまでわざわざご苦労様……」
ムサシ（仮）が髪を掻き上げるような動作をした。だがムサシの髪型にする際にワックスでガチガチに固めたようで、指が表面を滑っていくだけだった。
「でも、貴方達の苦労は実を結ばないわ」
「残念だったニャー」
「今回の見せ場はロケットだんが頂くぜ！」
……ふざけた格好の、ふざけた奴等だ。なにがロケット団だ。国民が命の危険に晒されているというのに、全く馬鹿馬鹿しいことを。ふざけるなよ。
ふつふつと怒りが沸きあがり、ハンドルを殴る。クラクションが悲鳴のように響いた。
「いますぐそこをどけ。轢かれたくなければな」
「安室さん……お姉さん達、何を考えてるか知らないけど今は緊急事態なんだ！」
赤井に対する時よりも――今までになく腹が立つ。こんなのに邪魔されては堪らない。コナンくんの声ですら今は苛ついてしまうほどに。
「嫌よ。言ったでしょう？　私達は勝手に日本を救うって」
「ビーストモード最高だぜ」
「若造は頭を冷やせニャー」
こちらの威嚇などどこ吹く風とばかりに受け流した三人組の一人、俺を写真に撮りまくっていたコジローコスプレの女が一歩前に出る。
「君はこんなところで死ぬべき人じゃない。君達が体と命を張る必要はないんだ。我々ならば一人たりとも人的被害を出さずに解決できる……そう、ロケットだんならね」
その言葉が終わるか終わらないか、その瞬間だった。鼓膜を破かんばかりの轟音がどこかから響き頭が左右に揺れる。そして三人の背後、まだ壁のない吹き晒しの鉄骨で区切られた大空を光と共に駆けていく――棒状の何か。
「あれは……なんだったんだ？」

大空で輝きそして消えた棒状の何かを、ただ俺は見送るしかなかった。そして呆然としたまま呟けば、コジローコスプレの女は、まるで単純な計算問題を出されたような軽い調子で答えた。
「ロケット弾」
パッパパラパラパラパラ――隣人の楽しそうな歌声が脳内でぐわんぐわんと反響する。
前向きロケット弾、すすめロケット弾。
あまりに馬鹿馬鹿しくて、虚しくて、この三人組の一人の正体が分かってしまって、俺は声をあげゲラゲラ笑った。
「は、ははは、ははははははははははははは!! 天界に帰れ!!! 駄洒落か!! ふ、ははははははははは!! くそっ腹が痛い!」
咳き込んで体をくの字に曲げ、頭をハンドルに押し付けながらまだなお笑う。
コナンくんが横で困惑している声が聞こえるが、世代ではない彼が元ネタを知るわけもない。元ネタあってこその一連の流れなのだから……笑えるのはよほどのポケモン好きか同世代だけだろう。
「相談役! 目標、無事に軌道を海上に逸らしました!」
「そうか。……よし、撤収にゃ!」
「了解しました!」
舞台の影でパソコンを弄っていた男がニャースに声をかける。おい待て、今そいつは相談役と呼び掛けなかったか? 夏と年末年始に開催されるイベントに関するネットニュースの、画像欄に一枚はいる色物コスプレの男が――相談役だと?
信じられない、いいや、信じたくない事実に笑いが引っ込み真顔になった。
「はー撤収撤収。そうだ聞いてよムサシ(仮)〜。月末月初忙しいのに仕事サボリーノしちゃったよぉ」
「忙しい朝にぴったりな表現ね。大丈夫よ、こちらから連絡しておいたから」
「わーいムサシ(仮)さん素敵――!」

一体どこに隠れていたのやら、作業着姿の十数人の男達が現れると舞台セットを見る間に解体していく。慌てて車を下りロケット団に駆け寄れば……やはりコジローコスプレの主はうちの家庭用笑撃ｃｌｉｐ鼎さんだ。化粧で上手く隠しているが顔の作りは変わらない。
「教えて下さい。――俺達では、どうにもならなかったのか」
行先を塞いで立つ俺に鼎さんは肩をすくめた。
「どうにかなっただろうけど、カプセルはタワーにかすったね」
そして、柔らかく微笑みを浮かべ俺の左肩を突いた。
「怪我がなくて良かったよ」
――バラバラバラと音が近づいてくる。振り返ればニャースが長い棒でビルの外から何か縄梯子のようなものを内側に引っ張り込み、ムサシ（仮）と共にそれをしっかり掴んでいた。
「コジロー（仮）、逃げるわよ！」
「あ、待って！」
鼎さんはするりと俺の横をすり抜けてムサシと合流し、縄梯子にしがみつくように掴まった。
「あーばよーっ！」
「楽しい余興じゃったわい、アーッアッアッアッ!!」
「また機会があればやりましょう、おじさま」
ヘリに吊り下げられ去っていく彼等を見送り、ため息を吐いてしゃがみこむ。うちのあれは幸運の女神だったのか、それとも愉快犯ならぬ愉快神だったのか。とりあえず破壊犯であることは確かだろう。
「安室さん……あいつらは何だったの？　知ってるなら教えて」
ある程度までなら教えても問題ないと判断してコナンくんの質問に答える。
「人間二人と、人外一人だ」
「見たら分かるよ」

数日ぶりに帰ったら我が家、Ｗｉ―Ｆｉを繋いでなんとなくホーム画面を見つめた――私の目に飛び込んできたのは、７月２９日の表

示。

「……は？」

１６／２３

もう過ぎたと思っていた月曜日が、後ろ歩きで引き返してきた。一歩進んだはずが二歩下がっていたことに気付いたときのような気分だ。面倒でござる！　面倒でござる！　仕事したくないでござる！

とはいえ、それでおちんぎんを銀行のお口に挿入れてもらっている立場。重い足を引きずり仕事に行き日が沈んだ後に家に辿り着けば……隣室、本郷さんのお宅は真っ暗だ。

ドアを開け部屋に入り、靴を脱ぎ捨ててスーツも投げ捨てる。浴槽に栓をし自動湯張りボタンを押す。録音が「お湯張りします」とアナウンスする。

「うん」

決まったアナウンスに返事をして、ぼんやり天井を仰いだ。

――隣人・本郷さんはフルヤ＝キリストだった。輝けるご尊顔は仮設ポアロではなく常設ポアロで笑顔を振り撒き、鍛えられた肉体は魅せるためではなく戦うため、後味にふわりと甘さを感じる声は確かに彼本人のもので、体格の良さを誇る欧米の血も流れる国産狼は国のため人のため牙を研いでいる。

見た目がいい。顔が良い。声も良ければ信念も素晴らしい。存在がもう尊く、つまり例えるならば人々を救わんがため現れる弥勒菩薩。拝まないなどありえない。半跏思惟像ポーズなどされてみろ、五十六億七千万年後の世界というのは今だと確信が持てる。憂き世は浮き世からの嬉き世となって春爛漫、除夜の鐘はビートを刻みポックリ寺参りは不要になる。つまりフルヤ＝キリストは降谷菩薩でもあったのだ……！

六道巡りは光の速さで終了、堕ちてそして巡った結果待っているのは解脱。悟りを開き第三の目が開かれ額から溢れるチャクラ、だが忍術は使えないし文殊も生み出せない。Ｄａｍ　ｉｔ!!!!

ちなみに私がいと尊くして貴き存在・降谷をキリストと言ったり菩薩と言ったりするのに何故イスラムで例えないのか謎に思うかもしれないがイスラムでは偶像崇拝禁止だ！　説明は以上だ！

話は戻って降谷菩薩だ。彼の信念と言えば、まさに死をも厭わぬ覚悟。大のために小を切り捨て、その小に自分を含んでも構わないという決意！　これでは菩薩というより帝釈天の方が相応しいかもしれないが救世主としての面を強調したいので降谷菩薩だ。

――自分すらも切り捨てているということは降谷菩薩はフルヤ＝キリストであり、そしてフルヤ＝キリステでもあった？……語感が悪いうえ悲しくなるから止めよう。

つまりだ。降谷菩薩は「この身は既に覚悟完了」であり、その決意を翻させる手段はこの世に存在しない。殴って止められる立場の人間は全員死亡、泣いて止められるだろう家族は未登場つまり既に鬼籍の可能性ふぇぇ泣いた……。

我が身を賭して救世のため働き続ける降谷菩薩、彼の心を占めるのは愛だ。愛あってこそのひたむきな献身。友愛に親愛、家族愛、愛国心……そして温かく優しい初恋は先生に捧げられ、それら全ての愛は色とりどりに美しい宝石となった。

結晶化すればそれの時は止まる、琥珀のように。分かるか分かるよな分かってくれたか友よ、だから降谷菩薩の心の時間は既に時を刻んでいないのだ。

――「同じ釜の飯を食った仲」というものは、それを経験したことのない人々が想像するより固い。大学で寮に入った際、同室者とは合わなくて絆など深まる余地はなかったが、二つ隣の部屋にいた同学年の子とは寮を出てからもずっと交流が続く親友になった。残念ながら趣味は合わないけれど、同じ目線で肩を組んで歩ける同志だ。あいにく私にはそんな相手はいないが「同じ病院で生まれ同じ幼稚園と小学校に通った隣家の幼馴染み」とほぼ同等といえる絆を結んでいるのではないだろうか。

つまり馬の合った同じ寮の相手というものは兄弟姉妹であり、双子であるというわけだ。

だから彼は、大切な人を失う度に、心が前に進むために必要な動力を宝石にしてしまって――きっとこれから大切な人を作らないのだろう。私はそう思っている。

つまり私が何を言いたいかと言えばだ。降谷菩薩は尊い。言語化できないほど尊い……。

そんな尊い存在が隣の部屋に住んでいるなどと誰が想像できるだろう。ただ似ているだけの他人と思うのが普通だ。似ているがゆえに憎く思えてしまうのは仕方のないことだ。

ところでナザレのイエスの弟子ペトロは鶏が鳴くまでに三度「私はイエスなど知らない」と答えたが、初代ローマ教皇とされている。そして仏の顔も三度までなら有効だという。

つまり私は大丈夫だ。確か二度しか罵っていないから。

大丈夫だ、問題ない。……嘘です許してください何でもしますから！

「お湯張りが、完了しました」

「ど畜生ありがとよ！」

顔を覆ってしゃがみこんだ。

泣きたいつらい。

１７／２３

今年二度目の八月一日は昨日の話。木曜日の勤務を終えた私に敵などいない。あとは明日だけ働けば素敵な土日が待っている。

でも今月の十一日、山の日が土曜日ってどういうことなんですか!?

振替されるのは日曜日だけなんですよバンバン！　だいたい「休日」が法律的には日曜日だけというのはふざけていると思う。日本人は働き過ぎなのだから週の休日は四日にして土曜と日曜は完全な休日とし前半後半の二チームに分かれ、水曜日を引き継ぎ日にしたら良いのではないか。それが嫌ならそういう勤務形態ではない職や会社を選べば良い。

それか定時を十五時にしてそれ以降は残業代を出してくれ。

生きるのが辛いのがいきつらなら、仕事するのが辛いのはしごつらだろうか？――死後もなお辛いの略にも聞こえるから止めよう。仕事したくない気持ちを込め、いつものように浴室で高らかに歌い上げる。

「はたらきたくないでござる」

正直なことを言えば外にも出たくないでござる。風呂と布団を往復して布団の中でも浴槽の中でもアニメを見て合間にご飯を食べ、部屋を出ることがあればゲーセンとアニメ○トとら○あなゲー○ーズまんだ○けヨド○シカメラを巡り帰宅すればあ○あみとプレミアムバン○イを検索し、コンビニのお弁当宅配にジャ○プサン○ーマガ○ンも一緒に持ってきてもらえるようにお願いして引きこもりたい。

それで給料がほしい。ボーナスもあると嬉しい。

「ま、無理ですよね！　知ってた！」

欲望しかない乙女の祈りを投げ捨て、スラックス派なのに白くない脚を浴槽の縁に掛け湯の中に頭まで沈む。簡単他殺死体の出来上がりだ。

耳の穴は空気の塊がお湯を防ぐが、鼻にはウォールマリアもファイヤーウォールもないのでまさに進撃のお湯。ボコボコと鼻から調査兵団もとい息を吐き出して息苦しくなったところで体を持ち上げた。

先輩は好きだ。同期も好きだ。後輩は一部を除いて可愛いし、尊敬できる上司も一人二人いる。だからこれは子供じみた我が儘なのだ――辞めたいなど。

自分で望んで今の職場に入った。まさか入れるとは思ってもいなかったから、なんてラッキーなんだろうと思ったとも。

恵まれた身分だ。給料は良く、ボーナスもしっかり出る。安定した仕事だ。準公務員で、年に一度昇給する、良い職場なのだ。

だがここは……顧客の自殺や、事故死の話が頻繁に聞こえてくる。「心を病んで辞めていったならまだマシ」などと思うようになってしまう仕事内容に、どんどん心が磨耗していく。

ナントカさんが自殺したと聞く度に頭や肩が重くなり、埋葬料支払いの関係データと同じフォルダに「お悔やみの手紙」のテンプレートが保存されているのを見る度に心と体がぎゅうぎゅうと押し潰されていくような感覚が襲ってくる。事故死した、職務中に殺された、大怪我を負い仕事ができなくなった、心を壊して出勤できなくなった……そういう話を聞く度に頭がぐらぐら揺れ、椅子から立ち上がる気力すら失せる。

私の心は低反発クッションだ。始めは時間経過で元の形に戻れたとしても、何度も繰り返すうちにへたってきて元の姿に戻れなくなる。

ガムのように柔軟で強い心だったなら、こんなに疲れることもなかったろう。

「ほんと……まじで辞めたい」

それか、他の部署に変えさせてほしい。宿泊関係とか。要望はあげているが、上司の表情を見るに来年の配置替えも期待薄だ。

「一秒目をつぶって空を見た」

よっこらせっくす！

地元に就職する友達が、就職前に行った最後のカラオケで歌ってくれた。私が歌うものじゃないのかと聞いたら――「この歌詞みたいな気持ちになれるほどあんたの心は強くないじゃん」と全くその通りなことを言われた。仰る通り元気になれてません。現在進行形で大丈

夫じゃない。
デンモクを差し出しながら「返事は？」と聞かれたから、泣きながら宇宙戦艦ヤ○トを熱唱した。さらば地元よ愛する人よ。
顔も知らない相手のことでいちいち凹んでたら疲れちゃうよ、と何度となく先輩に肩を叩かれてきた。分かっている、理解っているが辛いのだ。他人と自分の境界線が曖昧で、どこまで踏み込んで良いのか踏み込まずにいるべきなのか、さっぱり感覚が掴めない。
感情移入し過ぎて訳が分からなくなることなどままある話。どうにか身につけた防衛方法は「誰かと親しくなろうとは考えない。相手に踏み込まない相手から踏み込ませない」。
親しくなくともこんなに辛いのだ。もし親しい相手であったなら、恥も外聞もなく泣いてしまうに違いない。だから親しくならないように気を付けているのに……心は毎日重だるい。
「神様は忙しくて今手が離せない」
歌の力で強くなれたら良いのに。
頬にべったりと貼り付いた髪をぐしゃぐしゃに掻き回し、ため息を吐いた。
「犯人はあなたです！」
殺人事件の犯人を追い詰める福井県の海岸のような音をたてて風呂を上がり、あまり暑いので下着のみの姿でドライヤーを掛けつつ風呂の残り湯を洗濯機に回す。水を吸い込む機械とドライヤーの音が騒がしい。
――数年前の今頃のことだった。まだ私が新人で、窓口対応も覚束ない頃の事だった。うちの支部で受け持つ人達の中で亡くなった人が出たと部署がざわついた……自殺だった。独身の四十代男性で、部下から慕われる真面目で正義感に溢れた人だったらしい。
そんな話を聞くともう駄目で、少し涙ぐんでしまった私に、当時は同じ部署だった先輩はこう言った。
「泣くならね、生きてる人のために泣くの。死んだ人のために泣いたってもう本人には伝わらないのよ」
言葉の重さよりも先輩の格好良さに感動して流れかけていた涙が

引っ込んだ。先輩は苦笑を浮かべながら言葉を続ける。
「なーんて、これうちの祖母の受け売りなんだけどね！」
ハハと短く笑って、「でも」と自分の言葉を否定する。
「これって親しい人との別れの時に言えることなんだよね。今回亡くなられた方なんてぶっちゃけ名前はもとより顔すら覚えてないような相手だし、こうして何年もこの仕事やってるとだんだんそういう感情が麻痺してきちゃって、『あ、またか』みたいに思うようになっちゃうのよね。だから、私はそうして泣ける鼎が凄いと思うし素敵だとも思うよ」
先輩、今は別の部署で上司のパワハラで目が死んでいる先輩。先輩はそのうち慣れると言っていたけれど、いつまで経っても人の死に慣れてきた気がしません。先輩への上司からのパワハラみたいに毎度毎度ダメージを受けて心は瀕死、やる気を何度チャージしてもパンクしたタイヤは膨らみません。わーい仲間！
「あー、くそ」
乾いた頭を振ってドライヤーと浴槽に突っ込んでいた吸水装置のスイッチを切り、洗剤と柔軟剤を目分量で入れて洗濯機のスイッチを押した。首回りがダルダルになったTシャツと膝上の短パンを穿いてのったりもったり洗面所を出る。
窓から差し込む日光の死角にあり日焼けしない場所に安置した、ゲーセンで七千五百円かけてゲットしたポアロ安室さんフィギュア。その前に立ち、柏手。
ただひっそりと手を合わせるだけでは仏様――死者になってしまうため祈り方は手を組むクリスチャン式か神道式でやっている。隣の家にご本尊が御住まいになられているとはいえ、本人に向かって柏手を打つのは憚られるし、本人と知らなかった間にかなり脳内で罵っている。しばらく顔を合わせるようなことは避けよう。
――そう思っていたのだが。
「アムサンドには……勝てなかったよ……」
即墜ち2コマか。十回は断ったというのに「作りすぎてしまったので」と押し付けられるように渡されてしまったアムサンド。神の手に

よるアムサンドだぞ気楽にヒョイパク食べられるわけがあるか美味しい！　美味しい！　美味しくて涙が出ちゃうだって女の子だもん。

ところで、アムサンドを貰う時に降谷菩薩から暖かく優しい目で見守られていた気がするのは何故だろう。全く解せぬ。

番外編・某演説パロ

諸君、私は降谷零が好きだ。
諸君、私は降谷零が好きだ。
諸君、私は降谷零が大好きだ。
あの顔が好きだ。
あの声が好きだ。
あの目が好きだ。
あの眉が好きだ。
あの口が好きだ。
あの手が好きだ。
あの腕が好きだ。
あの脚が好きだ。
存在全て好きだ。
ポアロで、街道で、車内で、職場で、屋上で、物置で、海上で、鉄橋で、家の中で、組織で――この地上で振る舞われるありとあらゆる降谷零の行動が大好きだ。
拳銃の部品を並べ丁寧に清掃するあの真面目さが好きだ。
部品が少ないためさほど清掃に時間がかからないとはいえ、毎晩ウェスでフキフキしているのだろう姿を見ると心が踊る。
いくら仮の姿だとしてもポアロでのアルバイトにも真剣に取り組む姿が好きだ。
アイスコーヒーが賄いでちょうど消えたときには胸がすくような気持ちだった。
親の仇でも見るような目で百の仮面でも被ってみせると呟く強気なところが好きだ。
自分への絶対の自信を持ち、自らの敵を忘れないように心の炎を灯し続ける様子など感動すら覚える。
年上の部下を従え肉体言語で指導する姿はもうたまらない。
部下から尊敬しつつも一歩引かれ、理解できない存在のように思われているのも最高だ。

哀れな風見がコナンに盗聴マイクを仕掛けられ、それを降谷に関節技を極められながら指摘されたシーンなど絶頂すら覚える。
赤井を目の前にして正気を保てず思考が滅茶苦茶にされる姿が好きだ。
自らが守らねばならない部下や黒の組織によるテロのことを忘れてしまうほどの激情を見るととても悲しいものだ。
赤井の言動に振り回され心乱される姿が好きだ。
あの男に実は繊細なガラスのハートを守られているなど全く屈辱の極みだ。
諸君、私は降谷零を、地獄から這い上がってきたような目をした降谷零を望んでいる。
諸君、私に同意をくれる神父諸君。君達は一体何を望んでいる？
更なる降谷零を望むか？
餓えた我々に情け容赦なく雨霰と降り注ぐ登場シーンを望むか？
鉄風雷火の限りを尽くし三千世界の鴉を殺す嵐の様な降谷零を望むか？
――よろしい、ならば降谷零だ。
我々は全身全霊で降谷零を望み求める十字軍の尖兵だ。
だがこの暗い闇の底で、赤井や沖矢ばかり見せられながら降谷零の登場を真摯に待ち続けてきた我々に、ただの降谷零ではもはや足りない!!
降谷零を!!
一から十までの降谷零尽くしを!!
我らフルヤ＝クリスチャンは現在六千六百人（※ｐｉｘｉｖ　ｂｏｏｋｍａｒｋ数調べ）余りの少数派（）に過ぎない。
だが諸君は一騎当千の古強者だと私は信仰している。ならば我らは諸君と私で総力六百六十万と一人の軍集団となる。
赤井推し過ぎる原作に引きずられて一時の眠りについている連中を叩き起こそう。
両肩をつかんでガクガク揺らし、眼を開けさせ思い出させよう。
連中に降谷零の尊さを思い出させてやる。

連中に我々の信仰は公安がＦＢＩの日陰に追いやられている時においても燦然と輝き続けていることを教えてやる。
天上にあるべき我らの降谷零には赤井単品推し達の認識では思いもよらない魅力があることを理解させてやる。
六千人のフルヤ＝クリスチャンもしくは仏教降谷宗と呼ぶべき者共で構成された戦闘団で世界を燃やし尽くしてやる。
――そうだ、ゼロの日常だ。これこそが待ちに望んだ降谷零信者への光だ。
私は諸君らと同様コンビニに走ったぞ。最近では週刊誌すら紐で縛っているあそこ……立ち読みができた時代が懐かしいコンビニへ。
そして降谷零という戦艦はついに大洋を渡り、丘へと我ら戦士を走らす。
フルヤ＝クリスチャン達に告ぐ。神父各員に伝達――教皇命令である。
さぁ、諸君。天地創造の時間だ。
（2話も最高かよ）

「流石かなちゃん、頭おかしい」
「へ？　どこが？」
「全部かな」
これは五月、本郷さんがフルヤ＝キリストと知る前のある日のことだった。
―人人人人―
＞　教皇　＜
？Y^ Y^ Y？

１８／２３

壁越しの歌声を聞きながら思う。彼女の持ち歌はどうなっているのだろう、と。

『マジカルぬこレンレンっ！』

五つの声音を使い分け、掛け合いすらも完璧にこなす彼女の無駄なスキルに顔を覆う。

先日は危険な登り棒の歌を歌い、その前にはひたすらニャしか言わない息継ぎのない歌を息の続く限り歌っていた。だがニャニャニャニャ歌った後に何故Ｓｅｘｙ，ｓｅｘｙを選ぶのか。当時のＮ○Ｋは子供向けにしては対象年齢が高めのアニメを流していた記憶があるが、たとえ高学年だとしても、子供が口ずさむには問題がある歌を何故エンディングにしたのだろう。

『もすかーう』

懐かしい。が、懐かしすぎる。いくつだお前は。

『オープンカーで海辺飛ばしたら』

本当にお前はいくつだ。もしかして世代という概念がないのか？

一昨日の一曲はＳｉ　ｓｉ　ｃｉａ○なんていう世代以外にはマイナー極まりない歌だったし、緑の中を走り抜けていくのがポルシェではなく深紅な車という紅白版も先日聞いた。かと思えばラッキークッキー八代○紀に鼻毛真拳の使い手、次代魔王の座を争う子供達とその相棒やらと八十年代後半から九十年代キッズなアニソンが続くなど、本当に訳が分からない。

『ふんぬらば！』

勢いの良い水音と共にアメフトを思い出す掛け声があがり、吸水機とドライヤーの騒がしい音が響きだす。

浴槽の排水口側にある小窓の外は真っ暗で、ガラス越しにひんやりとした気配が漂う。

――暦は十一月の後半。もうあと数日もすれば月を跨ごうとしていた。

※※※

誠に不本意であるが、日本国内で今まで好き勝手してくれていたＦＢＩと手を組むことになった。各国の首脳陣と顔の利く工藤夫妻……特に工藤優作氏に説得されたためであるが、これまでの数々行われてきた事前事後問わず申請のなかった違法行為に関してまで水に流したわけではない。後で正式に謝罪と賠償――色々と便宜を求めることは確定している。

ＦＢＩの者達は「仲間になったらそれ以前の確執は無くなるもの」などとアメコミ的思考回路をしているかもしれないが、奴等のせいで被った日本の国家的損失は億でも足りない。仕出かしたばかりならまだ億で済んだろうに、こういうネガティブな影響というものはトイチで複利、雪だるま式に負債が膨らんでいくものだ。

――二十年のあいだ心に燃やし続けた復讐は、あと半年もすれば灰へと変わる。やっとだ。やっと終わらせることができる。

恩師を友人を仲間を罪なき人々を無造作かつ一方的に搾取し浪費してきた組織を、叩き潰してやれる目算がようやっとついた。俺の心の中に今もなお存在する、幼い頃の俺が、俺を見上げて笑う。

『おせーぞ！　でも、これで先生や明美を連れてったヤツラ、やっと懲らしめられるな』

青臭く真剣な正義感を瞳に灯し続ける少年がいなければ、ここまでひたすらに走ることはなかったろう。ただ前だけ見て走ることはできなかっただろう。

少年は時に俺を怒鳴りつけ、時に俺の背中を力強く押し、時に泣き喚いた。どうしてあいつらはのうのうと生きていて、先生は死んだんだ。どうしてあんなヤツラがいるんだ。どうしてこんなにも奪われていくんだ。どうして俺の大切なものをなにもかも奪っていくんだ。ふざけるな！　奪うな、俺から奪うな！

嘆きはいつも彼の怒りの点火剤で、まろい頬を激情の涙に濡らしながら声を響かせる。

ヤツラを許すな。ヤツラを生かしておくな。ヤツラを人骨で出来た玉座から引き摺り下ろし、全ての罪状を白日の下に晒せ。愛と思いやりに満ちた微笑みを穢し汚泥で塗り潰した人型の獣共に、平等の女

神による正義の裁きを下せ。
その声こそが薪であり、ごうごうと燃え盛る炎自身だ。止まりそうになる脚を動かし萎えそうになる心を奮い立たせる、俺が俺である原動力だ。
電気を付けていない暗い室内で、ベッドに腰掛け部屋の隅――闇を見つめた。銀色の長髪が、金に波打つ髪が、その闇にちらついている。それに腕を伸ばし、握り潰す。
「そのためなら、なんだって出来るさ……！」
憎しみを押し殺すことなら慣れている。足音と気配を雨に消し、白刃を奮う隙を待ち続ける辛抱強さはあるつもりだ。息を低め、身を屈めて目と耳に全神経を集中させ、命を賭け金に組織の壊滅を狙う。
スマホが九時半を知らせる。スライドでアラームを止めて風呂場に視線をやる――今日はやめておこう。
だが、やめておこうと考えていたのに微かに聴こえる歌声に釣られて浴室のドアに肩を寄せた。
『重い荷物を枕にしたら』
公安として、復讐者として大量の重荷を背負っている自覚は確かにある。組織の紡ぐ悲しみの連鎖を終わらせようと望む俺への、彼女からの静かな応援歌だろうか？
しかし初代平成ライダーとは、やはりまた懐かしい。
『シャバドゥビダッチヘーンシーン！』
待て、それは別のライダーだ。
ドライヤーの音を聴きながら片手で顔を覆い、こらえきれず肩を揺らす。彼女はいつも、どんな時も俺に元気をくれる。組織に立ち向かう原動力は悔し涙だけではないのだと、人の笑顔を幸福を守りたいと願う愛情もなのだと教えてくれる。
守りたい。守ってみせる。だから――このセーフハウスから引き上げる。
俺がこのセーフハウスを頻繁に使っていたことなど、組織には既にバレている。ほぼ毎日帰っていたのだから当然だ、馬鹿か俺は。
彼女や他の住人に迷惑を掛けてしまう前に離れるべきだ。……な

に、たった数ヵ月別れが早まるだけさ。何度も何度も背中を押してもらっておいて、最後まで背中を押していてほしいと望むなどみっともない。恥ずかしいじゃないか。

年末を前にさよならをしよう。

クリスマスパーティーなんてしたら……彼女は来てくれるだろうか？　最後の我が儘だ、叶えてくれるかもしれない。

ラインでクリスマスの予定を聞けば確実に夜遅くまで仕事だといい、イブはと聞けば昼から女友達とデートだという。けんもほろろで泣けてくる。世間一般の女性なら友達より俺との予定を優先するだろうに、よりにもよって「デート」などと言うのだから、いっそ清々しいほどに俺へ興味がないことが窺える。

「冷たすぎないか……」

そう溢した直後、届いたメッセージは『２３日なら空いてます』。

十二月二十三日、少し早いクリスマスパーティーが決まった。

１９／２３

クリスマスイブイブにフルヤ＝キリストから食事に誘われた私の心境を答えよ。

まぢむり……リスカしょ……。

考えてもみろ相手はフルヤ＝キリストだ！　自己犠牲な慈愛に満ちた微笑みを浮かべ地獄に糸を垂らす降谷菩薩だ！

今日は外見的特徴から讃えていくぞ先ずはその小麦色の肌！　生まれつきの色味だとは分かっているが健康的！　スポーツをしていらっしゃいましたか？　ああテニスで全国大会に……そしてボクシングもですか。テニスは屋外競技だというのにこのアラサー、肌がお若くていらっしゃる。紫外線なんて跳ね返すほど自分自身が輝いているから当然だろ知ってた常識ですよねフルヤ＝キリスト検定三級のボーナス問題だから誰でも答えられることだったね。シミシワ一つないパッツンパッツンでぴちぴちぴっち、それが降谷菩薩のお肌！

まるでサンドペーパーで表面を丁寧に磨きあげたよう！　びゅーちふる！

そして次にその凛々しい眉！　意思の強さとその心の脆さを表すように少し細めで鋭利、まさに冷たく輝く氷の刃。その刃を笑顔に隠すのが安室透、蝋燭の揺れる光に透かすのがバーボン。救急搬送レベルで素晴らしい。誰か担架持ってきてェ！

そしてそして――海外の空とは違う少し白みがかった優しい青の瞳はまさに日本の青空。つまり降谷菩薩は日本の空を切り取ってその双つの瞳に貼り付けてあるのだ――語彙力が焼失する。萌えと燃えのあまり脳味噌がバーニング、壊れたレコードのように「尊い」しか言えなくなるマジで。日本人で良かった――！

だが何よりも注目すべきはその優しい色合いの金髪だ。実るほど頭を垂れる稲の色だ。真っ白な炊きたてご飯が輝く！　誇れよ日本の米を！

炊きたてご飯と言えば、飯盒炊爨をしたことのある人は多いだろう――改めて考えてみれば小学校時代はもう十数年も前。時間が過ぎ

るのが速すぎる時よ止まれお前は美しいメフィストフェレスさんいらっしゃいませ。

話を飯盒炊爨に戻そう。キャンプ場の炊事場で力強く磨いでしまって半ば砕けた米とプリントに書かれている通りの量の水を飯盒に入れ、薪が炎を揺らす耐熱煉瓦の竈に掛け……先に作り始めていたカレーの匂いに腹の虫を鳴らしながらお米を炊いた思い出。蓋の隙間からぷちぷちと白い泡が弾けるのを見てそろそろだと腰を浮かせ、蓋を下にして蒸らす時間はとても長く感じられた。手に付いた煤に大騒ぎしながら食べたご飯は美味しくて楽しかった。

――米とは日本の心である。つまり実る稲穂の髪を持つフルヤ＝キリストは日本の心を擬人化したイメージキャラクター、ホンダ某さんと同じ存在なのだ。降谷の愛車はＭＡＺ○ＡだがＨＯＮ○Ａと同じなのだ。恐れ入りますと言いながらＨＯ○ＤＡがＭＡ○ＤＡを乗り回すアニメが私の脳内で放映された。Ｍ○ＺＤＡは泣いて怒りそうだ。許せＲＸ―７……どちらにせよ国産だ。

話を戻して次は首から下、鍛え上げられた肉体だ。テニスとボクシングにより無駄を無くした美しい体。テニスの番組を見れば分かるが、テニスプレーヤーの脚は凄い。相手が右へ左へ打ち返す球を追う瞬発力とけして短くない試合時間を走り続ける持久力のどちらも兼ね備えた最強の脚だ。そして常に良い姿勢でラケットを振れるはずがなく、柔軟さと力強さが共存する上半身。なるほどサンデ……ボクサー向きじゃねーの。

日本を愛しているというのに武器として選んだのが空手や柔道ではなくボクシングなのは、空手や柔道を復讐の手段に使いたくなかったからではないだろうか。警官に柔道や剣道は必須科目だったはず、警察学校に入る前から予習しておけば得はあれど損はない。だというのにフルヤ＝キリストがボクシングを使っているのには理由があるはずだ。例えば正義の執行にしか柔道を使わないと決めている、とか。

武術には詳しくないので分からないが、風見にかけた関節技は柔道の技に近いのではないだろうか？　ボクシングに関節技などないし、

警察には逮捕術という犯人を制圧するための格闘技があると聞いたことがある。
警察であるために身につけた武力的手段を組織のためには使わない……尊すぎかよ。だって日本人だもん、涙が出ちゃう！
外見からしてもう百点満点の尊さテストで百万点。ハーマイオニーでさえ百点満点で二百点が限度なのに降谷零の容姿はまさしく一粒万倍日！　磯野、田植えしようぜ！　それか宝くじ買おうぜ！
そして中身の方はといえば三つの顔を持つ男。鯉口を切られ僅かに顔を覗かせる濡れた刃紋降谷零、日溜まりに微睡む猛獣安室透、月のない夜闇に酒場の光を背負う影バーボン。そのどれも魅力的だというのに三つとも全て同一人物が担っているのだ、ときめかないはずがなかった。外見に中身を加算して総合ポイントは十兆点。加算ではなく乗算では、などという突っ込みは聞かない。
ちなみなフリーザの戦闘力は五十三万、イニ〇スタは三十二億、世界の男は三十五億。くっくっくっ……兆の桁を数えられるのはフルヤ＝キリストだけ！　はっきりわかんだね！
それでだ。その十兆の男降谷零と、カラオケ行ってショッピングして降谷宅で手作りディナーを頂くことになった。あまりの重責……お相手が勤まるとは思えぬ……なんの苦行だこれは。安全そうな私となら平和な休日が過ごせるとでも思ったのだろうか？　無茶言うな、私はそんな逆死神スキルなど持っていない。ＴＯＵＴＯは加藤保〇が平将門を復活させた帝都だったに違いないのだ、なにせ犬も歩けば殺人事件に巻き込まれるＴＯＵＴＯ。間違いなく呪われている。
風水に頼れば良いのだろうか？　黄色が良いと聞いたことがあるような気もする。
来週に迫るデートの予定を話し合うため布団に寝転がりながらすずとライン通話をしていて――そろそろ重い腰をあげようと決めた。隣人フルヤ＝キリストのことを相談しよう、と。言おうか言うまいかずっと悩んでいたが――話そう。そして定期的に送られてくる安コ十八禁同人誌を返そう。念写は無理でござる。
「すずちゃん、カラオケで聞いて欲しいことがある」

『突然改まってどうしたのよ。……でも、私も実は話したいことと渡したいものがあるわ』
「え、何それ今聞きたい聞きたいうっきー！」
『堪え性のないおさるさんはバナナ食べてて』
「バーナーナッとってもハッピーフィーリング」
『はいはい鈍器鈍器。じゃあ二十四日にね』
――どうしたんだろうか、今日のすずはすずらしくなかった。良い意味で金持ちらしい余裕が見えず、何かに悩んで焦っているような雰囲気だった。
一方的に切られてしまった通話が不可解で心配で、通話終了のマークを見下ろしながら眉根を寄せる。二十四日に何が待っているのか……嫌な想像が浮かびごくりと唾を飲み込む。
「まさか倒産の危機とか夜逃げとかじゃないよね……」
すずの父親は名の知れたＩＴ企業の創業者だ、ショッギョムッジョで盛者必衰とはいえ、そう簡単にあの規模の会社が潰れることはないと思いたい。
――世はクリスマスシーズン。街中では浮かれポンチがイキって喧嘩したり恋人がいなくてやけ酒に走ったりと大忙しで、警官も恋人たちを内心罵り独り身を憐れみながら秩序維持に右へ左へ。
その明るく騒がしいイルミネーションの影で夜逃げを計画するすず一家……夜逃げ○本舗で映画を一本作れそうだが、そんなことを言って笑ってられるような問題ではない。夜逃げと決まったわけではないがそれくらい重要そうだ。
今までみたいに会うのが難しくなりそうな、胸が苦しくなるような理由なのではないか？　それは、なんというか。
「嫌だなぁ」
独り言は布団に吸い込まれて消えた。

２０／２３

一階のポスト前で待ち合わせてアパートを出て、マツダのＲＸ―７たんで向かったのはさっぱり見覚えのない名前のカラオケ屋――品の良い店のロゴマークからして、安さとある程度のサービスを提供するチェーンとは一線を画していることが分かる。

まだ築五年内だろう新しいビルの五階から七階が店舗ということでエレベーターに乗り、着いた受付では「予約の本郷です」で直ぐに部屋に案内される。

「し、シアタールーム……！」

「こちらのタブレットからお好きな映画や番組をお選びになりますと、正面のスクリーンでご視聴頂けます」

「ひょえー」

もちろんカラオケもお楽しみいただけます、などなどと説明を終えてドアが閉められる。

予定を組む際、何故かカラオケに行きたがる降谷さんを説得しきれず、歌うのは三時間までと話をつけた。こんな部屋を予約するとはじめから知っていれば六時間でも七時間でも良かったかもしれない――アメコミ映画ならリア充も見るだろうし。運悪く映画館で見るのを忘れた奇妙なドクターやアメージングな蜘蛛男など、一緒に見て楽しめるだろう映画がいくつか思い浮かんだ。勿体ないことをしたぜ。

このスクリーンが何インチなのかは分からないが、底辺は二メートルほどありそうだ。スクリーンのある正面の壁がだいたい四メートル、ドアからスクリーンまで……奥行きは五メートルほどあるから部屋の広さは二十平米前後だろう。二人だけで使うような部屋じゃないと思うが、置かれている椅子――皮張りの一人掛けソファーは二脚しかない。テーブルもソファーに腰かけた時にちょうど良いあたりの高さ、そこにフードメニューが置かれている。

「何か注文しましょうか――フライドポテトのディップはケチャップ、バジルマヨネーズ、明太子マヨネーズ、チーズソースの四種類から二つ選べるようですよ」

降谷さんは自分の上着や鞄のみならず私のコートなどもサクサク壁のフックにかけてしまい、私は気付いたらソファーにはまりこんでいた。エスコートスキルがカンストしておられる……ハニトラで身につけたのだろうか？　流石です！

ケチャップとバジルマヨに決めタブレットで注文、ドリンクは私がカルピスで降谷さんがエスプレッソだ。

「先にどうぞ」

「あー……では有り難く」

デンモクを渡され頭を下げる。降谷零はリア充……リア充にはアニソンらしい曲は明らかに悪手、後○園ゆうえんちでは僕と握手。この今日を迎えるために考えてきた曲は、そう――！

「走り疲れて倒れたまま」

いかにも「格好良さで選びました」的な雰囲気を醸し出す傷だらけのツバサだ！

初めて好きになった声優はうえだ○うじ、ハーメルでタケシだ！ちなみにフルートはカスミ、よってハーメルンのバイオ○ン弾きを見れば自動的にタケシとカスミのカップルリングが楽しめるのだ！でもＡｍａｚ○ｎ　ｐｒｉｍｅ　ｖｉｄｅｏでは検索しても入ってなかった！　何故だ！　坊やじゃないんだぞ！

気持ち良く歌いきり降谷さんを振り返れば、何故か涙ぐんでいる彼の姿があった。どうした何があった、その涙の理由を私に教えてほしいこの世の醜さに絶望したならば美しい物だけを貴方に伝えたい。

――例えば、地平線に沈んだ夕陽を受けて橙に輝く厚い雲と濃紺の空のグラデーション。まるで本人の姿は影に隠れようともその輝きと美しさは闇を照らすことを表しているようで、降谷菩薩の存在そのものだ。美しくて涙が出る。

例えば、四季折々に表情を変える街路樹。若葉が芽吹き華やぎ、黄緑に近かった葉は成長と共に深みを増していく。夏が過ぎ秋が終わる頃には紅葉した落ち葉が歩道を縁取り、子供らの宝物になる。幼い少年が淡い初恋と別れを経て成熟し、その成果が子供らの笑顔を守っている降谷菩薩の人生そのものだ。その考えに至ってからは街路樹

を見るだけで感動するようになった。樹というものは降谷菩薩という存在はなんと尊くて素晴らしいのか。
例えば、しとしとと雨の降る七月。雲間から差す光の筋や水玉を体中に散らした紫陽花、湿った土の匂いがするアパートの植え込み。薄ぼんやりと暗い世界に突然現れるそういった発見は、良く知っているものはずなのに何故か目新しい。同様に、何度も漫画を読み返してアニメも映画も繰り返し見ているのに、立ち上がる気力すら失せてしまった時に聞こえてくる降谷菩薩の声は宵闇の光だ。渇れた唇に水を浸してくれる。お陰で憂鬱だった梅雨が好きになった。
例えば、朝食のために切ったグレープフルーツ。包丁を入れた瞬間に部屋を満たす爽やかな香り、皮を剥けば弾ける瑞々しさ。酸っぱさの中に感じる甘さは癖があるがハマる。私はこのように毎日新鮮な気持ちで降谷菩薩への信仰と親愛を深めている。そして全ての食材には感謝を。
世界は美しい。その全てに降谷菩薩の姿を垣間見ることができるからだ
「どうしたんですか、ふぉん郷さん」
やばい降谷さんって呼びそうになった。
「いえ、なんでもありません」
「何でもないわけがないでしょう。泣くようなことがあったんですか？」
絨毯の床に膝を突いて見上げれば、潤んだ淡い青空から雫が小麦色の畑を滑り落ちていった。
「恥ずかしながら、感動しただけなんです。素晴らしい歌声と歌詞に」
歌ってください、と頼まれて歌わない私ではない。その期待に応えねばなるまい。
「特に何も望むことなんてない」
アニソンっぽくないアニソンその２。最近の日本のミュージックシーンでは少なくなった歌詞が深い歌だ。かつてはモ○娘。に憧れブロマイドを集め、友達と「だーぶるゆーでーす」を真似したものだ。あの頃は歌詞に意味がある時代だったと思う。最近そういった曲が

少ないように思うのは気のせいではないはずだ。
降谷さんを見たら声も出さずボロボロ泣いていた。大丈夫なのかこれは。もしかして私が泣かせたのか？　すずには上手いと言われているが、「音痴すぎて泣けた」とかそういうことだろうか。まさかそんなバナナ。降谷菩薩はそんな失礼な方ではない。たとえ酷い音痴が相手でも拍手してくださるのが降谷菩薩だ、解釈違いは自分の沼に帰ってください。
どう声を掛けたものかと手をうろつかせたところで届いたポテトとドリンク。ドアを開けて店員さんが現れたと思えば降谷さんの顔に涙はなかった。
あ……ありのまま、今起こったことを話すぜ！　俺は降谷さんが泣いている姿を見ていると思ったらいつの間にか普段の降谷さんだった。幻覚だろうか？　今キメてるドラッグは降谷零という名前の視覚聴覚に影響するドラッグだが、幻覚は見ないはずだ。何が起きた。
店員さんが去ったと思えばまた潤みだした瞳で見つめられ、こう乞われた。
「歌ってもらえませんか……貴方の歌をもっと聞いていたい」
そんなことを言われたらもう歌わないわけにはいかない。降谷菩薩がお望みであれば叶えるのが筋というものだ。
「いつもそばにいる人の」
ターちゃん、なんで声優をあれにしたんだ。
「世界中の大好きを集めても」
子供の頃、気張るときはギップルの真似をしていた。今でも時々うっかり口から出る。
「愛に気づいてください」
これのせいで友達にゲロシャブというあだ名を付けたくて堪らなかった。
「キミは何を望むの？」
どんな格好良い能力よりも何よりも、相手をメガネ好きに変える能力が一番好きだった。
だが、何故かはさっぱり理由が分からないが、降谷さんが泣いてい

る。号泣している。ここは笑わせて差し上げなければ……ならばこれだ。
「エブリバディイート牛丼！」
ドイツの科学力が世界一ならば日本の米は世界一ィ！　食らえ紫外線お前もおしまい。
「ふっ、ははっ……なんて曲だ……！」
目元を腫らしても美しさに陰りのない降谷さんが吹き出した。
私はずっと歌い続けていたし、降谷さんは泣いていた。揚げたてだったポテトは冷めカルピスはとっくに胃に消えた。端から見て変な状況だろう。
――泣くとストレスが解消すると言う。降谷さんは泣いてすっきりできた。ポテトは残念だがきっとこれで良かったのだ。ポテトは残念だが。
「ちょっとトイレ行ってきます」
受付で冷たい濡れタオルを頼み、トイレに行って戻れば保冷剤を包んだフェイスタオルを渡された。部屋に戻ればぼんやりとした表情の降谷さんがいる。
ドアの前でその儚い姿を目に焼き付ける。降谷さんはどんな様子でも美しく尊い。まるで嵐を待つ彼岸花のようだ。
「どうしました？」
「――いえ、何も。受付で濡れタオルを貰ってきましたよ」
目元を冷やす降谷さんはいつになく無防備に見えたが……きっと目元が隠れていたための勘違いだろう。

21／23

目の腫れが引いた降谷さんとぶらぶらデパートの中を歩く。化粧品はまあまあ安くて私の肌に合っているものを買っているし、ネックレスなどの装飾品は着けていると違和感しかないのでさして興味がなく、シンプルなイヤーカフや髪留め程度。正直なことを言えばデパートで買いたいものは全くない。

降谷さんも私がファッション等のブランド区画に興味がないことはすぐに分かったのだろう。ブランド区画をスルーして向かったのは地下の食料品売り場。各ブースがクリスマス限定商品に彩られ、お土産物だろう海苔巻きナッツすらクリスマスカラーの箱に入れられている。

「主菜はもう下拵えしてあるんです。おかずを買って帰りましょう」

「了解しました」

クリスマスだから主菜は鶏肉だろう。ローストチキンとか鶏のピラフ詰めとかそういったのがメインだとすればおかずに鶏肉は止めた方が良さそう……というわけで買ったのはサーモンと玉ねぎのマリネ。

「何か買うためにとりあえず買いました」と言わんばかりな買い物だ。降谷さんは私の買い物に付き合うつもりだったのだろうが、残念ながら私の物欲は薄い。それを瞬時に見てとった降谷さんが万能過ぎて震える。

ショッピングにかかったのは移動時間を含め一時間。デパートの滞在時間は二十分弱。予定ではショッピングに三時間を振り分けていた――計画を立ててくれた降谷さんにはとても申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

――だが本当に、何も買いたいと思うものがない。

良く考えてみてくれ。降谷菩薩にしてフルヤ＝キリストたる降谷零（隣人ではない方）以外に金を使う必要性があるのかどうか。

信者としてみっともない格好はできないから、身だしなみと清潔感は大切だろう。それらを満たすためにかかるお金は必要な出費だ。

だが、イン○タ映えが主目的なカフェ巡りやホテルの宿泊は、フルヤ＝キリストへの奉納にならない。つまり必要経費ではない――もし誰かがポアロ安室さんフィギュアを持ってナイトプールに行き、上手い具合に写真を撮り「ナイトプールにポアロが出張したようです♡」などとコメントを付けて投稿したならば、私は今すぐイ○スタをインストールしてハートを押しまくるから誰かやってほしい。

もちろん、これならば必要経費となる。

だが悲しいことに私にはカメラスキルもセンスもない。イ○スタに神を降臨させられない。よってそれらのオシャンティーで女子パワー溢れる行為は私の出費対象外となる。

食費も大事だ。健全な精神は健全な肉体に宿るもの。フルヤ＝キリストを健全な精神で崇め続けるためには良く食べ良く働いて良く寝る！　胃が弱いため胃薬が常備薬だが、なかなか健康的に信者生活を送れているのではないかと思う。

ちなみに嗜好品はどうなのかといえば、頭痛がするためタバコは吸わず、チューハイ一缶でハッピーになれるだけの（消化）能力の持ち主のため酒代はさほど掛からない。飲み会の割り勘はいつも損した気持ちになる。この世はワクに優しくできている……。

ネサフと漫画とアニメ以外に趣味はないし、月に一度一人カラオケをする以外の遊興費は公式グッズと同人誌、すずとのデート代。

はっきり言おう。コナン以下漫画やアニメと関係ない物にさっぱり興味が湧かない。だから買わないし、買う気すら起きない。物欲がないのではなく一極集中型なだけなのだ。

ただ、何かを買いたくとも買えない状態であることは否定しない。今月の私は金に餓えている。

先ずはすずとのデート代に一万五千円は確保。そして今日の予算に一万円の支出を考えていたが三千円くらいしか減っていない。――とりあえずこれで二万五千円。そして毎月のフルヤ＝キリスト貯金に五万、自動積立定期に毎月一万円。この時点でもう八万五千円。そして食費水光熱費アパート代その他……今月の給料は数百円しか残らないだろう。自転車操業ながらギリギリ生きていける、そんな状

態だ。
だが、生きていけるにも関わらず、私はフルヤ＝キリスト貯金から高額出金した。
出金の理由は一つ。今月、かなり高額な買い物をしてしまったからだ。――いま私の横でＲＸ―７たんのハンドルを握っている日本の至宝へのクリスマスプレゼントを買ったからだ。
プレゼントが何かと言えばキャタ○ラー社の超頑丈ＳＩＭフリースマホである。なんと降谷菩薩の身長の高さから落としても割れないタフさを誇るナイスガイで、カメラにサーモグラフィーの機能までついている。まさに降谷さん向けなスマホだ……素晴らしい。
考えてみろ、サーモグラフィーなんだぞサーモグラフィー！　浪漫だろう燃えるだろう!!　まじでサーモグラフィー！　サーモはサーモでもブレ○サーモではなくサーモグラフィー機能付き！　これはやばい！
このスマホを知ったとき、毎月おばちゃんが届けてくれたチャ○ンジの付属――金属に先端を触れさせたら音がなるオモチャや、鏡の屈折を利用した曲がり角の向こうを覗ける筒のオモチャを思い出した。チャレ○ジの封を開くときのワクワク感が再来し、気付けば歓声をあげていたほどだ。
サーモグラフィーが必要か、いつその機能を使うのかなどどうでも良いし、そんな無粋な質問をするのは止してほしい。それが心を熱くするから、買う。それだけのことなのだ。
ときめきはいつもプライスレス。
アパートに帰り、キャタピ○ースマホことキャタピーたんを入れた紙袋だけ取りに部屋に戻った。天井近くの掛け時計は短針がまだ３と４の間を指していて、どう考えても夕飯には早すぎる。
映画でも見れば二時間は時間を潰せるよな……そう考えたのは私だけではなかった。
「まだ夕食には早いですし、映画でも見ましょうか」
準備の良い降谷さんの手にはレンタルＤＶＤ、そのタイトルはヘアスプレー。クリスマスらしいアメリカンな家族映画や恋愛映画では

なく、トラボルタの肉襦袢踊るヘアスプレー。私は万歳をもってそのチョイスを歓迎した。

警察学校では同期から「K（声が良い）5」と呼ばれていた。花男かよと笑ったのは萩原で「顔が良いのKじゃないのは俺がいるからか？」と少し傷ついた顔をしたのは伊達、松田は「俺に耳元で囁かれたいやつは一回一箱で受け付けるぜ」とタバコの箱を振り、あいつはどうでも良さげに肩をすくめた。

周囲からそうひとまとめにされてあだ名をつけられるくらい、俺達は親しくつるんでいた。

ところで、警察学校の学生にとって一番重要なプリントは何かと言えば外出申請書、これに限る。パチンコ、食い道楽、買い物やデート――外出の目的はそれぞれ様々だが、俺達K（顔も良い）5は月に一、二度カラオケに行っていた。

なにせこのK（格好つけ）5は全員が天まで届くプライドの持ち主、いつか出来るであろう彼女とのデートや部署の二次会三次会で「声は良いのに音痴で残念」などと言われるのは許せなかったのだ。

よってカラオケの室内は罵声で溢れた。

「耳が腐るやばい耳が腐る」

「音程が外れすぎて逆にすごいわ」

「この美声を前にひでぇ言い様だな!?」

「誇れるのは声質だけ、はっきりわかんだね」

「あーん耳が死んだ！　この人でなし！」

「疲れたから帰って良いか？」

「降谷ァお前も歌うんだよォ！」

スパルタ式罵声訓練はなかなかの成果を生んだ。聞くに耐えないジャイアンはそこらの音痴に、微妙な音痴はまあまあ上手い程度に、普通は上手に進化した。

だがそこで止めておけば良いものを、K（考えなし）5の一人が「新人の間は所詮脇役だろ。上司の歌声を盛り上げるためのスキルも必要じゃないか？」などと言い出したことで流れが変わる。公平なじゃ

んけんにより伊達と萩原がマラカス、残りは全員タンバリンとなった。この時点で既に五人の脳みそは沸騰していたようだ。

――そして、K（こだわりが強い）5各人は不断の努力により無駄に無駄なほど高度な盛り上げスキルを身につけた。これこそ若さゆえの過ちというものなのだろう。

「せっかく皆で練習したのにな、機会を逃したよ」

鞄に突っ込んでいたタンバリン。思ったより安かったからと雑に扱い、地面に投げたり机を叩いたり伊達や松田を殴ったりしたせいで表面は傷だらけだ。ところどころ欠けたりもしている。

俺のタンバリンはK5にしか披露できていない。今では誰一人として俺がタンバリンを叩くことを知らない――K5は一人を残して全員死んだ。

K5なんてあだ名がつくくらい俺達は親しくつるみ、仲が良かった。一人は幼馴染みの腐れ縁だが、他の三人とも生涯の友になるのだろうと漫然と思っていた。たとえ十年会えなくとも十五年会えなくとも、再会すれば肩を組んで酒を呑みに行ける友であるのだろうと理由もなしに信じ込んでいた。

だが、もう、誰とも再会できない。四人の顔も声も思い出も記憶の海に沈んでいくばかりだ。

「お邪魔しまーす」

荷物を置いてくると言ってつい五分前に別れた鼎さんが、のほほんとした声と共にうちのドアを開けた。

手にはさっきまではなかった紙袋がある。訪問の手土産だろうか？　そんなものなくとも良いのに……むしろこちらが何か奉納するべきだと言うのに。

強い、立派だ、頭一つ二つ抜きん出ている、そう評価されてきたし、そう評価されるよう心がけてきた。だが今日、彼女に「翼が傷だらけだ」と指摘されて、肩の強張りが緩んだ。

見えない振りをしていたが、顔とボディーを庇っている両腕はボロボロだった。整備の行き届いた広い路だと思い込もうとしていたが足元は舗装されていない穴だらけの隘路で、脛は砂埃にまみれてい

た。
それをみっともないと言うわけでも可哀想だと言うわけでもなく、ただ「傷だらけになっても掴みたいものがあるんだね」と俺の歩き方に頷いただけの行為がどれだけ嬉しかったか、きっと彼女は知らないだろう。
静かな肯定がどれだけ救いになったか、きっと彼女は知らないだろう。
「まだ夕食には早いですし、映画でも見ましょうか」
何かあったときにと用意していたレンタルＤＶＤを見せれば、彼女の表情はぱっと輝き満面の笑みが浮かぶ。タイトルを知っていたのか一度見たことがあるのだろう。無事お気に召したようだ。
コーラを用意してソファーに並んで座り、リモコンを操作する。
警察学校生時代、寮の娯楽室で借りてきたＤＶＤを五人で見た。今はワンルームのセーフハウスで、借りてきたＤＶＤを二人で見る。
全てを終えたら、気の置けない仲になりたい。十年や二十年会わないままでいても「俺達は友人だ」と胸を張って言える仲になりたい。
ああ……今日が終わらなければ良いのに。

２２／２３

焼きたてのローストチキンピラフ詰めをテーブルの真ん中に置きアルコール度数の低いシャンパンで乾杯してプレゼントも交換し――何故か降谷さんからのプレゼントは最新式のル○バだった――そして、彼が引っ越すことを知った。

「年が明けてすぐ、ですか」

「はい。突然ですが……仕事の都合でして」

三が日が明ければ引っ越すという。私は六日まで年末年始休暇を貰っていて実家に五日まで滞在する予定だから、休暇前に挨拶すればそれがさよならになる。

会えるとすれば二十八日の晩か二十九日の朝が最後。

「寂しくなりますね」

きっともう、会えないだろう。二次元の存在と交流できるなど普通ではない。ファンタジーやメルヘンじゃないんですから。

「しばらく身の回りがゴタゴタするので連絡ができないと思いますが、落ち着いたらこちらからメッセージ送らせてもらいますね」

微笑みながらそう言う降谷さんに「連絡待ってますね」と答えた声は震えてなかっただろうか？

喫茶店のソファー席で、苦しげにすずが言葉を吐き出す。

「だから、数年は会えないの」

「そっ……か……」

すずの見合い結婚が決まった。相手はオタ活が嫌いな人で、取引先の幹部だという。その彼にデータ上の同人誌は構わないがグッズは止めてくれと言われたそうだ。

彼はこの三月末からドイツの支社で数年勤めたあと帰国し支社長になる予定で、先に籍だけ入れてしまい結婚式は向こうで上げるらしい。

情熱を傾けたグッズだから、かなちゃんに貰ってほしい。そう言われれば受け取らないはずがない。段ボールで郵送されてくると聞いて少し腰が引けたけれど、考えてみれば私の持つグッズも段ボールで

三箱はある。実家に帰れば倍の数はある。おかしいところは一つもなかった。

寂しいが重なって、苦しい。

年末年始の実家生活を終えアパートに戻れば３０１号室に名札はなく、電気がつくこともなく、しんとしていた。線香がいつの間にか燃え尽きるように、降谷さんはひっそりと消えた。

彼との唯一の接点だったアパートから私自身も三月の始めに引き払い、今より少し駅から離れる単身者用アパートに引っ越した。駅から離れたお陰でアパート代は据え置きながら二平米広くなった新居は、引っ越しからまだ二週間も経っていないが、もう既に私の城らしくなっている。

会えなくても生きていることを知っている。すずとも連絡が取れている。だから平気だ。――寂しいけれど。

すずも降谷さんも生きている。だから問題などない。寂しいだけで。

次の入居者などいないから、と貰ったあのアパートの鍵は、まだ私のキーケースに入ったままだ。

――だが、あのアパートへの新入居者はいないが、うちの支部にはそろそろ新入職員が増える。ということで年度末の書類だけでなく退職者のあれこれとか机の片付けとかにも終われていた三月下旬、桜がつぼみを膨らませる二十二日の金曜日のことだ。

「ふぁっつ？」

休日出勤で祝日などなかった我々職員が重い足を引きずりながら出社した、その目の前で。事務所の入るビルが消防車に囲まれ、勢い良く放水を受けていた。支部長が次々に出社する私達職員に「事務所で火事が起きた」と説明する横で主任が無表情でスマホを操作し、職員グループラインに投稿される写真とコメント。

『バーガーキ◯グも驚きの直火焼き。本日わが支部はお休みです帰れ』

職場のオタ友……といえるほど親しくはないが、ボカロオタクな先輩の一人が「バーニンバーニンッバーニンバーニイエエ」とリリリリ

バーニング○イトを歌い出したのに合わせて私も口を開く。まさかの火事によりこの場のほとんどの人間の思考回路がおかしくなっていて、それは私も例外ではなかったのだ。
歌いきれば上がる拍手と歓声。
「ブラボー！」
「アンコール！」
「アンコールッ！」
「はーい職員さん達頭おかしくなってるのは分かるからおうちに帰りましょうねー既にネットでニュースになってるからねー」
「火事よ、火事よ、火事なのよー♪」
「うるせーそんな細かいこと言ってたらてめーの尻穴に麦藁突っ込んでふーふー膨らませるぞ！」
「そうだそうだ、蛙みたいに破裂させてやろうか！　それかお前の保険控除額を倍にしてやろうか!?　ええ？」
「この火事を味わわせろ！　テイスティングしなくちゃ離せやめろ私はあの火を味わうんだ」
全員まとめて警察署に保護されて説教を受けた。パソコンで警官に見せて貰ったついったとネットニュースサイトのトップ記事が「共済職員ら火事で頭が沸騰」とか「バーニングナイトは半日後にお宅でどうぞ」とか「理性も共に炎に消ゆ」書かれていて私達の顔が写った現場写真まで載っていた。
騒ぎの中心にいた私はその場で支部長から半月の謹慎もとい休養を言い渡され、同僚のボカロオタと麦藁ふーふー窓際係長とテイスティング同期も同じだけの休養を命じられていた。ほとぼりが冷めるまで引っ込んでろということらしい。
次の日警察の調べで分かったことには、火事の原因はネズミによるガス漏れ。毎朝七時に設定してあった空調によりガス爆発が起きたそうだ。
「マジかゼロシコ見直そ」
ガス爆発と言ったらゼロシコだろＪＫ、そろそろ次の映画が来るし予習は大事。万歳三唱して引きこもり生活を開始した……のは良い

が、同時平行で片付けのため開いたグッズ段ボールをひっくり返しても見つからないものがあった。
純黒のセブ○限定初回限定盤缶バッジ、あれが見つからない。アイエェェェ見つからないナンデ!? 缶バッジ見つからないのナンデ!? 缶バッジ見つからないショックで泡吹いて倒れそう！
「えー、あっちにあるのかな……」
ほんの三週間近く前まで住んでいたアパート、あの部屋のどこかに隠れているかもしれない。これだけ探しても見つからないと言うことはあっちにあるに違いない。面倒だが探しに行かねば。
既に夕方だったため、次の朝に前のアパートへ向かった。駐輪場にはバイクも自転車もなくがらんとして、まだ引っ越しから一月もしていないのに寂れた古い空気が漂っている。
一歩アパートに踏み入れた瞬間、手の中のスマホが震えた。本郷さんからのライン通知――トークを開けば未読コメントが二十通近くあり、一番古いものが二週間前。
「お久しぶりです。やっと身辺がどうにかなりまして、連絡できるようになりました^^ また会えませんか……ね」
組織を壊滅させて、後処理も終えたのかもしれない。長年心に秘めてきた復讐を果たせたのだろう。だけどそれを喜ぶより先に、別のことに納得した。
「やっぱり、この扉がクローゼットだったのか」
ナルニアへ訪れるための扉はクローゼットで、コナンの世界と繋がる扉はこの扉だった。
私に不思議な力などなくて、不思議な力を持っていたのはこのアパートの、この扉だったのだ。
スマホを見下ろしトークをスクロールさせれば、嘆願のようなコメントが何通も続いている。トークを見てくれ、君はどこに消えてしまったんだ、会いたい、どうして既読がつかない。
それらを無視してコメントを入力する。
おはようございます。
大変なお仕事を終えられたようですね、お疲れ様です！ 本郷さん

は元気にしておられますか？　私は元気です^^
どうぞお体を大事になさってくださいね！
会えるとか会えないとか、そういうことは一言も書かずにメッセージを送信する。そしてラインを閉じて階段を登り、もう懐かしさすら感じる３０２号室の鍵を開けてがらんどうの室内を探索する。
どうせ時間はたっぷりある。見つからなければ見つからなかったでまた段ボールを一から探せば良いだけだし、気楽に大声で歌いながら先ずは窓を開ける。
「れりごーれりごー」
隠した記憶も既に朧気なへそくりを見つけたくらいで、バッジは全く見つからない。やはり新居で行方知れずになったのだろうか？
「抜け出してって抜け出してって」
猟奇的な描写が少しキツかったアニメの歌を歌っていた、その時だ。
パニック映画のようにドアが外へ弾けとんでいった――いや、外から勢い良く引かれて外れたのだろう。どんな怪力だ。
「奈落を抜け出した先に……もうあいつらはいないのに。君は、それを歌うのか」
肩で息をする降谷さんが、ドアの向こうに立っていた。もう見ることもないと思っていた相手に飾らない疑問が口をついてでた。
「なんでいるんですか」
「ラインを送ってきたでしょう」
「送ってからまだ三十分くらいじゃないですか」
「あなたが大好きなＲＸ―７を飛ばしてきましたからね」
そうじゃない。
「なんでいるんですか」
「会いたいと思うのに理由が必要ですか」
「ただの隣人でしょう」
「そうでないことをあなた自身が一番ご存じのはずだ」
靴のままずかずかと部屋に上がり、腕を引いて立たせられた。それでもそびえる身長差に見下ろされる。

「俺が大切に思っていた人はみんな奪われていって……もうこの世に一人もいない」
　腕を掴む手にぎゅっと力が込められる。
「……本郷さんがその人達を忘れない限り、思い出だけは誰にも奪われないと思います」
「は、綺麗事ですね。その思い出の一人になろうとしておいてよく言えたものだ」
　私の言葉を嘲笑うように吐き捨てられた台詞に頭が沸騰した。
「そうだよ綺麗事だよ、それの何が悪いの？　私は異邦人なんだよ！　元々出会うはずがなかった、出会ってしまっても思い出にならないといけない存在！　だからさ！」
「ハァ!?　君が異邦人だなどと誰が決めた!!　君が天女なら羽衣を燃やすし天使なら翼を捥いでやる。穢れが必要ならこの場で犯す！　俺は手放したくないんだ、もう！」
「はぁ!?　犯すぅ!?　梓さんと乳繰りあってれば良いじゃないですか公式！　あむあずなら許容範囲内だから彼女とやってろ！」
「なぜここで彼女が出る!?　公式!?　彼女は妹みたいな存在であって、俺が失いたくないのは、大切なのは、誰よりも君なんだ！……どうして通じない」
　怒鳴りあって、降谷さんが頭を抱えた。
「私も本郷さんが大切だよ。でも離れる。二度と会えなくても幸せを祈り続けるよ」
「大切だから側にいてほしい。二度と会えないなんて死別とどう違うんだ」
　悲痛な表情の彼に、真剣に答える。
「希望がある」
「心配しかない」
「未来もある」
「知らない間に死ぬかもしれない」
「想いがある」
「伝わらなければ意味がない」

「……リアリストだね、本郷さん」
「ああ。そして君はロマンチストだ」
悲しそうで苦しそうな表情が可哀想で切なくて、腕をあげ胼胝の出来た手を取った。
「……それじゃあ、少しだけ、貴方に大切な人が出来るまで付き合うよ」
何故か、元の世界に帰れるという自信がある。私の言葉に降谷さんの表情がみるみる明るく輝きだす。
「とりあえず半月くらい」
「短い。もう一声」
「じゃあ一月でどう」
「一年だ」
「育児休業かそれは」
どうにか交渉して二月に収めたが、満面の笑みの降谷さんを見ていると「最初からそのつもりだったのでは」と疑いが頭をもたげる。
五月になりアパートの取り壊しが始まり慌てた私に対し、降谷さんはくすみ一つない輝く笑顔でこう宣った。
「これで天界へは帰れませんね！」
――待て、天界とはなんぞや？

２３／２３

気が急くままに勢い良くドアを閉めればガァンと鉄板を殴ったような音が響いたが、振り返らずアパートに飛び込んだ。階段を二段飛ばしで登り３０２号室のドアに手を掛ければ、良く通る歌声が中から漏れ聞こえてきた。

「抜け出してって抜け出してって」

ずっと、這いつくばって泥に身を潜めていた。そうでなければ組織に潜入していられなかったから――だが、その泥は漱げるのだと、だから太陽の下に出ろと、そう言うのか。

「奈落を抜け出した先に……もうあいつらはいないのに。君は、それを歌うのか」

力任せに引いたドアは蝶番が弱かったのか、簡単に外れた。３０１号室の方にそれを放り捨てる。

「なんでいるんですか」

鼎さんは呆然と口を半開きにして、そんな馬鹿みたいなことを言う。

「ラインを送ってきたでしょう」

「送ってからまだ三十分くらいじゃないですか」

「あなたが大好きなＲＸ―７を飛ばしてきましたからね」

ＲＸ―７を守るために自分が守られたのではないかと、あの八月一日を思い返すことがある。メインはＲＸ―７の命で、自分はついでだったのではないだろうかと。

「なんでいるんですか」

「会いたいと思うのに理由が必要ですか」

この人は、記憶と電子記録の中にしか痕跡を残さなかった。会いたいと思っても手元に残ったのは録音とプレゼントのスマホだけで。

「ただの隣人でしょう」

「そうでないことをあなた自身が一番ご存じのはずだ」

どうせすぐに取り壊しだ。靴のまま部屋に上がり、鼎さんの腕を引く。見た目通りの細身は簡単に立ち上がった。少し力を込めるだけ

で折れそうな腕、簡単に死にそうな痩躯だ。
「俺が大切に思っていた人はみんな奪われていって……もうこの世に一人もいない」
誰も彼もいなくなって、やっと見つけた「大切に思って良い相手」。それが知らぬ間に消えていた時の気持ちが分かるだろうか。
「……本郷さんがその人達を忘れない限り、思い出だけは誰にも奪われないと思います」
真面目な顔で吐き出された綺麗事を鼻で嗤う。
「は、綺麗事ですね。その思い出の一人になろうとしておいてよく言えたものだ」
「――そうだよ綺麗事だよ、それの何が悪いの？　私は異邦人なんだよ！　元々出会うはずがなかった、出会ってしまっても思い出にならないといけない存在！　だからさ！」
キレた鼎さんに俺もキレた。異邦人であることなどとっくに知っている。あの歌が、スマホが、突如アパートに現れた瞬間を映した映像が、彼女がこの世の人ではないことを示している。
それでも鼎さんはいまここにいる。触れあえる。生きている！
「君が天女なら羽衣を燃やすし天使なら翼を捥いでやる。穢れが必要ならこの場で犯す！　俺は手放したくないんだ、もう！」
「はぁ!?　犯すぅ!?　梓さんと乳繰りあってれば良いじゃないですか公式！　あむあずなら許容範囲内だから彼女とやってろ！」
訳が分からないことを言い出した。梓さんに対する感情は部活の親切なマネージャーに対する感謝と親愛に似たものであって、それ以上ではない。もしくは妹とかそういった優しい感情だ。
「なぜここで彼女が出る!?　公式!?　彼女は妹みたいな存在であって、俺が失いたくないのは、大切なのは、誰よりも君なんだ！……どうして通じない」
彼女からも大切に思われていることは分かっている。感じられる。だというのに何故こんなにもすれ違うんだ。
「私も本郷さんが大切だよ。でも離れる。二度と会えなくても幸せを祈り続けるよ」

「大切だから側にいてほしい。二度と会えないなんて死別とどう違うんだ」
大切だから側を離れたのに、三人は俺の手が届かない場所で次々に消えてしまった。幼馴染みはあと少しという場所で失った。ああなるなら手離さなければ良かった。側にいれば良かった。離れなければ良かった。だから、次こそは側にいてほしい。
鼎さんは力強い目で囁いた。
「希望がある」
「心配しかない」
希望は砕かれた。
「未来もある」
「知らない間に死ぬかもしれない」
四人の未来は失われた。
「想いがある」
「伝わらなければ意味がない」
もう伝える手段も、伝えてもらう手段もない。
理想に満ちた言葉を否定し続ければ、彼女は「仕方ないな」と苦笑した。
「……それじゃあ、少しだけ、貴方に大切な人が出来るまで付き合うよ」
彼女の頭があまり良くないことを利用してアパートの取り壊しを誤魔化し、この世界に引きずり込む。
五月、アパートが壊されていくのに慌てる彼女を見て吹き出した。そうとも、君が帰るための扉はもうない。
――二月から三月にかけて怒濤の勢いでこなした組織の殲滅、その後始末と書類が片付いたのは三月半ばのことだった。
これで表通りで彼女に会える。そう期待に胸を膨らませ送ったラインはしかし、二日経っても三日経っても既読がつかない。以前なら長くとも半日で既読がつき返事が来たはずなのに何の反応もない。
もしや何か事件にでも巻き込まれたのかと思い彼女を調べ……その結果に頭を掻きむしった。

「何故いない？　何故戸籍がない――住民登録すら消えているんだ」
記録が頼りにならないならばと大家を訪ねれば「３０２号室はここ五年は空室だったはずだ」などという答え。嘘だ。セーフハウスとして利用できるか調べた時、確かにあのアパートの住民として登録されていたのだ。住んでいなかったはずがない。彼女を大家が覚えていないはずがない。
確かに彼女は３０２号室の住人だったはずなのだ。
そうだ。彼女はこの世界に存在した。誰よりも俺はそれを知っている。録音もスマホもラインのトークも残っているのだから。他にも……そう、彼女と関わりのあった相手だって。
「鈴木財閥の相談役、いや、あのコスプレの女は相談役をおじと呼んでいた。鈴木園子の姉の鈴木綾子だ。彼女に接触すれば……！」
だが、鈴木園子を経由して接触を得た鈴木綾子もまた、鼎さんとの繋がりを失っていた。
「返信が来ないんです、かなちゃんから。引っ越してから既読がつかないんです」
かなちゃんの戸籍も何もなかったでしょう、と鈴木綾子は微笑んだ。彼女も鼎さんの安否を知ろうと調べたようだ。そして、何も残っていないことを知った。
「これでも鈴木財閥の娘ですから、たとえ本人が特定できないＳＮＳで知り合った相手でも、後ろ暗いところがないかまで調べるんです」
その時の調査結果はこれですと差し出された書類にあったのは鼎さんの実家の住所から信教まで詳しく書かれた個人情報の塊で、マップアプリでその住所を検索したが――そんな地名は存在しなかった。
ぽつりと零れる鈴木綾子の声。
「前は検索できたんですよ」
彼女から貰ったスマホはこの世に存在しないメーカーのもので、存在しないアプリが入っていて、他にないほど頑丈だった。組織の建物に侵入した際はサーモグラフィーのカメラが大活躍で、頑丈さには命を救われた。
彼女は今この世に存在せず、連絡がつかず、実家すら無いものに

なった。
彼女は電子記録と記憶のみ残して、消えた。
「納得なんてできるわけがないだろう……！」
大切なんだ。もう失いたくない人なのだ。本名で仲良くなって同じ皿の料理をつついて酒を飲んで笑って五年会わなくとも十年会わなくとも友人でいられる仲になりたかった人なんだ。
諦めたくない相手なんだ。手を握り一緒に歩いて、出来るわけがないけれど――許されることではないけれど、隣で共に歩き続けたい相手なんだ。
日に二三度メッセージを送り、日に十度以上トークを確認する。既読はいつまで経ってもつかない。
ある朝、出先に向かう途中で本郷として使っていたスマホの通知が鳴った。慌てて路肩に車を停めて確認し、手の中の端末が軋みをあげる。
はっきりと別れの言葉はないが、どう見ても別れの挨拶だ。お体を大事になさってくださいね、だと？　俺の心は君のせいで疲労困憊だというのに。
アパートに設置していた監視カメラの映像を確認する。十分前から現在に至るまでのそれを早送りで確認すれば、敷地内に入る人影は一つとしてなかったというのに玄関を開き現れた彼女の姿。
「はは……」
つい笑い声が漏れた。やはり鼎さんはこの世界の人間ではなかったのか、と。
そんな非現実的なことがありうるとは信じたくなかったが、これだけの物証が揃っては信じないわけにはいかない。
車道に出てアクセルを強く踏む。
羽衣など処分してしまえば良い。隠すだけではいつか逃げられる。いつか去ってしまう。逃したくないのなら燃やしてしまえば良かったのだ。
俺は昔話と同じ轍は踏まない。
アパートのガレージ前に車を飛び込ませる。気が急くままに勢い

良くドアを閉めればガァンと鉄板を殴ったような音が響いたが、振り返らずアパートに飛び込んだ。そして。
「れーさんただいま。このドアからでも帰れるみたいだよ」
数ヵ月後、新しく建ったファミリー向けマンションのドアを出て消えドアから入って現れた妻の気楽な姿を見て、壁に頭を打ち付けた。
ああ、今すぐここを壊してしまいたい衝動で頭がどうにかなりそうだ……!

その壁を引き裂いた

セロリの香りにはリラックス効果があり、二日酔いや頭痛の鎮痛に効くらしい。ソファーに体を投げ出した、五徹で逆に寝れない様子の降谷さん――赤井も真っ青な隈をこさえた彼にセロリを差し出す。

「大丈夫ですか？　セロリ揉みますか？」

「揉む」

揉むと言いつつ囓りだした降谷さんの思考はもう危険水域を超えているようだ。ディップのつもりでマヨネーズを渡したらセロリが土方スペシャルに変身してしまった。カロリー大丈夫か。

「美味しいですか、それ」

「しらん」

据わった目で土方スペシャルをバリバリ食べているだけでもやばいのに、味覚も瀕死らしい。間違いなくこれはヤバいやつだ。

「はいはい、じゃあ暖かくしましょうねー」

土方スペシャルの皿を取り上げてテーブルに避難させ、レンジでチンすれば三十分近く温かいあずきのパワーを肩に乗せてあげる。あずきの香りで癒されてください。同じくあずきのパワーのアイピローを乗せれば、口を半開きにしてソファーによりいっそう体を沈ませる。イケメンはこんな姿でもイケメンか……お疲れのフルヤ＝キリスト尊い……。

いそいそと大きいたらいとヤカン二つにお湯と水、石鹸に柔らかいボディスポンジ、ふかふかのタオルとラベンダーオイルも持って降谷さんの足元に座り込んだ。

たらいに温いお湯を作り、ラベンダーオイルを数滴足らす。コンビニで買ったらしい靴下を引っこ抜いて降谷さんの足をたらいに突っ込み洗う。

ああ、ここに、神話が再現された。キリストの足を洗う信者（♀）！

香油を塗り足にキスをすればまさに新訳……ああ、嬉しすぎてやばい。

位置も効果もうろ覚えのツボを揉んだりしながら両足を洗ってい

く。たらいのお湯はぬるいのからだんだん熱くしていくのがポイントだ。私は佐吉、冷えた体にはぬるい湯から慣らしていくのが良いのさ……！

だらりと脱力した降谷さんが寝ている様子なのを良いことに、タオルで水気を拭った足の甲に触れ、そっと撫で、額に甲を押し当てる。

やばい！　やばいすごい！　帰ってこない語彙力もやばい！　感動で胸が一杯だ。

――この足が日本を守るため棒になっているのだ。砂埃にまみれ雨に濡れ、積み上げた歩数は全て国を支える礎となる。

降谷菩薩が歩いてきたのはまっすぐな道ではなかっただろう。だが、それこそが必要で重要だったのだ。ただまっすぐ伸びるだけの基礎では、上に乗った板は左右に揺れて仕舞いには倒れるしかない。時には右へ左へ曲がり、蛇行もしている基礎だからこそ上の板は安定するのだ。複雑な模様を描く今までの路が屋根を支えるから、どんな圧力にも耐えられる。

私には想像もつかないほどの苦しみに悶えてきたに違いない。だからこそ作者をして「赤井がいなければ完璧」とまで言わせるのだ。歩き続けてきた足だ。苦しさを悲しさを全て背負う降谷菩薩の、前に進みつづけるための一揃いの足だ。

力強い足だ。頼り甲斐のある足だ。数多の困難を乗り越えてきた足だ。感動のあまり目から情熱が溢れる。涙で滲んでも尊い凄い。

ブルーアイズよりふつくしい足を撫でて、たらいを片付け風呂場でお湯を捨てた。

――リビングで降谷さんが顔を覆っていることなど、私が知るはずもなかった。

※※※

組織の残党が、どうやってかは知らないが、各地で一斉にテロを起こした。組織とも警察とも関係のない市民から死傷者が何人も出てしまった――その怒りで拳かぶるぶると震え、降谷は自らの不甲斐なさにも視界が暗くチカチカ輝くような失望を覚えた。

もっとしっかり、末端すら残さず殲滅していればこうならなかった

のに！
　やはり首都とあって東都でのテロは規模が大きく、銃や爆薬すら持ち出した凄惨な戦いは五昼夜に渡った。
「あちらは我々が死んでも構わないと思っている……なのに、どうして我々はあちらの命を尊重しなければならないんですかッ！」
　二日目の夕方だったろうか。まだ二十三かそこらの青年が叫んだ。真っ白で視野の狭い正義は青臭く懐かしく、降谷はそれにふっと笑んだ。
「ここが法治国家だからだ」
　犯罪者どもを法律で裁くべく、裁判所に投げ込むのが降谷たちの仕事だ。国民の選んだ国民の代表が決めたルールで、罪を償わせるのが降谷たちの仕事だ。
　知識としては分かっていても理性が納得しきれていないのだろう若手の胸を軽く小突く。
「それが俺たち警察の掲げるべき、正義だからだ」
　それがどれほど凶悪な犯罪者だとしても、裁判を受ける権利を失ってはいない。
　たとえテロリストであれ、被害を量産している加害者であれ、国民であることに違いはないのだ。
「降谷さんの言うとおり、警察は『原則』が鉄則！　例外なんてのは特殊な場合だから別に書かれてんだよ。国民の身体と生命を守るのが俺らなんだからよ」
　別の男に頭を撫でられながら、納得しきれない顔でハイと返事をした若手。自分にもあんな初々しい頃があったような気がしたが――綺麗な物はどれもこれも手から溢れていったから、きっと、記憶に残る暇もなく無くしてしまったのだろう。
　しかし、そんな風に全体が余裕を持っていられたのは二日目までだった。三日目の深夜には一部が混沌とし始め、人員交代が決められた。
「気張っていこう！　これを終わらせれば終わりだよ！」
「嘘だ！　戦いが終わったら、ぐっすり眠れるって保証はあるんです

か！　まとめないといけない書類だってたくさんあるんですよ！」
「腹減ってハッピーターンが止まらない……はぴはっぴー」
「腹減ったと言えば明日の夕飯は牛丼メガ盛り汁ダクダクでお願いします誰か注文控えといて紅しょうがは山盛りな」
「美味いお握りの作り方知ってるか？　あれは手で握るんじゃなくて脇で三角形作りつつ表面に塩分を与えるんだよ。持ち方？　握り方？　は……こう、ぐにゅっと」
「俺……このお風呂掃除が終わったら……彼女んちのトイレにある人形のミカちゃんと結婚するんだ……」
「え、お風呂？　お風呂どこぉ？」
　交代に現れた面々は、幸せそうな顔で気の狂った発言を繰り返す仲間を引きずってミニバスに放り込んでいく。
「はっぴーいや違うラッキーだよ癒しの天使はラッキー、だって有袋類だもん」
「牛丼は汁ダクダクこそ至高、なぜそれがわからないの？」
「寝ろ。車の中でな」
「動け動け動け動けよぉ俺の足」
「ふぇへへへへ、なにそれぇエヴァごっこぉ？　私もするよいーつまでもー」
「立てほら！　先ず目を開けろ！」
「ぶったね、二度もぶった……!!　親父にもぶたれたことないのに!!」
「元気じゃねーかよバカ歩け」
「ほらほら歩こうね」
　交代人員が役に立たない面々を連れていく様はまるでヘルパーと要介護老人だ。
　降谷や風見ら中心メンバー以外が一新されるはずのチームにはしかし、一人だけ、交代を望まない男がいた。
　降谷より五歳ほど上だろう。この三日で伸びた無精髭とよれよれのスーツがくたびれた彼は、煙草を気付け薬にふかしながら苦笑した。
「すんませんけど、交代は遠慮させてください」

――正気を保った彼の名は、鶴園といった。
五日目の昼過ぎだった。ついにテロリスト側の前線が決壊し、警官らが彼らのアジトに雪崩れ込む。その先陣を切ったのは、鶴園。
「俺は今とても特別な気分だ……恋人といる時に雪が降った云々みてぇな、わくわくしてドキドキして、最高の気分だ。
だがどうしてだろうな？　お前ってやつはまるでこの世の終わりみてぇな、明日世界が終わるとでも言わんばかりの顔してんじゃねーか」
東都におけるテロの指導者らしき平凡そうな顔の男を地面に叩きつけ、その額に銃を突き付けながら鶴園はハハと笑い声をあげる。
他のテロリスト達はみな他の公安警察官らが対応しているため安心しておしゃべりができる。
「とはいえ明日世界が終わりやなんてしないし、地球もゆっくり回ってる。
そうそう、もし明日が地球最後の日ならな、食いたいものがあるんだ。教えてやるよ。
……それはてめぇの、命さ」
鶴園が入庁してから四年目、初めて指導役になった新人は唯川と言った。唯川が組織に潜入するため数ヵ月でさよならしたが、初めて受け持った後輩だった。生意気な餓鬼だった――生意気で可愛い奴だった。
唯川と再会したのは、彼が物言わぬ姿になってから。情報を流出させないためスマホごと自らの心臓を撃ち抜いたのだと、聞かされた。
「てめぇも銃を学んだなら知ってるよな、銃口管理ってやつ」
鶴園は歌うように銃を取り扱う際のルールを二つ挙げる。
「全ての銃は装填済みとして扱う。それと、撃つと決めたとき以外は引き金に指をかけない。こりゃマナーだよな。これが出来てない奴の前になんて誰も立ちたくねぇもんさ」
恐怖に震える男に、鶴園は優しく甘い声をかけた。
「人を恐怖に叩き落とすのはそら爽快だろうさ。だが、そういうやつに限って自分が恐怖に叩き落とされるのは嫌いなんだよな」

鶴園は引き金に指をかけ、うっとりと微笑みすら浮かべながら――人差し指に力を込める。
そして、ぐっと、引いた。カチンとスライドが前後する軽い音が響き、ほぼ同時にアンモニア臭が漂いだす。
「はっ、撃たれる覚悟もないくせに武器触ってんじゃねーよ」
鶴園の復讐は区切りがついた。法廷に放り込むだけであることに不満を感じないと言えば嘘だが、鶴園は警察だ。
私刑の義務も権利もない公僕だ、ギリギリ許されそうなラインの復讐をした。鶴園は男を拘束すると口許をうっすら緩め、ベースで待つ上司に無線を繋ぐ。
「こちらＡ―２５６」
『６』
「３」
『何があった？』
「リーダーらしき男を確保しました。場所はベースから五つ目の廃ビルの二階、東側北向きの角部屋です」
『了解』
無線通話を終え深く息を吐いた鶴園に、彼のペアで四周を警戒していた山口が声をかける。
「ゾノさん、終わりました？」
「ああ、わりーな……こんな個人的なことにまで付き合わせてよ」
「いいってことです。俺らん中にはこいつらに恨みを一欠片も持ってない奴なんていないんですし、俺だって」
あいつとはダチじゃありませんでしたが、尊敬している同期だったんですよ、と山口は言葉を続ける。
「そいつは俺が連行しますんで、ゾノさんは警戒をお願いできますか？　四徹なんすから階段でこけないように気を付けてくださいよ」
「わーってる、ありがとよ」
階段を下り外へ出れば、南中から少し西に傾いた太陽が明るく世界を照らしていた。
「眩しくて目が霞む……」

「バスで寝てください」
「うん……」
日陰から踏み出し、二人は太陽の下を歩く。短い影が東に伸びふらふらコンクリの上を踊る。
「お疲れ」
ベースに戻れば指揮官の降谷が二人を迎えた。
「お疲れ様です」
「お疲れ様ですっ！」
鶴園と同様に四徹のはずなのに、降谷は普段通り変わらぬ引き締まった表情だ。二人はベースの仲間にテロのリーダーを引き渡すとよたよたバスに向かう。
「降谷さん人間辞めてるだろ」
「サイボーグなんじゃないですかね」
そういえば警察学校ではバーサークゴリラって呼ばれてましたよ、という山口の発言に鶴園は風船が破裂したように笑い声をあげ……そして二人とも看護師にバスに引きずり込まれ、寝かされた。
――後始末と急ぎの書類作成が終わったのは次の日の晩。それらの書類の九割が混乱した日本語であるのは忘れるとして、明日一日はまるまる休める予定だ。
流石に靴下は替えていたが、六日のあいだ着た切り雀だった降谷は全体的に薄汚れている。癒しの待つ我が家へようよう辿り着くと上着を玄関で投げ捨てソファーにどさりと重い音を立てて沈み込んだ。
そんな降谷に、親切で騙されやすい平凡な天女が茶碗に短冊のセロリを差し出してきたりあずきのパワーを肩や目元に置いてくれたり、甲斐甲斐しく彼の世話を焼きだす。仕舞いには何やらごそごそ用意しだしたと思えば降谷の足を洗い始めた。
ぬるま湯がだんだんと、少し熱くて気持ちの良い温度へ変わっていく。
礼を言う気力すら起きずただその幸せに浸っていれば――足に髪が触れた。さらさらと足の甲をくすぐるそれが不思議で体を起こそうと考えた、その時だ。

「なんて尊い足なんだろう……」
背筋に力を込め少し身を浮かせた、その姿勢で降谷は固まった。
「色んな道を歩いてきた、凄い足だ。……凄い。この足で日本を支えてるんだね」
ぼそぼそとした声だが、鍛えた降谷の耳にはこれ以上なくはっきりと届いた。
足を優しく撫でられたと思えばゆっくりと床に下ろされ、片付けの音がしだす。
「夢だ……これは全部、夢だ……現実的じゃない」
この優しさは、この心遣いは美しすぎた。誰もが求める「美」そのものだった。――この時やっと、降谷は「黒の組織」から本当の意味で足を洗えたのだ。洗われたのだ。
だからその二ヶ月後。外堀という外堀を全て埋めた降谷は海の見える高台で天女の前に跪いた。
「これからも安室や本郷は国のために何でもする。利用価値があるなら誰にでも優しくするし肉体関係も結ぶ」
困惑しか見えない表情の彼女を真剣に見上げる。
「だが約束する。降谷零が、俺が優しくしたいのは、この日本という国と貴方にだけだと。――蛇行した道でも真っ直ぐな道でも、叶うなら貴方と二人で歩きたい。俺と二人三脚してくれませんか」
旅の同行者は降谷の差し出した手を取りながら、「後悔しても知りませんからね」と眉尻を下げた。
降谷は飛び上がるように立ち上がり同行者を抱き締める。
「後悔なんてしない、絶対に！」
――世界の壁は、思いを届けるには、こんなにも薄かった。

コナン強襲

コナンはポアロで一度会ったことのある女――鈴木綾子の友人で、安室が以前バイトしていた喫茶店の常連だという女の背を見つけた。
造作は平凡、他を圧倒するようなカリスマもなさそうで、肉付きが悪くひょろりとした彼女。印象の薄さと体の薄さ、そして特徴のなさはモヤシを彷彿とさせる。
「あ、あやこお姉さんの友達の鼎お姉さん！」
「おや、まるで一年は組の良い子達みたいな説明臭い呼び掛けはコナンくん」
元気にしてた？　カウンターの席を立ち膝を折って視線を合わせた鼎に笑顔を向ける。カウンターの向こうでは梓がにこにこと働いている。
「元気だよ。ここらへんに来るなんて珍しいね、今日はどうしたの？」
「あー……遊びに誘われたんだけどあっちが遅れてるみたいでさ、ポアロで待っててって言われたのよ」
「そっか！」
相手は園子の姉だろうか？　真顔でボケたことを言い放つ鼎のようなタイプの知人友人は今まで身近におらず、どう付き合えば良いものかコナンは掴みかねている。一年は組の良い子たちとは何なんだ。
ふと視線を落とせば鼎の手にはついったの画面が開かれたままのスマホがあり、そのＴＬのトップは――酷かった。
『いっけなーい殺意殺意！　私友達♀とデート予定してるオタク女★
でも大学時代のどうでも良いゼミ同期と街で会っちゃってもう大変！　いつ誰と結婚しようがてめぇには関係ないだろ式に呼ぶわけあるか誰から聞いたそれ。次回「漏らした奴ごとぶっ殺す」お楽しみに！』
コナンはそれを見なかったことにした。自分ながら懸命な判断だと褒めてやりたい。
「そうだ、コナンくんはいま暇？　暇なら私の暇潰しに付き合って欲しいんだけど……」

「いいよ！　何するの？」
「ただの会話」
　朴念人と怒られたことのあるコナンでも分かる――この言葉選びでは恋人などできない、と。なにも思わせぶりなことを言えというわけではないのだ……だが「ただの会話」では盛り上がるものも盛り上がらない。
　苦笑を浮かべカウンター席に座り梓さんにアイスコーヒーを頼む。鼎なら小学生がオレンジジュースを頼もうがアイスコーヒーを頼もうがスルーするだろうと思えたからだ。
「コナンくんのおすすめメニューは何？」
「ボクのおすすめ？　それならこれかなぁ……」
　思った通り、メニュー表を見せられながらの気楽な質問でコーヒーの注文はスルーされた。コナンはここ二月ほどリピートしているオムカレーを指差す。
「オムカレーかぁ……確かに喫茶店のカレーは何故か妙に美味しいもんね。喫茶店しか知らない独自のスパイスでもあるのかって疑っちゃうくらい」
「うん！　そしてオムレツは本当にトロトロでね。少し出汁が効いてるんだけど全然カレーと喧嘩しないし、むしろ出汁とスパイスが口の中で運命的な出逢いをして最高のタッグを組んだんだ」
「なんだとそれ採用。店員さぁん、オムカレーもお願いします」
　梓が愛想良く「畏まりました！」と返しくるくると動くのを見ながらぽつぽつと毒にも薬にもならない話を続ける。
「日本に来てカレーは独自の進化を遂げた……つまりカレーは既に和食だと思うのよ」
「でも、それを言ったら、例えばだけどカリフォルニアロールとかはアメリカ料理ってことになっちゃわないかな」
「カリフォルニアロールを日本の寿司とは認めん。だから問題ない」
　あれはＳＵＳＨＩであって寿司じゃない。料理は現地ナイズドされていくものであり、似た作り方の別の料理と化すのは当然の話。だから握り寿司にチョコレートソースを掛けようがどうしようが、現地

の人々の味覚に合うならば好きに改変すれば良い――でもそれは日本食ではない。
カレーも同じはずだ。日本人に合うように色々と改変がされた。ならばそれはインド料理ではなく日本料理だ。鼎はそう信じている。
コナンにとってはどうでも良い話だったが、鼎は真剣に現地ナイズについて語っていた。
「そう、なら、今晩は本格イタリアンを食べましょう。時にはジャパナイズドされていない味を楽しむことも日本人の味覚について振り返るには重要なはずだわ」
「おっ、すずちゃんお疲れ様！　でも本格イタリアンはお値段も本格的だからジャパナイズドされた方が良いなぁ」
「作るのはうちのシェフだから問題ないわ」
「ごちになりまーす！」
いつの間に来店していたのか、後ろから突然掛けられた声にコナンはびくりと肩を跳ねさせた。
「遅れてごめんなさい、どうでも良い元同級生に絡まれちゃって……」
「ううん、連絡くれたし全然オッケーだよ。すずちゃんこそ大変だったね」
コナンがいる席とは逆の隣に腰掛け、申し訳なさそうに眉をハの字にする鈴木綾子。コナンの脳裏にさきほどのＴＬが浮かぶ――まさかな。
「綾子お姉さんこんにちは！」
「ええこんにちは、コナンくん」
にこやかにコナンへ挨拶を返した鈴木綾子だが、彼女の関心は全くと言って良いほどコナンに向いていない。
「かなちゃんは何か注文した？」
「オムカレー注文したよ。すずちゃんも食べる？」
「じゃあ一口分けてもらおうかしら。――店員さん、ホットコーヒーを下さいな」
至って平和にアイスコーヒータイムを終え、店を出んとしたコナンの耳に二人の会話が届く。

「はやくキノウを取り戻さないとね」
「ええ。必ず、また一つキノウが遠くなってしまう前に……」
ベルが柔らかい音を立てながら、ドアが閉まる。
「二人は、一体……？」
まだまだ日差しの明るい屋外からは、店内は薄暗く――鬱々しく見えた。

事の発端は鈴木相談役からの相談だった。相談（に乗る）役が相談するとはこれイカに？　塗り替えるべき？
「ははあ、巻き込んできた自分にも問題はあるけどコナンくんの事件に首突っ込む度合いが心配、と」
「うむ……。儂はあの小僧を危険な目に合わせたいわけではないんじゃ。子供は子供らしく安全な場所で守られているべきだと思っておる」
すずと鈴木相談役の秘書が一緒にアパートに突撃してきて、化粧とか身繕いとかそういうのをする暇もなく連れてこられた鈴木家の豪邸。ソファーの座り心地が素晴らしくてもう立ち上がりたくない私このソファーの住人になる。
――まあ、確かに言われてみれば、鈴木相談役は生死に関わるような事件にコナンを巻き込むつもりはないのだ。ただ結果的に生きるか死ぬかな状況になるだけで、相談役にはコナンへの害意も悪意もない。一緒に楽しもうと言う意図しかないのははっきりしている。
それに、きっかけは相談役かもしれないが、コナンは自ら事件に首を突っ込んでいるのだ。捕まえていても賢しげに策を立て逃げ出すような子供だから監督責任は追及しないでください。
「それでじゃ。不可思議な知識を持つお主ならば、不可思議で愉快な案が出せるに違いないと儂は考えた」
「ははあ」
さあアイデアを出すのじゃ！　と突きつけられた扇子の先端を見ながらこう答えた。

「一日ください」
一日悩みに悩んだ末、有名な映画からネタを頂くことを決めた。コナンくん、いや、工藤新一くんが生まれる前の映画だ。私は物心付いてる年齢だったけど。
これなら壮大なドッキリを名乗れる……んじゃないかな？
――ビートルズを真似た髪型が風に揺れる。特徴的な髭は剃らずそのままだ。パッドのない丸眼鏡をくいと押し上げ、男は言った。
「我々は、キノウを取り戻す」
そうとも、我々は取り戻さなければならない。失われてしまった平穏の時間を、夕焼けに照らされた土手を、小銭を握りしめ息を弾ませながら飛び込んだあの場所を。
男はわざとらしいほど大振りな動作で右腕を前に突き出し、手を握りしめた。
「そのためには……悪にすら手を染めて見せよう」
キリリと表情も鋭く決めた男に向かって歓声が上がる。
「おじさま、とっても格好良いわ！　素敵よ！」
「もっとやって相談役ー！」
「ナッハッハッハッハ!!　そうじゃろうそうじゃろう！」
既に先が不安な劇が今、幕を開こうとしていた。

その日、米花町は熱気に包まれていた。街行く大人たちは誰もが浮き足だったような目をして、毛利小五郎すら落ち着かない様子でチャンネルを回し続けている。
常にない小五郎の様子に蘭が眉をハの字にし口を開きかけた、その瞬間だった。
『米花に暮らす全ての大人達よ……私は悲しい』
テレビから、ラジオから、商店街のスピーカーから……物憂げな男の声が響いた。
『人々は時間に追い詰められ身を削り、心の余裕すら奪われている』

それは冷たい独白だった。コナンは小五郎の机にある小型テレビの前に回り込む――画面には丸眼鏡にマッシュルームヘアの男の姿。見たところ五十は過ぎているだろう。
『我々は取り戻さなければならない。隣人と笑い合ったあの日々を取り戻さなければならない』
声に熱がこもる。男は右手を前に掲げ、握りしめた。
『我々はイエスタディ・ワンスモア。喪われた、奪われた昨日を取り戻してみせる……！』
「なっ!?」
この男は一体何を言い出したのか。いっそ不気味さすら醸し出す訳の分からなさに、コナンは一歩二歩とあとじさった。
そのコナンの背後、開きっぱなしの窓からとある匂いが事務所に忍び寄る。
「なんだこの匂い……おでん？」
「ああ、これだ……昭和の匂いだ」
「おっちゃん!?」
「えっお父さん？」
「懐かしい昭和の匂いだ……」
ふらふらと立ち上がる小五郎。蘭やコナンなど視界にない様子だ。
「おっちゃんこれはただのおでんの匂いだよ！　くそっ、何がどうしたってんだよ!?」
「お父さん正気にもどって！」
「ええいうるさい、俺が昭和の匂いだっつったらこれは昭和の匂いなんだよ！」
そして事務所から飛び出る小五郎、コナンたちは小五郎を呼びながらその背中を追い階段を駆け下りる。
「これは一体……!?」
「やだ、なにこれ……」
そこに広がっていたのは、グツグツと煮たったおでんの屋台に群がる大人の姿。どう見ても全員正気ではない。その群れに小五郎を認めてコナンは大人たちを掻き分ける。

「おっちゃん！　おっちゃんっ!!」
だが――コナンの手が小五郎に届くことはなかった。
「なんなんだよ……なんだって言うんだよ！」
おでんの屋台は数多の大人を引き連れ去っていく。ガードレールを殴り付け膝から崩れ落ちたコナンの横で、蘭が顔を覆いしゃがみこんだ。
「何が起きてるの……？」
何か大きなことが起きている。それは確かだ。コナンは手を握りしめる。おでんの匂いに誘われてふらふらと現れては増えていく狂った大人の――その糸を操る影を睨みながら。

鈴木財閥による、まるまる町一つを使ったお遊び。範囲は米花町、乳児等の世話すべき相手を抱えた大人は二日ほどホテルや病院に缶詰めをお願い（札束）し……高校生以下の子供達を対象にした壮大なドッキリが始まった。
そこでハンカチ噛んでるお兄さん方、元ネタが分かる世代はお呼びではないのだ。すまんね。
大人を連れ去ったハーメルンの笛吹男ならぬ米花町のおでん屋台……の長椅子に座り茶色く染まった大根をはふはふと食べていたら、隣で同じくおでんを食べていたすずが口を開いた。
「そういえば、なんでおでんの匂いにしたの？」
「え、そりゃあ特徴的だし誰にでも分かりやすいし……あとおでん屋台ってなんか昭和っぽくない？」
「ああ……チビ太とか」
「そうそうチビ太とか」
私たちが今いるこの場所――謎の組織イエスタディ・ワンスモアに占拠されたという体をとったベルツリースプリングリゾート――は災害時の避難先としての機能を備えており、米花町の大人や一部の子供達は温泉を楽しんだり岩盤浴で寝たりと気楽に時間を過ごしている。

無駄に金のかかったドッキリだし、ちゃんと撮影してあるのでそのうち実録映画として上映するかもしれない。
「……そろそろ時間よ」
「もうそんな時間？　早いね」
時計を見ればあと三十分ほどで我々の出番。準備は既に終わってるから急ぐ必要はない。ゆったり立ち上がれば、すずのＳＰさん達も自然な様子で動き出す。
――これからするのは楽しい楽しいテレビジャック（二回目）だ。一回目は相談役だけだったけど私もこれでも発起人の一人、二回目の今回はコナンくんが真実に辿り着けないよう不真面目なことを真面目に演説する役が回されている。
そう……今こそ風呂場で鍛えた演技力を発揮する時！　この前すず相手にヘルシ◯グパロ演説したら褒められたしいけるいける！

「平和だな……」
「そうですね……」
鈴木財閥により設置された仮説監視カメラには、このような非常事態においても冷静に周囲を観察できる幾人かの少年少女がリーダーシップを取り、大人の不在による混乱を落ち着けている姿が映っている。彼らのような子供達がいるならば日本の未来は明るい。
鈴木財閥が警視庁に申請してきたのは二日間に及ぶ大規模なドッキリ。米花町のほとんど全ての大人をベルツリースプリングリゾートに隠し、子供たちに荒唐無稽な組織とその野望を信じ込ませるというものだ。
警察は立場上許可できるわけもない申請だったが、なんと鈴木相談役は米花町の町民全員を買収して計画を断行してくれやがった。ふざけるなよ鈴木次郎吉、金さえあれば何でも出来るわけじゃないんだぞ――出来てしまったが。
テレビやラジオすらもマネーパワーで要求を押し通し、警察には監視カメラの映像を確認できるよう映像室を用意していた。申請は却

下しただろう何故そこで諦めない！　馬鹿か？
　冷蔵庫にウォーターサーバーまで設置された映像室には公安が詰めている――警視庁の刑事達は米花町の封鎖に駆り出され、子供達に見つからないようコソコソと治安維持活動させられている。可哀想だがこれがブルーカラーとホワイトカラーの差だ。
「なあ、風見。今の米花町はこれまでのどの時点よりも平和で、事件もない」
「はい」
「今の米花町には子供しかいない……つまり治安を乱す主たる原因は大人だ。原因を抹消してしまえば治安は格段に良くなる、そうだよな？」
「どこの悪役の台詞ですか。降谷さん休みましょう」
　悪の道に落ちるか落ちないかの瀬戸際な問答が行われ、とりあえず水を飲んで落ち着いてくれと渡されたサーバーの水を降谷がちびちび飲んでいた、その時だ。机上の小型テレビから濁った音が響いた。
『平成に生まれ、平成に育ち、平成しか知らずに呼吸しているこども諸君』
　降谷は水を噴いた。聞き覚えしかない声だ。画面に映るのはウィッグだろうロングヘアを垂らしたミニスカ小枝ボディーの女……痩せているというよりやつれているという表現が似合う。ツィッギーより簡単に（骨が）折れそうだ。
『我々はおでんの匂いで君達の保護者たる大人を誘拐した、昭和のカムバックを目論む組織、イエスタディ・ワンスモア』
「風見、腹が辛い」
「私もです」
『町に残された哀れなこども諸君……可哀想だが君達のご両親等々、昭和と平成一桁前半に生まれた人々は我々の仲間となった。――君達はＬＵＮ○　ＳＥＡを知らず、山田くんが座布団持たずにマイクスタンド握ってピースサインしながら歌声を響かせていたことを知らず、アリプロを、Ｃ○ｃｃｏを、倉ヨエを知らない！　ひる○びでデーモン○下を知ったが聖飢○ＩＩは解散後！　サン○ラを知ったきっ

かけは進撃！　ターちゃんをパプ○をタル○ートくんをクク○とニケを知らない！　ブロッコリーと言えばうた○リ？　ノンノン！　ブロッコリーと言えばデ○キャラでギャラクシー○ンジェルだ！　え、バンパイア十字○を読んだことがない？　死に晒せ！　死にたくなければ読め！　あと有閑倶○部とマカロニほうれん○と横山三国志、最終兵器○女、ＢＡＳ○ＲＡ、天河、すごいよ○サルさん、彼氏彼女の○情、ボク○球、彼方○ら、まほろ○ていっく、以下たくさん！　読み終わるまで寝るな！　今すぐ漫喫いけ！』

「うわ……」

風見の悲痛な色に染まった声が映像室にぽつりと溢れる。

『我々が取り戻さんとしているのは西○敏行が「もしもピアノが弾けたなら」なんて歌っていた年号もしくは平成一桁台のあの時代！　リカ○ゃん人形のアニメがあったんだよヤーイヤーイ知らないだろ！　メイドさん萌えのきっかけがまほろだってことも、眼鏡を外したら美人キャラ設定で爆発的人気を博したおねティーも知らないだろ！　他にもあるぞ全裸マント美少女のエンディングが衝撃的だった異種婚姻系漫画かと思ったら違ったときめき○ゥナイト！　漫画にも現実にも柔道界のスーパーヒロインＹＡＷ○ＲＡちゃんが存在していたこと！　結婚式のイメージは空き缶垂らしたオープンカー！　ラノベも神作品が多いぞ天高く○は流れ、○王子カイルロッドの冒険、風の○陸、ロードス○戦記、スレイヤ○ズにオー○ェン、ブギーポ○プ、還って○た娘って時代先取りし過ぎじゃないですか篠原先生エトセトラ！』

「やめろ……止めてくれ……」

彼女の振り回す刃は、それを聞くアラウンド三十歳の心を深く傷つける。耳を押さえても現実は痛く苦しい……少年時代はもう二十年近くも前だ。

『たいらと言ったら三千点！　でも今のＪＫには通じない！　ＳＬＡＭ　○ＵＮＫを読め、普通に「はらた○らに三千点」とか言ってるから！』

当たり前○のクラッカーは有名すぎる。とんでもはっぷん、必死の

パッチ、イレブン○M、プロジェクト○、猿○石、エトセトラ。昭和生まれならギリギリでリアルタイム視聴できたあれこれや流行語が鎌を持って襲いかかってくる。かつて写るン○すは年中CMを流していたのだ、お正月だけではない。忘れてはいけないボキャ天、炎のチャレンジャー、その他色々。ダッ○ュ村が火事になった後、消防車等々から村の住所を割り出した乙女達が村へ突撃したのも懐かしい記憶だろう。

オーバー三十の心を抉る言葉の刃が何筋も輝き、風見と降谷は胸を掻きむしり悲鳴をあげる。ぴったり三十の風見と一つ下なだけの降谷はまさに世代の一人だ。

『ちょっとだけよ～なんてセクシーシーンが平気でお茶の間に流れていたあの時代！　らんまが半裸で水を被っても謎の霧が局部を隠さなかったあの時代！　分かるか！　あの時代のテレビは自由だった！』

「例えに出すべき具体例じゃないな」

『日本にもっと寛容を！　もっと自由を！　車や廃ビルを爆破させる刑事ドラマを！』

「それは危険が危ない」

前傾姿勢で熱く語る女に、降谷は画面越しながら冷静に突っ込みを入れる。

『我々イエスタディ・ワンスモアは――この閉塞した日本を破壊し、懐かしく暖かい昨日を取り戻す！　ＧＰＳで居場所を管理されるスマホ社会なサラリーマン生活などお呼びじゃないのだ！　我々サラリーマンに喫茶店休憩を、工事現場の警備員にパイプ椅子と日傘を、テレビにお色気を！』

「最後はいらん」

何故だろう。こんなにも心傷つけられるのに、こんなにも心揺れるのは。両目から涙が溢れるのは。

何故だろう。顔を覆いながらも唱えたくなるのは――「イエスタディ・ワンスモア」と。

「我々イエスタディ・ワンスモアは必ず取り戻す……いや、手に入れて

みせる！　あの夕日に照らされた、味わい深く温かな街並みを！」
まだ冷静な降谷の横で風見は手を叩いた。力強く、勢い良く、激しく、手を打ち鳴らした。この情熱を、心を燃やす何かを表現するために。
彼女の謎理論、謎の扇動力に慣れている降谷でさえ心ぐらつく演説だ、風見がこうなるのも仕方ないことかもしれない。彼女がテロリストでなくて良かった。もし彼女が危険思想の持ち主であったなら、日本は鼎彩子をトップに据える革命軍に占領されていたことだろう。
降谷はため息を吐く――彼女がただのアニソンオタクで本当に良かった、と。

コナンは唇を噛み締めた。彼らの目的が分からない――昔に戻りたいという懐古の念は分からなくはないのだ。だが現実として、昔に戻れるはずがないのだ。
タイムマシンは存在しないし、超常的な何らかのパワーについても聞いたことがない。過去を取り戻すなど非現実的で、実現不可能な夢物語だ。
「お父さんもお母さんも、大人はみんなどうしちゃったの……？　おでんの匂いに釣られて行くなんて……」
「ら、蘭姉ちゃん泣かないで！」
だが、そんな非現実的な事象は既に一つ起きている。コナンたち子供には食欲をくすぐるものでしかない匂いに釣られ、大人達はぞろぞろと連れ去られてしまった。
ただのおでんの匂いだった……そのはずなのに！　彼らは正気を失っているように見えた。大人にしか分からない麻薬か何かの成分が含まれていたとか、そんな風に思えてならない。
事務所のソファーに身を強張らせて座り、未知の恐怖に涙ぐむ蘭。コナンはその手を包み込む。
「おっちゃん達がああなったのにはちゃんと理由があるはずだよ――あのイエスタディ・ワンスモアって組織が犯人だってことは分かって

るんだ、奴等を探ればおっちゃんを元に戻すことだってできるはずさ！」
「コナンくん……」
先ほどまでテレビ画面に映っていた、黒髪を胸垂らしたやせぎすの女――彼女はまるで扇動者だ。強い言葉で人々の心を操る革命派のリーダーか何かだ。
歯痒い思いに地団駄を踏みたくてたまらない。あんな女すら抱えている組織イエスタディ・ワンスモアとは、どれほどの規模の組織なのだろう？
蘭がうっすら微笑んだ。
「そう……ね！　あのイエスタディ・ワンスモアって人達を捕まえればお父さんも戻るよね！」
「うん、きっとそうだよ！」
先ずはあの狂った女を――そう考えたところで、コナンの脳内で繋がる二つの事象があった。
『我々は昨日を取り戻す！』
朗々と声を張り、大袈裟な動作で天に胸を張るイエスタディ・ワンスモアの扇動者。
「はやくキノウを取り戻さないと」
声を潜め、カウンター席でひっそりと鈴木綾子と微笑み合う鼎彩子。
鼎の言う「キノウ」に当てる漢字は機能や帰納ではない、昨日だったのだろう。鼎彩子も鈴木綾子もイエスタディ・ワンスモアの信者……町がこんな状況に飲み込まれる前の会話だったことを考えれば、二人はイエスタディ・ワンスモアのメンバーに違いない。
身近な敵――コナンは「ちょっとトイレ行ってくる！」と事務所を飛び出し鈴木園子に電話を掛ける。
「もしもし、園子ねーちゃん？」
身内からならば接触は容易いはず。コナンは唇をなめビルの壁を睨んだ。毛利小五郎を、米花町の大人達を取り戻してみせる。強く強くそう思いながら。

どうやって収拾つけるべきなんだこれ。

コナンの前に立ち塞がる社会の闇！　ネット社会は人々から余裕を奪ってしまったのか？　ネットワークに拘束された人々の怨嗟の唸り声が足元を這い回る。

「それでも俺は……未来を信じている！」

止めて！　年号が変わるなんて信じたくない！　二度の改元を経験するなんてイヤ……。だって「昭和生まれとかマジ古い、二つ前じゃん」とか言われるようになるんでしょ!?　歴史の中に葬られていく昭和の名前。おおせめて平成よ永遠に続け！（出版時の年号は平成）

次回、「昭和が遠くなった日」。来週もたのしい絶望が待ってるぜ！

その壁は高かった
その壁は高かった

年を取らないのに年度は変わる世界に住むようになりそろそろ三年――コナン映画最新作のＰＶにハレルヤと声をあげた。警察学校組メインですかそうですか有難うございます。この企画を進めたのは警察学校組箱推しオタクに違いない有難うございます。

「待ってた甲斐はあった……！」

去年は赤井ファミリーしか勝たず、一昨年はＣｏｖｉｄ１９で様々なものが延期やら取り止めになり、三年前は物理最強の男がシンガポールを舞台にド派手なアクションを繰り広げた。つまり――日本を舞台に日本の警察組織が活躍する作品の上映は四年ぶりなのだ。

ＰＶ公開の数分後、すずからのメッセージ通知がポコンポコンと音を立て始める。

『尊すぎ無理みがつよい』

『安室さんはヒロインだった？』

『公式はコ安なのか？　精神的コ安肉体的安コは私の好みだもっとやれ年下の包容力を見せてやれケツで抱け』

『生きててよかった苦悶式』

『（いちご味スタンプ）』

『首の爆弾がとてもえっちです有り難うございました』

『（太陽光〇崎の音声付きスタンプ）』

『安コに生まれしこの命華麗に捧げて見せましょう』

『神様有り難う運命のいたずらでも（安コに）巡り会えたことが幸福なの』

『（吸血鬼がとても死ぬスタンプ）』

いちご味と太陽光（サンシャイン）は私がプレゼントしたスタンプだから、有効活用されてるの見るとにっこりしちゃうよね。

なお、感染拡大やら何やらですずの旦那さんは拠点を日本に戻し、すずも日本に戻っている。つまり。

「公開されたら一緒に見に行かないかい、とな」
メッセージを送ったら即座に『もちこーす』と返事があって、前売券発売日の朝十時には『三周分そろえました』とムビチ○カード六枚の写真が送られてきた。
そして私の手元にも四枚のム○チケカード――つまり、最低でも五回は行ける。
そわそわと公開を待つなか気になったのはハニーフェイスゴリラ降谷零の身の安全。私のうっかりやミスで百万ドルの降谷零の首と胴が死に別れ（物理）になったらどうしよう、いくらゴリラでもゼロ距離の爆弾には勝てない。もしも私の悪影響で日本の擬人化降谷零が死んだら……腹を切って詫びてもまだ足りない。
不安と心配で胃痛がする。事件が終わるまで離れておくべきか――いや、待て、逆に考えるんだジョジョ……もしかしたら既に事件は終わった後かもしれない、と。
「零さん、物騒な首輪嵌められたことあります？」
「はい？」
素でこの反応なら事件発生前だろう。我らが愛すべき麗しの降谷零は何故か私に隠し事をしないから、間違いなく「高佐のウキドキマリッジ永遠に爆発しろ事件」はまだ。ふむ……作中の時間軸はハロウィンだし、どうするかは映画を観てから決めよう。
難しいこと考えて疲れた。さっさとお風呂入って寝よう、今日は早じまいして気楽な明日が待ってるぜ！
「誰にも迷惑をかけたくないし」
イキグ○レ名曲多すぎ問題。歌詞にある通り、武器は格好いいけど使われる事態は来てほしくない。爆弾も見る分には良いけど首に嵌められたくはない。ラブ＆ピース！　おっぱっぴー！
「これがっドーピングコンソメスープだ！」
Ｄ・Ｃ・ＤＣＳＤＣＳ以下略！
はっぴーうれぴーよろぴくねーと明日の私を元気付けてお風呂を上がり、寝て起きてを繰り返し――迎えたる４月１５日。魔法のムビ

○ケカードで座席を予約した映画館に向かう道はあいにくの雨天。傘を差して駅まで歩く道は少し寒く、新宿で合流したすずも少し冬に戻ったような厚着だ。寒いねーと話ながら階段を登り、エレベーターに乗って、扉が開けばもうここは映画館。

「九時からの回よね？」

「そうそう。観終わったら十一時だから……ランチは楽しみにしてて良いんだろう？」

「ええ。十二時半に渋谷のお店を予約してあるから、観終わってからグッズ買う時間は十分あるわね」

「流石ディオ！」

ランチは舌が肥えたすずに任せ、映画の席は私が取った。全身で映像を受け止めるために座席は最後尾を選んだけど、残念ながら最後尾のど真ん中は取れなかった。少し左よりに空きがあったからその席だ――最後尾ど真ん中は次の機会に狙おう。

まだ上映まで時間があるからまっすぐ向かったのはグッズコーナー、パンフレットはとりあえず一人二冊買ってフード売場へ。

でもコールドドリンクを飲み過ぎてトイレが近くなったら困る。コラボドリンクはハロウィンの花○ティーだけ――かさばるもの含め、残りは帰りに買う。

窓際のソファーでオマケのアクリルコースター開封式を行い、私には警察学校組、すずの元には松田。

素晴らしい警察映画だった……ビバブラボーハラショー警察官！ハラショーハラショーボルシチには黒胡椒、監督と脚本家は我々の要望を良く分かってる。そうだよ警察学校組だよ我々はこれに飢えていたんだ！　麻酔効かないお父さんも解釈一致です！　ってか事故の時の哀ちゃん可愛すぎでは？　こんなの命に代えても守ってしまうつまり哀ちゃんの存在〉〉〉〉高い壁〉〉〉〉私の命。

ふええ降谷ありがとう降谷、こんなてぇてぇ降谷がこの世に存在していることに解釈不一致です。こんなに格好良くて雄々しくて強い男がいるなんてアンビリーバボーがこの世にあるわけがないじゃないですか！　なんてったって奇跡体験なんだよ！　駄目だ思考回路

がおかしくなってきた私は日本語が不自由です。あいきゃんすぴーくじゃぱにーずべりーうぇる。
感動の涙をこらえつつ実写のエンドロールを眺め、ふと横を見た。すずはどんな反応だろう――お昼食べた後にもう一回観たいって言ったらオッケーくれるかな。
だけど隣にすずがいない。足元の荷物だけ残してすずがいない。何が起きた。神隠し？　映画館誘拐事件？　待て慌てるなこれはプラーミャの罠だ。
周囲を見回せどすずの姿はなく、動くのはスクリーン上の実写映像とクレジットだけ。一体何が起きたって言うんですかオンドゥルルラギッタンディスカー!?……すずの席と館内を見比べてるうちにエンドロールが終わり、後日談と来年の映画紹介で会いたかったぜシェリー。アイエエエシェリーって哀ちゃんじゃん!?　哀ちゃんナンデ!?　いやもちろん次は黒の組織で哀ちゃんがメインの映画ってことですよね分かってますとも女キャラでは哀ちゃん激推しの私のための映画ってことですね知ってるこの世はハレルヤ。冒頭の赤ずきん哀ちゃんは控えめに言っても最&高、狼さんになって襲いたいレベルの哀らしさに間違えた愛らしさに全私がノックダウン有り難うい薬です。
灰原哀ショック略してハイショックにより私の意識がスクリーンに奪われたその一瞬で、隣にすずが戻っていた。ちょっと待って理解できない何が起きたの？　館内に明かりが戻り、すずの顔もはっきり見える――めっちゃシリアスな顔してる。
「ねえ、かなちゃん」
「あ、はい」
「異世界トリップ……したことある？」
「常習してますね」
毎日が異世界トリップな私に隙はない。「見てくれこの純粋な瞳」と胸を叩いたけど、すずは背中を丸め「そうね」と呟きため息を吐く。
公開日とはいえ平日の午前中の回だからお客さんの数は少ない。何度か深呼吸を繰り返してるすずを待ってる間に、館内に残っている

のは私たちだけになった。
「あのね、実は今、夢小説みたいなことが起きたの。聞いてくれるかしら」
「ほほう、詳しく聞こうじゃないか」
夢小説展開なら私も経験者だ。連れだって席を立ち、向かうは渋谷。この映画観たあとに渋谷に行きたくないって渋ってる奴はいる？　渋谷だけに！――いねぇよなぁ！